
大魔術師と助手

沢風 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔術師と助手

【Nコード】

N0876Y

【作者名】

沢風 炯

【あらすじ】

弓術師で賞金稼ぎ、男と間違えられること多々ありのフィフイは、ふいに安定した高収入を求めて城の大魔術師助手の面接を受ける事に。

さくつと面接に受かったものの、その大魔術師アシユリーに会ってみれば「要らない」と言われる始末。負ければ即・クビの御前試合でなんとか残り、正式に助手（何故か兼護衛）となったものの、一向に「要らない」と言われ放置されるのは変わらず・・・。

そんなアシユリーに勝手についていく彼女と、彼女を面白がって

応援する城の住人達。徐々に距離の近づいて行くアシュリーとファイの物語。

プロローグ

孤島の王国があつた。

大昔には誰も知らなかった王国。

外界となんの接触もなく時を過ごしたその国は
何時でも花が咲き乱れており、とても美しく、平和で、穏やかな
国だった。

治めるのは代々女王。

優雅で美しく、聡明で、誰からも好かれていた。

??時代が移り変わり

やがて一隻の船がこの孤島を見つけると、瞬く間に外界との交流
が始まった。

文化、物資、様々なものが行き来し
いつしか王国に、外界の血が混じるようになっていった。

それは、王家にも言える事。

しかしその頃から、王国の花々は枯れていった。
憂えた誰もが親身になって世話をしても
それを拒絶するかのように、花は枯れていった。

そして、花が枯れるにつれ、孤島を囲む海が荒れていった。

徐々に外界は孤島に近付くのを止め、遂には誰も近寄らなくなつた。

海は荒れ、花は枯れ、人も病に倒れるものが多くなっていった。

それでも、王家だけは病に倒れなかった。

けれどもいつも悲しみが付き纏い、次第に莊嚴そごんな城から出る事は無くなった。

失意の底で、女王は祈る。

どうかこの海が静まるよう。

どうかこの花々が咲き乱れるよう。

どうか病が無くなるよう。

どうか、どうか???

この王国が、かつての美しい姿を取り戻すよう。

そして???

願わくば、哀れな私の娘が、愛するあの方と共にいれるよう。

その晩、女王は眠りについた。

眠りは夢を誘い、彼女を虜にする。

咲き乱れる花々。楽しそうな人々。静かに波打つ海。
あの方と幸せそうにする娘。

全てが望むもの。

全てが憧れるもの。

そんな夢を毎晩見るようになっていた。

そんな夢にずっといたいと思う様になっていた。

それが現実ならいいのにと願うようになっていた。

ある朝、姿を見せない母を不思議に思った王女は、そっと母の寝室を覗いた。

眠っている母の顔を見て、王女は少し微笑んだ。

その顔が、あまりに幸せそうに満ち足りていたから。

しかし、そっと頬を撫でて凍り付いた。

女王はもう、冷たくなっていた。
それなのにどうだろう。

その肌は柔らかく、まるで生きているかのよう。
鼓動も止まり、息もしていない。
それなのに、女王は眠っているようにみえる。

その肌は、冷たく。

しかし、生きてはいない。

いつの間にか、母の周りには、失われた花々が芽吹き始めていた。

時は流れ??

ここはクライスト帝国。

大陸の中心を統べる大国であり、その中心である王族、軍人のみならず国民さえもが国を考え、国を作っている。絶対的な信頼でこの国は成り立っていた。

その帝国一のギルドで今、運命の齒車が廻り始める??。

「高収入? そんなのいくらでもあるだろうが。ほれ、こいつなんか生け捕りにしたらかなりの大金だぞ?」

そう言つてギルドの男が指名手配書をひらひらと振る。それをうつとおしそうに見やり、相手は言葉を続けた。
「そうじゃなくて、持続出来るものないか?」

ギルドの男はぴくりと眉を跳ね上げ、訊ねた相手を睨んだ。

「だったら城にでも行け! ここは安定職の仲介所じゃねえ。」

「じゃあ城関連のないのかよ。」

「城に行きやあ分かる事だろうが!」

はあ、と相手は大仰に溜め息を吐く。わざとらしく落胆して見せた。

「帝国一のギルドだっていうから、期待してきたのに残念だな。結局他廻るしかないのか。無駄足だったな。」

相手はまだ二十歳前後だろう。細身の体は鍛えてありそうだが、別段熟練した風でもない。そんな青二才に馬鹿にされるわけにはいかなかった。

「無駄足だと!？」

「だってないんだろ? 城の仕事は城に行かなきゃ分かんないんだろ? なら無駄足じゃねーか。」

「おい… ナメた事言ってんじゃねえぞ。」

そう言うと、ギルドの男は何かを思い出したようで、忙しくリストをめくると、一枚の紙を嫌味な笑顔とともに突き出してきた。

「月収200万イルだ! 文句ねえだろうが!」

返事はせず、相手は紙をひつたくと内容を確認し始めた。

「……大魔術師の助手? 該当者も内容も、全部わかんねえじゃねえかよ!」

「面接で話すって書いてあんだろ? どうすんだ。」

「……仕方ねーな。受理しろ。」

「偉そうに言うんじゃねえよ!」

ギルドの男は荒々しく書類に判を押し、相手に押し付ける様にして渡した。こんな生意気なガキの相手などしていただくはない。

「さっさと失せやがれ!」

そう怒鳴ったものの、身体に触れて違和感を感じた。男の顔色が変わると、相手は舌打ちとともに紙を奪い取り、一步離れてから不遜に笑う。

「礼は言つといてやるよ。」

捨て台詞とともにさっさと出口へ向かう。

男は何も言えないまま、扉が閉まるのを見ていた。

クライストの城では、一つの魔法陣の前で思い悩む女性がいた。

名はニルヴァ？ナ。

呼び名はニル。

儚気だが芯の強そうな瞳は赤みを帯びた紫。端麗な容姿を飾る真っ直ぐで長い髪は艶めく銀色。少し突き放した物言いをするが、困っている者を放っておけない性格から、男女から好かれる大魔術師だ。

「さて…なんて説得しようかしら…」

今も放つて置けない事態をなんとかしようと、思い悩んでいる。すると廊下から声をかけられた。

「ニルヴァ？ナ様！いらっしやいますでしょうか？」

兵士だろう。

ニルは魔法陣を諦め、扉を開けた。

「なに？」

「はっ！ギルドから、助手の希望者が来ております！」

「助手…？ああ、あれね！どこにいるの？」

「はっ！検問室で待機しております！」

「そう、ありがとう。」

それだけ言っただけでニルは歩き出す。兵士は数秒見送っていた。

「ニルヴァ？ナ様…お綺麗だ…！」

検問室に入ると、すぐに希望者が目に入った。厚手のマントを羽織り、緊張した様子もなく椅子に座っている。その様に、思わず笑ってしまった。すると希望者がこちらを見て立ち上がった。

「私は大魔術師のニルヴァ？ナよ。」

「…弓術士のフィィです。助手を探してるのは貴方ですか？」

「……貴方、女性？」

「はい。よく間違えられますが、女です。」

ニルはまじまじとフィィを見てしまった。

薄茶の髪は肩につくかつかないくらいで、背も女性にしては高め、男性にしては低めといったところ。顔立ちも中性的で、男だと判断されるのは、少し低めの声と、落着いた、少し堂々とした態度からだろう。

「…男名を下さると便利なんですが。」

その台詞に、今度は嘖き出してしまった。

「面白い人ね！さ、座って。話をするわ。」

言われてフィフィが腰を下ろすと、ニルは少し楽しそうに話しかけた。

「ここへ来る前は何を？」

「ギルドで色々。主に賞金稼ぎです。」

「そう。こういう仕事は？」

「した事はありません。」

「魔術に興味があるの？」

「いえ、特には……」

「家事は出来る？」

「……はあ、一通りは……。自分が生活出来る程度には出来ますが……」

「そう。男は嫌い？」

「……特には……」

「他国には行ってみたいと思う？」

「……まあ、多少は……」

「面倒見はいい？」

「……面倒見た事ないのでなんとも……」

「そう。素直なのね。」

「…そうですね？」

ニルは何やら頷くと、にっこりとフィフィに微笑んだ。

「では試用期間を設けましょう。3週間頑張ってみて。」

そう言つてニルは席を立つ。すると、フィフィが慌てて呼びかけてきた。

「え！？ちよつ…今ので終わり？」

「あら、終わり。充分よ？」

「いやいやいや、仕事内容は？」

「ああ…本人に聞いて頂戴。」

「ん…？」

フィフィはまじまじとニルを見た。

「貴方の助手じゃないんですか…？」

「あら…私の助手じゃないわよ？私にはもういるもの。助手が必要なのはもう一人の方なの。あ、これ書類ね。持って行って。」

「もう一人…？」

そうそう、とニルは頷く。

「あ、あと男名ね。フィアニスと名乗ってもいいわ。好きな様に使つて。ただし王家の方々には女名でね。」

「もう一人って？」

フィフィは今にも去りそうなニルに懸命に言葉を投げる。対してニルはにっこりと笑つて言つた。

「部屋の外にいる兵士が案内するから、ついて行きなさい。じゃあね。」

そう言つてニルが手を振つて部屋を出ると、入れ替わりに兵士が入つてきた。

「ご案内致します、フィアニス様！」
「……………」

置いて行かれたフィフィは、仕方なしに少々疲れた思考を切り替えた。

（もう男の設定でいいんだな？）

取りあえず面接は通つたようだ。

今からその大魔術師の元へ案内してくれるようだし、それなら言われた通り、本人に色々訊くのが得策だろう。

そう考えて、フィフィは兵士に向き直つて頷いた。

「頼む。」

取りあえずは、ついていく他ないだろう。

城の長い廊下を淡々と歩く。

無機質なところもあり、中庭に面した暖かいところもあり、長くいたらおかしくなりそうだと、フィフィは兵士に視線を移した。

「あ…俺がつく大魔術師ってどんな人？」

あたし、と言いかけて慌てて直す。兵士は気付いた様子もなくフィフィの話に答えた。

「アシュリー様ですね！あの方は、大陸屈指の大魔術師です！！」
「ふーん。で、性格は？」

得意げな様子をさらりと流し、フィフィは気になるところを訊いてみた。

しかし兵士は、途端に勢いを失う。

「性格は…」

嫌な予感がする。

「なに？」

「…いえ…そうですね…非常に関心が薄いといいますが…」
「何に。」

「その…色々なものに……」

何と言ったらしいのか、と兵士は考え始めてしまった。

（とんでもないナルシストじゃねーよな…？）

不安に思っただけ聞いてみる。

「自分にしか興味がないとか？」

「いえ！そのような事はございません！」

即答だ。

「ならその曖昧な言い方はどこから来るんだよ。」

「はあ…申し訳ございません…何分色々難しい方です…」

「難しいって…頑固親父かよ。」

「いえいえ！あの方はまだお若いですよ。フィアニス様と同じ年頃ではないかと。」

「んじゃ気難しいんだな。」

「気難しい…そうですね…そういうところもお持ちですね…」

「はつきりしねーなあ。」

「はあ…申し訳ございません…」

すまなそうにする兵士を一瞥し、フィフィは話を止めた。一体どんな人物なのか、非常に不安がある。

（いくら城の人間だと言っても、変人だったらさっさととんずらするか。安定収入は諦めるしかねえな。）

そんな事を思っていると、目的の場所についたようだ。兵士が廊下の端へ避け、姿勢正しく直立していた。

「こちらがアシュリー様の回廊になっております！」
「へー。」

兵士が指し示した方を見て、フィフィは戸惑った。そして、先程の兵士の台詞を思い出す。

「……ん？……回廊？」

「はい！大魔術師様お二人には、皇帝陛下より、回廊が与えられております！そして、こちらがアシュリー様の回廊になります！」

「……………は？」

フィフィはもう一度その“回廊”を見る。廊下から続く扉を少し開けると、中にはまだ通路が続いており、今まで歩いてきた廊下から少し外を覗くと、その“回廊”とやらがL字型にまだ続いているのが容易に分かった。

「……………で？案内はここまででってか？」

若干威圧的なフィフィの言葉に少し気圧されつつも、兵士ははっきりとした口調で答えた。

「は、はい！お二人の回廊には、それぞれに属する者しか立ち入る事を許されておりません！」

「あた…俺も属してねえだろ！？」

「はっ！ニルヴァ？ナ様に渡された書類をお持ちですから、危険はありません！」

「危険ってなんだよ！」

物騒な言葉に慌てて食い付くと、兵士はそれを聞かなかった事にし

て続けた。

「ともかく、お進み下さい！私はニルヴァ？ナ様より、ここまでの案内を任されております故、これにて失礼させて頂きます！」

言うだけ言っつて兵士はくるりと踵を返し、逃げるように離れて行く。

「おいお前！」

怒鳴るように呼ばれて兵士はさつと振り返り、敬礼した。

「御武運を！」

「はいっ？」

そのまま急ぎ足で逃げて行ってしまった。

「っ……………」

脱力してそれを見送る形となったフィフィは、ニルヴァ？ナから手渡された書類をまじまじと見つめた。

（ほんつとにコレがあれば大丈夫なんだろうな……………見ても分かねえ。）

書類と睨み合う事、数分。

（行くしかねえ！）

ぐっと拳を握りしめ、フィフィは回廊の扉を開けた。

ギイイ????、と嫌な音がする。

（うわっ、幽霊でも棲んでそうだな！）

若干ビビってしまう。だが、顔も見ずに帰るわけにいかない。それに上手く行けば安定した高収入が待っているのだ。

「アシュリー様ー！ギルドから、助手として来ました、フィアニスですー！！」

これでもかという程の大声でアシュリーなる人物を呼ぶ。

こんな広そうな回廊、隅々まで探す気は毛頭ない。大体、あまり人は入れないようだから、これだけ騒げばきっと出てくるだろう。

「アシュリー様ー！！」

肝を据えて、出来るだけ大股で歩いていく。

「アシュリー様ー！助手のフィアニスですー！！」

何度も叫んで自分でも煩いと思い始めた頃、通路に並んでいる扉の中に、少し大きなものを見つけた。

「……………？」

明らかに他とは違う。というよりは、石の壁に扉のように切り込みが入っていて、中央に光る石が埋めてあった。

（怪しいよなあ……。ここにいんのか？）

じっくりと観察し、その割りにはあまり考えずに、その石に手を当ててみる。

（……………）

「何も……………っ!？」

何も起こらないと思った矢先、石は眩しく瞬き、扉がすうっと消え去った。

その先は、真っ暗で何も見えない。

「……………へえー……………すげえ……………」

しげしげと消えた所を観察し、そつと足を踏み入れた。

真っ暗だったそこは、ファイファイが踏み入れた瞬間、左右の壁に次々と火が灯っていき、下へ続く階段をはっきりと見せた。

「……………アシュリー様ー!？」

階段の奥へと叫ぶ。しばらく待つと、微かに何か音がした。

（……………変な実験とかしてて突然化け物とか出てきたらどうしようかな……………）

なんて事を思いつつ、ゆつくりと警戒しながら石段を降りてゆく。

「アシユリー様ー？いますかー？」

声のポリウムを落とし、慎重に足を進める。

「アシユリー様ー？」

階段は長いようで短く、簡単に突き当たりへ行き着いてしまった。
目の前には、木製の扉。

（…これ…開けるんだよね？）

不安を抱えながらも、この向こうに何かいる、という確信があった。

（よしっ！）

意を決して、扉を押した。

こちらは、回廊の入り口の扉が嘘に思える程軽く、滑らかに動いた。
それに感心しつつもフィフィは中を伺い見る。

「…アシユリー様ー？」

部屋は薄暗かったが、かろうじて部屋の様子は分かった。
どうやらいくつか大きな本棚があり、本は床に散らかっているよう
だ。中央には大きな机があるのが分かった。

（ようするに散らかしっ放しなんだな、アシユリーとやらは。）

「……………」

(!?)

部屋の中央からうめき声が聞こえた気がした。人の気配もする。お目当ての人物かと思い、そうつと無造作に散らばる本を避けつつ机によると、誰かが机に突っ伏しているようだった。

(ん…?)

その“誰か”の耳元が、弱々しく光っている。興味を惹かれて覗き込んでみると、耳飾りの宝石が、僅かに光を放っているようだった。

(すげえ…光る石なんてあるんだな…)

その幻想的な光景を思わず観察してしまう。その視線に気付いたかのように、光がこちらを“見た”気がした。

(んっ!?)

まさか、と思った瞬間だった。

「!?’

飾りの宝石から眩いばかりの光りが飛び出したかと思うと、凄い早さでフィフィの周りを飛び出したのだ。

「なっ…!?’

とつさに逃げようとするが動きが早過ぎて進路が見えない。光はフイフィの眼前を眩しい光で埋め尽くす。

おまけに鈴を振るような音が、どんどん大きくなっていつて、ひどい耳鳴りがしてきた。

（眩し…それに、耳が…！！）

眩しさのあまり視界を奪われ、耳を塞ぐ為に身体を動かせば、それにすら耐えられず、バランスを崩した。

まばゆい光。

ひどい耳鳴り。

フィフィは完全に目を閉じ、耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んで動けなくなった。

その時、積み上げられた本の山を崩してしまったのだが、フィフィはまったく気付けない。だが机に突っ伏していた人物は、その大きな音で目を覚ました。

（！？…人？）

「ウエスペル止めろ！」

明らかに侵入者を威嚇している使い魔に命令を下すと、光は一瞬驚いて固まり、ちらりとふてくされたようにして耳飾りの宝石に戻った。

「ああ、ありがとうな。お陰で安心して寝れたよ。」

そう言つて機嫌をとると、嬉しそうに、可愛らしい鈴の音で答えた。光りも大人しくなっている。

そして、部屋の灯りが瞬時に灯った。

（で、この人は…？）

侵入者と言えど、城からなんらかの許可が出ている筈だ。でなければこの回廊へ入る事すら出来ないのだから。

しかしウェスペルの事を知らないとなると、王家からの許可を受けた者ではないだろう。

つまり“賓客”ではない。

（可哀相に。もろにウェスペルの攻撃を受けてるとなると、ニルの仕業か…？）

- 02 - (後書き)

ご意見、ご感想をいただけると舞い上がります

話しかけても今は音が聞こえないだろう。
そう思つて、そつと瞼を手で覆う。

一瞬びくりとしたが、眩しさを軽減出来る事に安心したのだろう。
しばらくそのまま大人しくしていた。

そして、そつと手を外してやると、ゆつくりと瞼を上げた。

(……なんか…ぼんやりしててよく見えねえな。)

目の前に誰かいるのは分かる。先程机に突つ伏していた人物だろうか。

それと、部屋の灯りがついていた。

(あ、見えてきた…)

だんだんと目に映る風景が鮮明に見えてくる。すると、目の前にいる人物が男だと分かった。

若い。歳は同じくらいか、もしかすると下かも知れない。

明るい灰色の髪は肩くらいで、首の後ろで一つに纏めているものの、纏めきれない髪が両頬にかかっている。瞳は深い群青色だった。顔立ちは若干幼く見える。

その人物は、瞼からどけた手を、耳を塞いでいるフィフィの手に重ねてきた。

その行動に戸惑ったが、任せた方がいい気がした。

しばらくそのまま、やがてそつと手を離す。つられるようにフィ
ィも耳から手を離した。

「……聞……る？」

聴覚もやられていたらしい。フィィが困った様に眉根を寄せると、
その人物は大きな声で話した。そうすると丁度よく聞こえる。

「しばらくすれば戻るから。」

聞こえた言葉によくよく頷いた。それを確認すると、その人物は立
ち上がり、奥の扉へ向かった。

（まだ奥があつたのか…あいつがアシュリー様か？わっかいなあ…
さっきのニルヴァ？ナ様も若かったけど…）

そんな事を思っていると、アシュリーと思われる人物が戻ってきた。
手にはポットとカップだ。足音がさっきよりも鮮明に聞こえた。

（耳も戻ってきたかな…）

そう思い、ゆっくりと立ち上がってみた。よろめく事もなかったの
でもう大丈夫だと思われる。

試しに口を開くと、しっかりと自分の声が聞こえた。

「アシュリー様ですか？」

そう声をかけると、アシュリーと思われる人物は一瞬フィィィを見て固まり、続いて何も聞こえなかったかのように椅子を勧めてきた。

「まあ座つて。お茶煎れたから。」

「……………」

言った本人はすでに座ってカップに口をつけていた。

「失礼します。」

腰掛け、有り難くお茶を頂く。

「書類は？」

言われて一瞬なんの事かと思ったが、慌ててニルに渡された書類を差し出す。

アシュリーと思われる人物はそれを受け取って、書類をじっくり眺めた。

「……………助手？」

書類を見たまま、訝し気にそう言う。フィィィはギルドで見た紹介状を思い出して頷いた。

「それで来た筈です。」

「…筈って……………」

「で、アシュリー様ですか？」

そう言っと、アシュリーと思われる人物はしばらく悩んだ。

（何悩んでんだよ。二者択一じゃねえか。）

大丈夫だろうか。ちょっと不安だ。

「俺がアシュリーだけど…」

（やっぱそうだな？何悩んでたんだ？）

そんな様子には気付かず、アシュリーは怪訝そうにフィフィを見た。

「なんだって、助手？」

「俺に聞かれても…そういう紹介だったんで。」

（なんで本人が分かんないんだ？）

「ニルヴァ？ナ様には、試用期間三ヶ月と言われました。」

「ニル……！」

驚いた次には、頭を抱えてしまった。ちょっと心配になってくる。

（もしかして助手って、頭のか？）

と、勝手に失礼な事を考える。すると、はっと顔を上げてフィフィを見た。慌てて姿勢を正す。

「…なんで希望したの？」

「…安定した高収入の為です。」

言われてアシュリーは慌てて書類を見直した。

「“月給200万ソル”？」

「アシュリー様は御存知なかったんですか？」

「……………」

（冷や汗でてんど。大丈夫かあ？）

口を開けたままわなわなしているアシュリーを見て、フィフィは丁寧に頭を下げた。

「でもまあ取り合えず助手なんで。よろしくお願いします。」

ぺこり、と頭を下げる。アシュリーはそれを呆然と見ていた。が。

「……………要らない。」

「は？」

まさかと思って聞き返すと、さっきとは打って変わって、驚愕する様子も戸惑いもなく、迷惑そうな顔をしていた。

（…なんだコイツ）

思わずぴくりと口の端が動く。

「助手は要らない。俺には必要ない。」

「…そう言われても。」

言い返すのだが、ずい、と書類を押し付けられる。

「ニルにそう言って。」

一方的なアシユリーを無視して、フィフィは拒む。

「困ります。書類にはもう契約済みになってるじゃないですか。」

「でも要らないんだ。帰って。」

「帰りません。せめて三ヶ月は。」

睨み合う事しばし。アシユリーは何かに気付いて押し付けていた手を引っ込め、青ざめた。

「き、君…！」

（あ、そう言えばそうだった…。）

失念していた自分を少し恥じる。だが、済んでしまった事態は仕方がない。それよりもこの仕事を白紙にされては困る。

「なんと言われても帰りません。書類上では契約は済んでるし、せめて三ヶ月の試用期間は認めて下さい。」

フィフィが女である事に気付き一瞬怯んだアシユリーだったが、直ぐに体勢を立て直した。

「……ニルと話してくる。」

そう言って出入り口へ向かってしまう。

「ちょっと！俺はどうすれば？」

「そこに座つてて。」

思い切り睨みつけられた様な気がするのは気のせいだろうか。

「あつ」

さつと書類をかすめ取つて、奪えないように上へ掲げる。

「書類は預かります。話し合いに必要ないでしょ？」

「……………」

（このやろつ、ってか？思ってる事顔にでてんぞ、アシュリー様。怖かねえけどな。）

「ね？」

につこり笑つてやると、アシュリーは一瞬目を丸くした。が、ちやつかり書類を奪還^{だっかん}したかと思うとぱつと身を翻して部屋を出て行った。

（……………なんか、ガキみてえ。）

小さな子供が急ぎ足で駆けて行く。周りの大人達は微笑んで、いつも通り道を開けてやる。

子供は大魔術師の回廊へやってくると躊躇い無くその扉を開き、入

る。そのままの軽い足取りで奥へと進み、絵が沢山飾られた部屋へ入ると、目当ての絵を見つけて駆け寄り話しかけた。

「しるべ」よ。主のもとへしもべをいざなえ。」

すると絵の人物は子供に手を差し伸べる。子供は素直に手を差し出し、絵は子供の手を取り、回廊の主の元へと誘った。

「ニルさま！」

幼い声が主を呼ぶと、ニルは愛おしそうに声の主を迎えた。

「お帰り、ユンファ。」

「ただいまもどりました！」

ユンファと呼ばれた子供が駆け寄れば、ニルは優しく抱きとめた。

「あの、アスさまが来るみたいです。」

困った顔でユンファが言うと、ニルは笑った。

「やっぱりね。あの男の事だから、絶対文句言いにくと思ったわ。」

そう。予期していた事なのだ。

気難しくて面倒くさがりの彼の事だ。助手なんて要らないと、それはもう不機嫌な顔をしてやってくるだろう。

「ニル！」

ほら。

噂をすればなんとやらだ。ユンファがさつとニルの後ろへ隠れた。

「あら、なあに？すごい顔ね。」

ニルは笑いを堪えながらぬけぬけと聞いた。

「なにじゃない。これはどういう事？」

転移方陣から現れたアシユリーは、予想に違わず思い切り不機嫌な顔をしていて、ニルは大笑いしそうになるのを堪えた。
差し出された書類の内容を分かっていながら見直してみる。

「…貴方の助手の契約書よね。これがどうかした？」

「どうかしたじゃない。なんで勝手にギルドに依頼なんかするんだ。」

「今更どんな文句言ったって無駄よ？もう契約済みなんだから。」

「俺は同意してない！」

ぐつと拳を握りしめてアシユリーは怒鳴った。ニルは慣れたものだ。

「忙しそうだから気を使ってあげたんじゃない。それに助手でもいなくちゃ、貴方の回廊って足の踏み場もないじゃないの。」

「気を使っただって？有り難迷惑って言葉知ってる？それに君は転移方陣で来るんだからあんなところは通らないだろ？」

「貴方に用があるのは私だけじゃないでしょう？それに貴方の部屋きたら、キノコでも生えそうよ。あれは衛生上良くないわ。」

「君が助手になるわけじゃないんだから関係ないだろ！」

「怒鳴るものじゃないわ。ユンが怖がつてるじゃないの。」

わざと大きな溜め息を吐き、わざとユンファを優しく撫でる。それを見て予想通り少し勢いが落ちたものの、アシュリーはしつこく抗議する。

「とにかく助手は要らない。君の書術なんだから君が破棄させて。」

「もう契約成立なのよ。陛下も了承済みなのよねえ。破棄させるなら貴方が陛下に申告してくれない？ 貴方の助手の事なんだし。」

「俺は同意してない。なのに君が勝手にやったんだ。君が破棄させるのが当然だろ？」

「私が言ったところで陛下は本人を連れて来いとおっしゃる筈よ？ どうせ貴方も行く事になるの。」

「どうして俺が！ 悪いけど君が引き起こした事態に俺が付き合う義理はないだろ？ あの助手を連れてさっさと破棄してきて。」

強情なアシュリーらしい。これしきでは引き下がらないか…そう考えて、ニルは大仰に呆れてみせた。

「貴方って人は！ 可愛い女の子を路頭に迷わせるの？」

その台詞に、一瞬固まるアシュリー。

「な、し、知ってて…！？ いや、そんなの関係ない！とにかく俺には要らないんだから！」

「女の子がギルドで指名手配者を追うのは普通だって言つの？」

「そ、そんな事言っていないだろ？ 俺は」

「そうやって生きてきたんだから死ぬまでそうしろって言うつもり

「？」

「だからそうは言っていないだろ！」

「じゃあ助手くらい認めてあげなさいよ。」

「いや、だから…だったら君の助手にすればいいじゃないか。」

「私にはユンファっていう助手がいるもの、ねえ？」

にこりとユンファに微笑みかけると、心底嬉しそうに微笑み返してくれる。この無邪気な笑顔が、ニルには必要なのだ。そんなユンファを、アシュリーは複雑そうに見つめた。

「助手っていうより…」

「だからね、彼女は貴方の助手なの。ね？分かるでしょう？何も四六時中一緒にいるとは言わないわ。普段はあの回廊で、お互いに好きに過ごしていればいいのよ。ね？そして、仕事へ行く時は連れて行くだけでいいのよ。ね？これだけの事よ。」

「……………」

悩み始めたアシュリーに、決め手とばかりに笑んだ。

「それに彼女は弓術士よ。賞金稼ぎしていた期間も長いし、貴方の苦手な体術を補ってくれるわよ。もう不意打ちで情けない姿を晒さずに済むじゃない？」

「……………」

羞恥と怒りで言葉をなくすアシュリー。身体がぶるぶると震えている。

「ね？分かったら早く戻って契約書の書術を完成させないと、確実に陛下からお呼びがかかるわよ？」

「……っ！」

契約の書術は、一番最後の段階を残している。それを長く放っておくと、城の魔力に歪みが生じて守りに影響を及ぼしかねないのだ。悔しさも加わってニルを直視出来ないアシュリーは、やがて黙ったまま、足音荒くニルの部屋を後にした。

「……………」

「…ニルさまあ…」

「な、なあに？」

「……ユンファはこわかったんですけど…ニルさまはたのしかったんですか？」

「すごく…！」

言っただかと思うと、ニルは声を上げて笑い出した。

「あ、アシュリーったら、本当に、面白いわ…！あんな屁理屈で、一生懸命考えるんですもの…！」

しばらく不安げにニルを見ていたユンファだが、やがてつられて笑い出した。

「…ニルさまがたのしかったなら、ユンファもたのしいですっ！」
「いい子ね、ユン」

ぎゅっと抱きしめると、小さな手が懸命に抱き返してくる。その仕草が愛おしくて、ニルは切ないくらいに安らぎを感じていた。

「納得いかない！」

ばん、とアシュリーは机に八つ当たりをする。フィフィはそれを見やる。

この大魔術師、戻ってきたと思ったら、もう三十分くらいはこうして考えては八つ当たり、を繰り返している。

最初は適当な所で諦めさせようと思っていたフィフィだが、アシュリーの行動がどうにも子供っぽく、呆れてしまった。

（これでも大魔術師だもんなあ。あんまり早く才能が認められたから甘やかされたんだろうな、きっと。）

勝手にそんな事を思って眺めている。

あくびをかみ殺し、部屋を眺める。

アシュリーをまた見る。

あくびをする。

部屋を眺める。

それにも飽きてくると、やる事はひとつだろう。

「……はあ……もうこうなったら、なんとか契約破棄の条件を満たすようにしないといけない。」

そつようやく決意して振り返ると。

（ん？）

穏やかな寝息をたてるフィフィの姿がそこにあった。いつの間にかウェスペルが、好奇心も露にフィフィの寝顔を覗き込んでいる。

「……………」

穏やかな光景だ。こうしてみると、さすがに女に見える気がする。

「……………」

（なんだってギルドなんか？）

大きな屋敷の奉公くらいは、大抵の娘ならやっているのに。

（そして、どうして助手なんか？）

本当に安定した高収入の為だけなのだろうか。怒りや不満をひと時忘れ、アシュリーは珍しい来訪者に思いを巡らせた。

くすくす、と笑い声が聞こえた。眠っていた自分に気付き、重い瞼を無理矢理開ける。

「……………」

（あれ？…ああ、ここ…城か。いくら敵がいなかった、熟睡し過ぎたな。）

んー、と思い切り伸びをして、部屋を見回す。部屋の灯りは灯ったままだ。

(…ほんと、本が多いな…本棚があるのに殆ど外に積んであるし…)

そう言えば、と思ってアシユリーを探す、あいにくこの部屋にはいないようだった。

(もう一つ部屋があるみたいだったよな…)

その扉を探す際、ふと気付く。

「あれ？」

(そういや、ここって地下だっけ。)

窓がないのだ。

(これじゃ時間がわかんねえな…ここへ来たのが昼間だったから…夕方か夜か…)

窓がないと分かっている、ついつい見回して探してしまう。だが、無いものは無いのだ。

フィフィは立ち上がって部屋の探索を始めた。主がいないのだから、暇な事この上ない。それに、仕事内容がはっきり分からないのだから、何もしようがない。

「どれどれ…」

まずは机の上を調べる。大きめの木の机だ。その上には灯りを灯す不思議な球体。ペンと、インク壺。元は立派な机なのだろうが、ここにも本が散乱していてアシユリーが突っ伏していた辺り、そしてフィフィが寝ていた辺りしか片付けられていない。

「……………」

そのままにしておく。

部屋は広く、天井はとても高く、そこへ伸びるように背の高い本棚が並んでいる。

（あんなに高い所にあって…あいつに本が取れるのか？）

考えてみて、軽く頷く。

（大魔術師なんだから、取れるか。）

取り合えず部屋中を見て回ろうと思い…本で身動きが取りづらい事この上ない。という事態に気付く。

「…………まあ、仮にも助手なんだし。片付けても文句言っなよ。」

今まだいない主に言い捨て、フィフィは片付けを開始した。

その頃、アシュリーは回廊を出て、城の廊下を考え事をしながら歩いていた。

（契約破棄の条件は…身元、仕事の態度、人格、これらに著しく問題がある場合…それから…王族の不満を買っ…あとは…くそ、俺が面接すれば済んだじゃないか！！ニルのやつ…！！）

そんなアシュリーを人々は避けて歩く。中には物珍しげにみる者も

いるが、それもその筈、アシュリーはあまり回廊から外に出ない。それに加え、城に上がったのはわずか十歳の時。わざわざ王が隊を組んで迎えに行ったのだ。この国のみならず、他国でも噂となり、この世界でアシュリーを知らない者はいない。

そんなアシュリーだが、魔術を使う時以外は至って普通の若者であり、魔術以外の事には疎い。今も考え事に熱中している為、足下すらも見えていない。

この状況で真正面から来る人を避ける事は不可能だった。

「うつ…!？」

顔から見事に激突し、ついでにぶつかった人物にがしつと抱きとめられた。

「なっ!？ぐ、苦しつ…」

「なにをやってるんだお前は。」

体軀の良い身体を無理矢理引き剥がし、アシュリーは慌てて顔を上げた。

「……なんだお前か…」

げんなりして言うと、相手は眉根を寄せて言い返す。

「なんだとはなんだ。友が悩んでいるようだったから声をかけてやったのに。」

「いつでも上から物を言うよなお前は。」

アシュリーの目の前にいるのは黒尽くめの男だった。長身の体に黒

い服を纏い、黒いマントを羽織り、腰に下げた剣の鞘も黒ければ、髪も目も黒い。黒という色彩は近寄り難い雰囲気を作るものだが、加えてこの男は目つきが鋭く、自分が気に入った相手にしか口を開かない。ついでに言うところ、無表情。近寄り難い事この上ない。

「リディ。突然、お前に助手をつけるって言われたらどうする？」

アシュリーがそう訊ねると、リディことリディオスは顎に指をあて、しばし考えた。

「…そうだな…追い返す。」

なんとも簡潔だ。

「じゃあオルクスあたりが勝手にお前と契約させてたら？」

オルクスというのはリディオスの親友で戦友で上司である。

「…………殴る。」

「俺の場合、それはニルだから出来ない。」

「なんだ。ニルヴァ？ナにそんな事をされたのか。」

「勝手にギルドに申請して、勝手に面接して、勝手に契約したんだよ！」

怒りに両手を握りしめ、力説するアシュリー。リディオスはそれを興味深そうに眺める。

「それで、助手を追い返したくて考えている訳か。」

「そうだよ！お前も考えてくれ！」

「殴り倒して放り出せばいいだろう。」

「…出来ない。」

「ああ、武術は駄目だったな。俺がやってやるつか。」

「いや！それは駄目だ！」

物騒な発言に慌てて止めに入る。

「…何故。」

「いや…その…あつ！」

慌てた次は考え込み、何やら閃いたようだ。

「そうか…！その手があった！」

そのままアシュリーは走り去って行った。

「……………唐突だな…」

残されたリディオスは一人ぼやき、何事もなかったかのようにまた歩き出した。

- 04 - (後書き)

書術……文字に魔力を込める呪術。書いてあるものには出来ない。

魔力を込めて書かれた文字は”書かれた場所、もの”に効力を発揮する。

例えば壁に書かれればベニヤでも鉄のような強度をもたせたり、重要書類に書き加えれば特定の人物しか見れないようにしたり出来る。

片付け（とは言っても散乱していた本を、本棚に沿って積んだだけ）が終わったフィフィは地下の部屋にいるのも飽きて、ここへ来た時に降りてきた階段を、今度は上がる。

消えていた階段の灯りは、フィフィが一段目に足をかけると再び灯った。

「この仕組みすげーよなあ……」

昇りきり扉を開けると、背後で一瞬にして灯りが消えた。

「すげー……」

感動しつつも地下を出る。そして、来た時に見かけた通路の扉を、一つ一つ開けてみる事にした。念の為にあの書類は持っている。

一つ目の扉を開ける。

「……………本棚？」

本棚が並ぶ部屋だった。

二つ目の扉を開ける。

「…台所？…埃だらけじゃねーか……」

もう何年も使っていない感じの台所だった。

三つ目の扉を開ける。

「……あいつ地下しか使ってないのか？」

「まあ、廊下かよ……」

「取り合えず閉める。」

「まあ、廊下かよ……」

「……ただのただっ広い部屋か？」

「……かなり大きな部屋だ。しかし調度品は何もない。ここも埃が積もっていた。」

「その次はもう、回廊を出る扉だったので、先程の廊下へ続く扉へ戻る。興味本位で廊下を進んでみる事にしたが、若干不安に思ってた。扉は大きく開け放しておく。」

「廊下は必要性を疑うくらい短く、すぐに突き当たりの扉に行き当たった。」

「また扉……」

「ちらりと入ってきた扉を確認する。開いているのをしっかり見ると、目の前の扉の取っ手に手をかけた。」

「っ！？」

「まるで触れたのが分かったかの様に扉がひとりでに開いた。音もなく。開ききるとぴたりと止まった。扉から見える部屋は、いたって普通に見える。」

「……………」

もう一度、最初の扉を確認した。

「……………どうするかな…」

ここを止めたとして、あの地下へ戻ってもする事がない。かと言って先程の道筋にある部屋は埃だらけ。もう日も暮れるだろうから、回廊の外へ出て兵士に不審がられるだろう。よって。

「行くか。暇だし。」

フィフィは未知の扉からの誘いを受け入れた。

部屋は大きめで、壁には大きな絵が沢山飾られていた。どれも風景画のようだが、あいにくフィフィは芸術に興味はない。部屋を見回すと、奥へ続くアーチがあった。扉はついておらず、閉じ込められる心配も無さそうだ。アーチから覗くと、そこはこぢんまりとした部屋であり、大きな扉の様な窓と、大きめの寝台が置かれていた。他には何もない。

窓へ寄って扉を開けた。

「……………へえ…」

視界いっぱいに広がるのは宵の空。藍色の空の下、地平線の際は暁色と水色の空がまだ残っている。そこだけ見ているとまだ明るさを感じるが、天を見上げればもう星が瞬いている。フィフィはこの、不思議な宵の空が大好きだった。

「良い場所だな…」

思わず頬が緩む。窓の外は十分な広さに張り出しており、フィフはそこから下の様子を確認した。この部屋の外はどうやら中庭になっているようだ。今も見周りの兵士が見えた。

「…気に入った！文句言われる迄はここに居座ってやる！」

満面の笑みで一人頷き、良く整えられた寝台へ倒れ込む。寝台はフィフを優しく受け止め、やがてその重さを受け入れる。

「あー…すつげえ良い気持ち…」

目を閉じれば仄かに…植物だろうか。良い香りがする。手探りで自身の装備を確認した後、フィフは速やかに睡魔に身を委ねたのだった。

その頃、またも城内を小さな子供が走っていた。しかしこの時のユンファの表情はとても慌てていた。行き交う大人達も少し心配そうだ。ユンファとすれ違ったりディオスは、たった今自分の主から聞いた事を思い出し、密かに溜め息をついた。

「まったく…我が主は物好きだな…」

「…しるべ」よ！主のもとへしもべをいざなえ！」

慌てて人物画に叫ぶと、絵の人物も少し心配そうに手を差し出し、道を通した。ユンファは道から走り出て主を探す。

「ニルさま！たいへんです！」

さつと見渡すが主の姿は見えない。とつくに主の就寝時間だと気づき、それでもたつた今聞いた事を伝えなければと思い、ユンファは寢室の扉に駆け寄ってそつと叩く。

「ニルさま…おやすみしてるのにごめんなさい。どうかおきてください…」

縫る様な声に反応したのか、又はまだ眠りが浅かったのか、ニルはすぐに扉を開けてくれた。昼間は結わえている髪を下ろしていて、そつするとまるで女神のように見えた。

「…ユン…どうかしたの？転ばなかった？」

ふわりと顔を包まれて思わずうつとりしそうになるが、ユンファは一生懸命気を引き締めた。

「はい！大丈夫でした。それよりニルさま、たいへんです！」

幼い助手の切迫ぶりに、ニルは微笑みそうになるのを我慢する。

「一体何？落ち着いて話してごらんなさい？」

「は、はい…」

言われた通り、ユンファは落ち着きを取り戻す為に深く呼吸をした。

「…たつた今へいからの使いが来て…明日の…アスさまのじ

よしゆをしんさする“ごぜんじあい”をするそつなんです！」

(…そつきたのね…)

ニルは思わず舌打ちする。

(即刻解雇出来ないからって、もっともらしい理由を付けたのだわ…)

驚きと同時に怒りも湧いてくる。

(アシユリーの我が俤に悪のりしてるんだわ、あの方は…！)
「ニルさま…」

はつと我に返るとユンファが怯えた顔で見ている。

「あ…ごめんね…ユン。貴女に怒っているんじゃないのよ？」

そう言って抱きしめると、幼い手が縋り付いてくる。

「ちょっと…アシユリーにお仕置きしてやらないとね…」

物騒な言葉にユンファは慌てて主を見上げる。

「お、おしおきですか？」

「ええ、そうよ。あの馬鹿にはお仕置きというものが必要なのよ。誰もが甘やかすものだから、ああいうひねくれた性格になるのだわ…」

言いながら小さな頭を抱しめる。その時のニルの目がちつとも笑っていないかったのを、ユンファは見る事が出来なかった。

そんな事も知らず、フィフィは朝の眩しい光に目を覚ました。

「まぶし……」

ぼそりと呟いて布団の中に潜り込む。そうすると完全に日の光が入らないので、安眠出来ると言うものだ。実に心地良い眠り。フィフィは満足そうに溜め息を吐くと、再び睡魔の誘いに応じた。

そんなフィフィが見当たらない事を、アシュリーは喜んでいた。

（宣告は必須だけど…御前試合までに見つかれば問題無し。慌てふためいてボロ負けしてくれば文句無しだ！）

上出来、と呟いてうきうきと書類を進める。大魔術師といえど、仕事は魔術での応戦だけではない。国中の魔術に関わる問題と向き合わなくてはならないのだ。ペンを持つ手元にはウエスペルがいて、楽しそうに書類と主を見比べていた。が。

「!？」

急に部屋の温度が下がったような気がして、アシュリーは慌てて部屋を見渡した。

「あっ……」

あるものを見つけ、途端に青ざめるアシュリー。ウェスペルまでもがさつと耳飾りに逃げ込み、震えている。

「な…なに…？」

必死に平静を装おうとするアシュリー。だがそれも氷の女神には通用しない。

「一体どういうつもりなの？」

腕組みをして冷気を発するのはニル。穏やかな口調がさらに冷気を呼んでいる。そんな威圧感に、アシュリーの虚勢はあつと言つ間にひびが入った。

「ど、どういうつて、何が？」

目を見れず、しかしかううじて椅子から立ち上がる。

「シラを切るつもり？ 貴方が彼女にしようとしている仕打ちよ。」
「仕打ちなんて…必要な事だろ？」

そんなに必要だとは思っていないのが、目を合わせず縮こまっている事でバレバレだ。

「助手がどうして御前試合をしなくてはいけないの？ それも、負けたら即刻クビだなんて……」

「俺の助手が、ただのぼんくらじゃ困る。足手まといになるだけだし、迷惑なだけだ。そうだろ？」

「あら、じゃあ彼女が勝ったら助手は決定ってわけね？」

「そんなの、勝てるわけない。」

「…………へえ？」

しまった、とアシュリーは口を覆ったがもう遅い。ニルの目はひととアシュリーを見据え、ちっぽけな罪悪感にぐさりと深く突き刺さった。

「勝てないって決まってるわけね。それをあの方に唆したわけ！」

そう言われ、アシュリーは必死に言い返した。

「ニルが言ったんじゃないか！体術を補うだろうって。だからそれぐらいの実力がなきゃ、絶対に認めないからな！」

意外な事にニルは反論しなかった。だが、次にした深呼吸がアシュリーの不安を煽る。
そして。

「……………分かったわ……」

低く唸る様な台詞。思わずごくりと唾を飲む。

ニルの抑えた態度に膨れ上がる不安。だが、それが分からない焦燥。

アシュリーは知らず、ニルを不安げに見つめていた。それを受け止めたニルが不敵な笑みを浮かべる。

「…今更そんな顔をしたって駄目。」

むっとして反論しようとしたが、先程とは違うニルの微笑に凍り

付いた。

「節度が分からない悪い人には“お仕置き”よ。アシュリー」

?? 過去この言葉を聞いて、いい思い出になった試しがない。

ニルは凍り付いたアシュリーに一瞥をくれると、転移方陣を使わず、地下からの階段をずんずん昇って行った。

フィフィは心地良い微睡みの中にいた。ふかふかの寝台に、ふわふわの布団。静かな空間。

しかしそんな空間に何かが侵入してきたのを感じて、若干不機嫌になる。

（一体なんだよ？）

そう思っただけで、特に警戒はしなかった。

「起きなさい。フィアニス！」

（ん？）

凜とした強い口調。フィフィは僅かに瞼を持ち上げたものの、暗闇が現実へ向かう事を拒む。

（まあいつか。）

そんなフィフィに、女神の逆鱗が落ちたのは言う間でもない。

「起きろと言ってるのよ！」
「うわあぁっ！！？」

布団をはぎ取られたただけならまだしも、身も凍るような冷気が一気に襲いかかってきたのだ。

「なっ……！？」

驚きに目を白黒させるフィフィに、ニルは容赦なく言い放った。

「午後から貴方は御前試合をしなければならぬわ。そして勝たなければ駄目よ。」

「……………はい？」

「返事は“はい”よ。何が何でも勝つのよ。もしくは方々に実力を認めさせなさい。いいわね。」

「待つて下さい！なんの話ですか？」

「御前試合と言った筈よ？わたしが手を貸します。だから、勝ちなさい。」

「勝つて…あー、御前試合？って、俺が勝てるようなもんなんですか？」

一瞬止まった。

「…だから手を貸すと言っているのよ。」

「ほんと待つて下さい。大体何の為に？」

嫌な予感がする。

「貴方の主の我が俤よ。後はそれを面白がっている方々の要求よ。」
「俺は恰好の暇つぶしですか。」

「自覚したなら良い事だわ。もう時間がないの。さっそくわたしの回廊へ来なさい。」

「いやいやいや！俺はしませんよ！？要するにたかがギルドの賞金稼ぎじゃ勝てない試合なんですよね？」

そう言ったフィフィに、ニルは真剣な面持ちで近付いた。そして、ゆっくりと言葉を発する。

「……いい？これはもう、決定事項なの。勝つ覚悟を決めなさい。勝てなければ貴方は…即刻クビよ。」

「……………は？」

「さ、行くわよ。」

「は！？」

「？？アシユリー…ウィルレイユの力場において、我、ニルヴァ？ナ…ハディエスが道を紡ぐ。我は主の友なりて、誓いを共にするものなり。その誓約において我が力を許し給え？？」

歌う様な魔術の声音。それに誘われて視界は揺らいでいく。

事をしつかりと噛み砕いている暇もなく、フィフィは強制的に移動させられたのだった。

太陽が空高く昇り、闘技場を明るく照らす。観客席にはすでに沢山の人が集まってきていて、城の関係者の他に、貴族、そしてわずかに庶民の姿もあった。クライスト帝国では全ての民に平等に機会を与える??例えそれが貴族でなくとも。

さて、今回の御前試合は少し様子が違うようだ、人々は興味深々に時を待った。どうも“あの”ウィルレイユに何者かが付くらしい、と。

??公に御前試合をすると...かなりの腕前と考えていいだろうな。

??いやいや、噂ではこの出かも分からない者を叩き出す為らしいぞ。

??そんな事より、運が良ければ滅多に公衆へ姿を見せないウィルレイユ様を拝見出来るのよ。

観客がそんな話に盛り上がっている中、王族の付近にいる者達は複雑な面持ちをしていた。ひそひそと話しているのは、リディオスとオルクスだ。

「この御前試合の理由を聞いたか？」

リディオスが闘技場を見ながら話しかけると、オルクスも闘技場から目を逸らさずに答えた。

「ああ。」

「アシユリーが強行したから、ニルが裏で何か仕掛けてくるだろうな。」

「そうだな。」

「肝心の弓術……今朝ニルが連れて行ったそうだ。」

「……………条件が変わったな？」

「ああ。ニルが陛下に進言したらしい。」

負けたら即クビ。という条件だったのが、負けても王族やリディオス達が十分な実力であると判断すれば、フィフィは助手として認められるのだ。

「認めるか、否か？」

「……………」

オルクスの問いに、リディオスは妖しく笑う。

「それは、あの者次第だな。」

その頃、闘技場の裏では??。

「本当にこれで大丈夫なんですか？俺、勝てる気がしないんですが……」

「私が授けたのよ。失敗はあり得ないわ。」

「いや、勝てるか聞いたんですが……」

「いい？負ければ即刻クビなのよ。何度も言ってるでしょう？」

「いやだけど……」

「つべこべ言っていないでしゃんなさい！注意する所をしっかり抑

えておけば大怪我はしないわよ。」

「本気でやらなきゃいけないんじゃないですか！何が“儀礼的な試合だから怪我の心配はない”ですか！」

と、フィフィとニルが騒いでいた。

闘技場にファンファーレが鳴り響く。白鳩が晴天の空に舞い、観客席から歓喜の声が上がる。

「ああ…始まったよ…」

フィフィが情けない顔でそういうと、傍らのユンファがにこりと笑った。

「大丈夫ですよ！全力でにげつつ、やる気でいってください！」

「…お前の“やる”って言葉が物騒に聞こえるのは気のせいだよなきっと。」

小さなユンファはニルの助手らしい。見た目に変わらず中身も幼いと思うが…しかし、聞いた限りでは、戦闘ではそうとう強いらしいのだ。

（こんなちっこくても強いんだもんなあ…。俺、思いっきり場違いな気がしてきた）

溜め息をつく、小さなユンファが心配そうに覗き込んでくる。そうされると、思わず安心させようと笑顔を向けてしまうのだった。

『では、弓術士ファイアニス！御前へ！！』

「え、もう！？」

慌てるフィフィにユンファは精一杯応援する。

「さあいつてください！アシュリーさまにおしおきです！」

「この相手はアシュリーじゃないだろ……」

げんなりしつつ、大歓声の中に足を進める。

一歩白煉瓦の上へ足を踏み出すと、闘技場に集まったかなりの数の観客を確認できる。

（まじでやるんだよな……一試合限り。……で、誰だ？）

闘技場の舞台へ上がり、試合相手を探すフィフィ。だが誰も上がってくる様子はない。

（あれ？）

そう思った直後、信じられない言葉が聞こえた。

『この度の御前試合、太子たつての願い入れにより、太子自らが弓術士の実力を測る事となりました！』

どつと蜂の巣を突いたようなどよめきが広がる。それは王席の周りでも変わらない事だった。

「えっ…？殿下がお出になる…？」

驚くニル。横を見るとアシュリーまで驚いていた。

（殿下自ら…？まずいわ。あの方は“戦神”だもの…もう！公平な条件をと進言しただけなのに！）

ちらりとオルクスとリディオスを見ると、視線を闘技場から逸らさない様になっているのが分かった。ニルは確信を持って問う。

「…お二人とも…御存知でしたね？」

「…我々は主に忠実だ。他言無用。」

「……………」

オルクスの若干楽し気な声に、無表情で頷くリディオス。ニルは複雑な思いで闘技場のフィィィを見つめる。

（……殿下直々にお相手下さるなら、わざわざ派手な戦い方をして興味を引かせる必要は無くなったわけだけど…大丈夫かしら…瞬殺されるような事はないわよね。まあ…どうやら度胸は座っているし、大丈夫よね？）

一抹の不安を覚えるニルをよそに…。

（は！？太子って…どーすんだよニル様！！）

フィフィはもう動揺しきっていた。そんなフィフィの前、対面する舞台に一人の青年が上がる。すると割れんばかりの歓声が上がリ、思わず耳を塞いだ。

（すっげ…王太子は人気者だな…）

顔を若干顰めつつ相手を見やる。そして、その手に持つ、あまりにも不釣り合いな武器に目を止めた。

（まじ…？）

太子の噂は聞いていた。外貌は白い肌に黄金色の短く波打つ髪。切れ長の瞳は豊かな大地の色。そんな外貌とは裏腹に、太子でありながらオルクス、リディオスにも引けを取らない腕を持つ。戦う姿は戦神と例えられる程だという。

（それにしたって、あれは…ちょっと無理があるんじゃない…）

美しき戦神の手には、巨大な斧。身の丈程の。肩に担いでいるところを見ると、見た目と違いあまり重量はないのだろうか。太子の足取りも重さを感じない。

（もし見た目通りの重量なら、あの細腕じゃ満足に扱えないだろうし、見た目程の重量がないなら威力は小さい。ああいう類いは振りかざして使うから…まだ勝機はあるか…？）

そう吟味していると、当の太子から声がかかる。

「先手をやろう。」

「え？」

言ったきり、太子はフィフィを見据えて笑んでさえいる。

（なめられたもんだな…。実力は否定しねーけど、腹立つ。）

「じゃあお言葉に甘えて。」

そう返すと、太子は軽く頷いた。それを受けて闘技場の銅鑼が鳴り響く。フィフィは迷わず床を蹴った。

思い切り床を蹴り、低く跳躍しながらフィフィは行動を決めていた。

（…見た目がどうだろうと“戦神”と異名を持つ程だ。様子見なんてしてたら負けるのは確実。なら????）

床を再度蹴り、太子の懷に転がり込む。フィフィが銅鑼の合図とともに床を蹴ってから太子へ一撃を繰り出すのに、一秒もかからなかっただろう。その早さに闘技場全体が息を呑んだ。しかし、驚愕したのはフィフィの方。

（まさか…）

太子の鳩尾を狙って繰り出された右足は、当たるところか掠りもしない。冷や汗を感じつつ気配を追って視線を動かせば、太子は舞台の中心に降り立ったところだった。??軽やかに。

（あんな大斧持って、こんなに早く動けるもんなのか!?!）

フィフィの動きを予測していたから動けたのだろうか。なんにし

でも最初の一撃が外れたからといって次の手を考える余裕などあつてはいけない相手だろう。フィフィは困惑しつつも気を引き締め、直ぐ様太子を狙って弓をつがえて矢を放った。

僅かに動いてそれを交わした太子は、フィフィに笑う。

「弓術士が始めに蹴りでくるとはな。一人で戦う事に慣れているとみえる。」

その間にもフィフィは近付いて、確実に太子を倒そうと攻撃を繰り出す。

「当たり前だ！」

近付いては体術を仕掛け、距離を取っては、弓をつがえる姿がはつきりと確認出来ない程の早さで矢を放つ。

（ちっ…隙がねえし、何より…）

太子は避けるばかりで一向に反撃の素振りがない。その顔に笑みが浮かんでいなければまだ、勝機を感じられたかも知れないが。あいにく太子は不敵な笑みを浮かべていた。

（油断ならねえな…余裕なのが見て取れる。）

背後に回って蹴りを繰り出すも、また避けられる。

再び距離を取ろうと後方に跳躍した、その時だった。

（なっ…！！）

一瞬前までなんの素振りもなかった太子が、フィフィを追っていた。その、激しい程の気迫。強い眼光。振り上げた斧の柄がフィフィを狙う。

?? 捉えた。

そう、目が言っている。

（油断してた…！）

繰り返される単調な攻防に、知らず慣らされていたのだ。迫る、衝撃の時。フィフィは渾身の力で斧の柄を捉え、自らの体を、その軌道から逃す。

舞台の床、岩を砕く音。と同時に体が床に投げ出され、勢いで床を転がった。急いで身を起こせば、少し先に大きく砕けた床と、大斧を肩に担いでこちらを見ている太子が見えた。

「…はは、見た目通りの斧じゃねーか…」

思わず口をついて出た言葉に、太子は軽く笑った。

「油断していた割にはよくやる。だが、その程度では認められんぞ。」

「……………」

太子は沈黙するフィフィをしばし見やり、すぐに動いた。はつとした瞬間には頭上で斧を振りかぶっている。

（くそ！）

体勢を立て直す暇もなくその場を逃れる。しかし先程までとは打って変わり、太子はフィフィを追い立て始めた。

（まずいわ…）

ニルははらはらしながら試合を見守る。

（忘れてるんじゃないでしょうね？この私がわざわざ指導したというのに。ユニにも手を貸してもらっているのよ？）

焦りで頭が回らないのだろうか。だとしたら。

（……その程度だとしたら、私の目は衰えたのだわ。）

ニルは複雑な思いで舞台を見つめる。

思い切り水平に振りかぶられる斧。フィフィは屈んでそれを避け、太子の腕目掛けて蹴りを繰り出す。斧を持つ手元を狙ったそれは、半回転して避けられ、逆に太子の蹴りをくらう。からくも両腕でそれを受け、フィフィは後方に吹き飛ばされた。身を捻って無事に着地したものの、太子はもう走り出している。

（あたしは獲物か…）

爛々と輝く目がそう言っている。

（まさに戦神か。あんな大斧持って軽々と動き回られちゃあな…）

離れた距離から一足飛びで接近してくる。それを見ながら、ファイは行動を決める。

（持久戦はあんまり得意じゃねーんだよな…やってみるか。）

その為に女神にしごかれたのだから。

頭上から降り立つ戦神に片手を向ける。くすり、と笑ったのが分かった。

??やってみる。

そう、言っている。

（やってやるよ！）

「エウエラの加護を！」

そう叫んだと同時に斧が振りかぶられる。僅かな距離と時間を稼ぐ為にかがみ込み、万一の為に弓をつがえた。
??その時。

「……………まさか…魔術…？」

呟いて、アシュリーはもう一人の大魔術師を見た。彼女は満足そうに舞台を見ている。

（まだ人を見る目は衰えていないのだわ…）

頭上から助手候補者を追撃していた太子は、降り立つ直前に体勢を崩した。観衆があつと思つた次の瞬間、着地場所にいたフィフィは大きく後方へよろめいた。

（いつて…）

着地体勢を崩した太子が、構えていたフィフィに蹴りをくらわせたのだ。それを受けた左腕を気にしつつも、太子へ向けて矢は思い切りつがえてある。対する太子も、大斧を構えていた。しかし、お互いにぴたりと狙いを定めたまま動かない。

「……………一体どうなってるんだ…？」

呟くアシュリーに、友は囁く。

「二人共相手の間合いにいるのだ。あれでは動けん。」

動けない、という言葉に訝し気な様子のアシュリー。太子は”戦神”だ。間合いなどあまり意味を為さない筈。するとリディオスは戯けたように肩をすくめた。

「普通なら。」

「じゃあ……………」

言葉の意味を察したアシュリーは若干嬉しそうに言うが、リディオスははっきりと言いつつた。

「それをしないのは、これが“御前試合”だからだ。ここは戦場ではないからな。」

「……………！…！」

絶句するアシュリーの横で、ニルがさも嬉しそうに笑っていたのは言う間でもない。

（くっ……いてえ……もうもたねーかも……）

先程から左腕が震え始めている。今はまだ狙いを定めていられるものの、あと数分したらぶれてくるに違いない。どうしようかと考え始めた時？？

（ん……？）

太子が笑んだ。

今までとは違う雰囲気、フィフィは注意深く相手を観察する。すると相手は戦闘態勢を解き、フィフィに背を向け、王席へ向けて歩き出したのだ。

「は……？」

戸惑いつつもしばらく太子の背に狙いをつけていたフィフィだが、次に太子が行った行動に啞然とした。太子はいきなり立ち止まると、王席へ向けて声を張り上げたのだ。

「国王陛下。ただ今の手合わせにおいて、私ヴィルジウスは、弓術士フィアニスは大魔術師アシュリー、ウィルレイユの助手兼護衛として、十分な実力があると判断致しました。我が名を持ってこれを誓います。」

言い終えると優美な礼をとる。観客席からはどよめきと拍手が送られているが、フィフィは啞然としていた。

（クビはなしか……？）

本当なら嬉しい筈だが、あの太子自らがそう宣言する事に、なんとも言えない不安が沸き上がった。たった今数分戦っただけだが、相手の性格はなんとなく分かるものだ。

そんなフィフィには目もくれず、太子は舞台を下りて行く。どよめきは拍手に変わっており、太子に認められたフィフィには割れんばかりの拍手と喝采が注がれている。

いつまで立つてもぼうつとしているフィフィを見兼ね、兵士が退場を促した。舞台の裏で待っていたのは、大魔術師の幼い助手と、屈託ない笑顔の女神だった。

「よく頑張ったわね。これで貴方のクビは守られたわ！」

「はあ……」

「でんかのたいせいをくずすなんて、そう出来ることじゃないですよ！」

「はあ……」

ニルとユンファは一齐にフィフィに抱きつく、じゃあ一度城へ戻って支度なさい、と言って去って行った。

「はあ……」

まだ不安は拭えない。本当にこれで危機は去ったのだろうか。そう考えていると、またも見兼ねた兵士が闘技場の外へフィフィを誘

導した。そこで数人の女性に引き渡され、促されるまま城へ戻ったのだった。

城へ戻り、回廊に戻るのか思いきや、フィフィは女性達に連れられて城の一室に来ていた。城内の構造が分かっていないのだから、城の一室、としかいいようがない。

「さあ、では本日はこちらの部屋をお使い下さい。」
「え、ここ？」

思わず問い返したフィフィに、女性達は目配せして笑う。

「フィアニス様が女性だと言う事は聞き及んでおりますわ。ですから、そう仰る気持ちも分かりますけれども、男性に不用意に近付く事は本来はしてはならない事です。特にこの、城の中では。」
「は？」

なんでフィフィの性別を知ってるんだと思ったが、それよりも台詞の内容が気になる。

「ですから、正式なお言葉を頂くまではこちらの部屋をお使い下さいませ。」
「いや、何が不用意なわけ？ここにいろと言われたらここに居るけど、変に勘違いされちゃ困る。俺があいつの側にいたいと思うわけないだろ？」

まあ、と女性達は笑ってしまつくらい同じ動きをする。

「あら、アシュリー様に憧れる女性が多いんですよ?」

「何もお感じにならない?」

「呆れはしたけど。」

「呆れるですって! 一体何に?」

「まさかアシュリー様から何か言われたんですの!?」

「いや、行動が…」

「「行動!?」」

「……………」

明らかに言葉を都合良く解釈している女性達に、フィフィは若干怒りをもつて言い置いた。

「ちよつと聞け! 俺はそういう話に興味ねーから、騒ぎたいだけなら俺がいない所でやってくれ!」

「「……………」」

啞然として見つめる女性達。ちよつと言い過ぎたかと思つたが、女性達は声をあげて笑い出した。

「なあんだ、そうでしたの!」

「フィアニス様が女性だと知らされた時はもう、アシュリー様が婚約相手を留め置くのだ思いましたわ!」

「なんでそうなる!?」

「だってアシュリー様ったら女性に興味がない! というか、もしかしたらお嫌いなようでしたので、そんな方が女性を側に置くとなれば…ねえ?」

「…………… 極端だな…っ」

「ともあれ、フィアニス様が恋愛に興味のない方で安心致しました。

「心から嬉しそうにそう言われると、フィアニスは居心地の悪さを感じた。そんな事で嬉しそうにされても。」

「あ、申し遅れました。わたくし達は明後日までフィアニス様のお世話を命じられております。どうぞよしなに。」

そう言った女性達はみな楽しそうに笑いあい、その純粋さからか、表情が幼く見える。

（可愛いなあ…）

フィフィは彼女達に強く好感を持ったのだった。

「ところで、先程の試合で殿下に何をなさいましたの？」
「何って？」

聞いた所で侍女達はフィフィに詰め寄る。

「殿下の体勢を崩した時ですわ！」

「戦神とも呼ばれる御方に何をしたんですの？」

「もしかして魔術をお使いになるんですの？」

畳み掛ける彼女達に、苦笑いで答える。

「いや…ニル様に教えて貰ったんだよ。それで、この図形をくれて…」

手を差し出すとここぞとばかりに覗き込んでくる。

「まあ…これは…」

「あら…ニル様がこれを…」

「良いものを頂きましたわね」

微笑む侍女達に、今度はフィフィが問いかけた。

「知ってるのか？これがなにか」

「まあ。御存知ありませんでしたの？」

「フィアニス様はこちらの生まれではありませんの？」

「これは大魔女“エウエラ”を繋ぐ図形ですわ。」

??クライスト王国ウル暦53年。公式には発表されていないが、王国の誇るもう一人の大魔術師に付き人が付いた。大魔術師の名はアシュリー＝ウィルレイユ。付き人は助手兼護衛を任じられた、フィアニスことフィフィ＝ルセ。

弓術を操り、後にエウエラの絶対的な加護を受けたと語られている。

- 06 - (後書き)

フィフィ、ようやく助手になりました…！

主人は認めてないけど（笑）

アシュリーの元へと戻ったフィフィに、正式に主人となったアシュリーはさも面倒臭そうに言い渡した。

「主に関わる人達に紹介するから。」

「……はあ……」

表情から口調から雰囲気から、体全体以上のものから嫌がっている気配が感じられる。元から歓迎されてはいないが、こつもあからさまだと、怒りを通り越して呆れてくる。

一言伝えたアシュリーは、そのまま黙って地下からの階段に足をかける。ちらりと振り返る動作から、付いて来いという意味だと悟ったフィフィも黙ってついて行く。

（観念してくんねーかな……）

そう思うも、アシュリー相手ではなかなか難しそうだ。

アシュリーは地下を出てからは一度も振り返る事なく、（というか存在を忘れていないだろうか？）廊下をすたすたと歩いて行く。

歩いているうちにフィフィはある事に気付いた。

（……すっげえ視線。）

侍女らしき人達から官吏のような人達まで、誰もがアシュリーに叩頭しつつ、物珍しげにアシュリーとフィフィを見ているのだ。

（あたしは分かるけどなんでアシュリー様まで？）

一步、いや、五歩程前をゆくアシュリー本人は全く気に留めてい

ない…というよりも目に入っていないようだ。
(この人…目の前しか見えないタイプか…?)

この予想は、アシュリーが2つ目の角を曲がる時に確信に変わった。

壁に激突しそうになったのだ。

激突しなかったのはアシュリーが珍しく我に返ったからだが、まだ出会って間もないフィフィにはそれが珍しい事だとは分らない。
(どんくさ…)

大魔術師として城に召し抱えられているアシュリーだが、いざという時役に立つのだろうか、フィフィはぼんやりと思った。

アシュリーがフィフィを紹介する為に一番始めに訪れたのは、鍛錬場だった。夜が開ける前にも関わらず、とフィフィが訝しんでいると、鍛錬場に人影があるのに気付いたのだ。

(こんな朝早く…打ち合い?)

人影は二つ。激しい打ち合いの音が聞こえている。近づくアシュリーは足を止めず、何事か呟くとウィスパーが鈴を鳴らすように身を振るわせた。その音が届いたのか、人影達は打ち合いをやめ、こちらを向いた。

(あ……)

弱い日の光に照らされ、その二人の正体が分かった。闘技場で見た二人だ。

ニルの教えでは、上から下まで黒尽くめの男がリディオス。淡い金髪に濃い肌の色、紺青色の耳飾りをしているのがオルクスだった筈だ。

「お前が早起きとはな。」

少し意地悪く笑ったのはオルクスだろう。王師軍隊長だと聞いて、勝手に初老だと思っていたが、若い。それになんとか剣士という気がしない。魔術師のような雰囲気を持つ男だ。

「仕方ないだろ……」

不服そうに返すアシュリーに、リディオスだろうと思われる男が無表情に言う。

「ニルにしてやられたな。」

「……！」

その言葉にショックを受けるアシュリー。それを見てオルクスは可笑しそうに笑う。

「やっぱり……ニルがあの方に出るよう言ったんだな！」

「それは違うぞ。殿下が出ると仰られたのだ。……それにしても、やり過ぎたのだ、お前は。あのままやれば陛下からお叱りを受けるところだったぞ。ニルヴァーナに感謝するが道理。」

諭すオルクスに反論出来ないアシュリー。

しばらくそれを眺めていたリディオスは、飽きたように先を促した。

「それで？」

「え？」

「後ろの弓術士は連れて歩いているだけか？」

「あ……」

おいおい、とフィフィは呆れる。本気で忘れられたのか。

「……俺の助手になったフィアニスだ。」

「よ、よろしくお願いします。」

（sonだけか……！）

という突っ込みが入れないのが歯がゆい。すると、オルクスが苦笑しながら付け足した。

「ファイアニスは弓術士で、護衛も兼ねると聞いているが？」

「…そう。」

「そう言えばニルからエウエラに加護を授かったようだな。」

リディオスが言うと、アシュリーは思い出したようにはっとファイを振り返った。

「そうだ！」

驚くフィフィの手首を掴むと、その手の平を覗き込む。

「なん…ですか？」

するとあとの二人も覗き込んで来た。

「あの一？」

若干冷や汗混じりに問うフィフィ。

「正式な図形だな。」

「樹力が混^じぜてあるな。」

「ニルはどういうつもりなんだ…？」

「どういう事になってるんですかね。」

フィフィのやや強めの口調に、オルクスは下から覗き込むようにして言った。

「エウエラに加護を受けている、という事だ。」

「は？」

全く分からず問い返すフィフィに、オルクスは楽し気な笑みで答える。

そして、フィフィから離れて本来の目的に戻った。

「挨拶が遅れたな。私は王師軍隊長オルクスⅡファイセラ。頻繁には会わんだろうが、よろしく頼む。」

「ファイアニスⅡルセです。こちらこそよろしく願います。」

王師は、王直属の軍だと聞いている。それを、一見若く見えるオルクスが束ねているとは…フィフィは失礼にならない様に気を付け

ながら、つい眺めてしまう。口調や態度から充分な貫禄のようなものを感じるのだが、しかし、若いと思う。

「俺は黒騎のリディオスⅡローグだ。」

「ファイアニスⅡルセです。よろしくお願いします。」

黒騎とは、太子の騎士だ。クライストでは古くから、王位継承者の為の騎士がいる。

騎士は必ず王位継承者から色を授かり、それを名乗る。ヴィルジウスの騎士は、黒を授かった。故に黒騎というのだ。

リディオスはニルヴァーナの教え通り黒尽くめだった。黒い髪、黒い鎧、黒い服、黒い靴。腰に下げている剣の柄、鞘までが黒い。所々銀の飾りがあるが、ほとんど目立たないくらいのものだ。

表情は動かず、口調も淡々としている。馴染みにくく、近寄り難い雰囲気があった。

「あとはルキセオードか？」

問いかけるオルクスにアシュリーはただ頷いた。それを見兼ねたようにリディオスが言う。

「改めてニルヴァーナとユンファにも紹介しておけ。」

「…分かってる！」

心底不服そうなアシュリー。リディオスとオルクスはそんなアシュリーを面白そうに眺める。

「ルキはどこにいる？」

「あいつならまだ部屋にいるだろう。」

「寝てるんなら後で…」

「お前と違って我々は早起きが仕事だからな。まだ部屋にいますと言っても、問題はなかるう。」

「……………」

オルクスの言い草に、不機嫌に輪が架かるアシュリー。が、溜め

息を一つして、それを抑えた。

「じゃあ……」

「ああ、ではな。我々も戻るとしよう。陛下がお目覚めになる頃だ。」

「

二人の元を去りながら、フィフィはアシュリーに尝试してみた。

「アシュリー様。」

「………なに」

思いつきり嫌そうだ。

「助手がそんなに嫌なんですか？」

「………いても仕方ない。」

「ならニル様はなんで助手をつけたんでしょうね？」

「…そんなの、ニルが世話焼きだからに決まってる。」

（…もしかしてニル様…アシュリー様にお目付役が欲しかっただけか？）

そう考えて、フィフィはニルの不敵な笑みを思い出した。

（………あり得るかもな……）

「…貴方の仕事内容を聞いても？」

するとアシュリーは若干驚いたようにこちらを振り返った。

「………聞いてどうするの。」

「自分の仕事の参考になります。」

「………」

始めて会った時からそうだが、フィフィにはアシュリーの反応するポイントが不思議だ。なんだか掴めない。

「………魔術に関する問題の処理。」

「ですよねそれは分かるんで詳しくお願いします。」

「………小さな問題は書面で解決法を返す。事の重大さによっては

俺が直接行ったりする。呪薬を渡すだけの事もある。その場合は兵士に受け渡しを頼む。…くらいかな。」

「……なるほど、分かりました。ありがとうございます。」

「……それで？」

「はい？」

「それで、今言った事に対して、何をするつもり？」

（…驚いた。意外としっかりしてそうだな…）

こんな形でも、アリュリーがフィフィに向き合ってくれるのが嬉しく思えた。

「そうですね…書面で解決出来る問題なら俺の出番はないでしょう。ですが貴方が出向く場合は…」

この城へ来てから初めて、アシュリーはまともにフィフィの目を見ていた。それが嬉しく思えて、思わず頬が緩む。

「全力でお守りします。」

迷いない言葉。真っ直ぐな視線。

フィフィの強い意志を感じた気がした。

「……………そう…」

それだけ言つてまたさっさと歩き出す。だが、ウィスペルが驚いて耳飾りから飛び出してきた。

さかんに顔を覗き込まれ、アシュリーはウィスペルを睨む。

「……なに？」

そう言われると、ウィスペルは納得したように二人を見比べ、耳飾りへ戻っていった。

「どうかしましたか？」

「……………何も」

それだけ言つて、前を向いて歩き出す。フィフィは首を傾げつつもついて行った。

階段を上がって城の二階となる部分へ行く。今度はしっかり周りを見て歩いている様子のアシュリーは、どこにもぶつかる事なく目的の部屋へ辿り着いた。

他の部屋の扉より少し立派な、しかし、どこかさっぱりとした装飾の扉を叩くと、中からはつきりと返事が返ってきた。

「ルキ、アシュリーだ。今いいか？」

「アシュリー様？…お珍しいですね。」

すると、扉がゆっくりと開かれ、一人の青年が姿を現した。濃い緑の瞳が印象的な、凛々しさを感じる青年だ。早朝にも関わらず、着替えは済んでいると見えて、フィフィは先程のオルクス言葉を思い出して関心した。武人は早起きなのだ。

「おや、そちらの方は…？」

穏やかだが意思の強そうな声音は耳通りが良い。

「今日から俺の助手になったフィアニスだ。」

「フィアニス＝ルセです。よろしく願います。」

「そうでしたか…ああ、御前試合は拝見させていただきました。殿下相手にあれほどの戦いが出来るとは、なかなか出来る事ではありません。尊敬致します。」

「いえ…試合じゃなかったら無事じゃ済まなかったでしょうけど。」

ルキと呼ばれた青年は、あの試合だけでヴィルジウスの力量をほぼ正確に量ったフィフィを、驚きも露に見つめる。そうされると、フィフィも驚いて言葉が出ない。

言葉が続かない二人に居心地が悪くなったかの、はたまた部屋

に戻りたいだけか、アシュリーは踵を返そうとした。

「じゃあ、紹介しに来てただけだから…」

「……さようですか。…フィアニス様。名乗りが遅れて申し訳ありません。私は王師、黒騎を除く全軍の指揮を任されており、従騎のルキセオードと申します。以後、お見知りおき下さい。」

ルキセオードの礼に、こちらでも深く礼をして返す。アシュリーはさっさと踵を返して歩き出しているので、フィフィもそれに従った。

「…オルクス様も、リディオス様も、ルキセオード様も若いんですね。クライスト城には優秀な若者が集められてるとか？」

そう問うと、アシュリーはなんでももない顔でさりとらった。

「優秀だったのがたまたま若かったただけだろ。」

「そうですか。…若いと言えば、ユンファは最年少ですよねえ」

「……そうだな…」

ふと、考え込むような声。しかし問いかけるとすぐに元の調子に戻った。

「ユンファはどうしてニル様の助手に？」

「…君は知りたがりだな。」

「知らない情報が多過ぎるので。」

「俺は騒がしいのは好きじゃないんだ。」

「騒いではないいつもりですが。」

「……………」

フィフィの存在を無視する事に決めたらしい。ようするに不毛な言い合いも苦手というわけだ。

（苦手な事が多いよなあ…）

フィフィはちよつと心配になった。

「アシュリー様！」

呼ばれてアシュリーは足を止め、声の主を探す。すると兵士がこちらへ小走りに駆けて来ていた。

「どうかした？」

「はっ。ニルヴァーナ様より、ファイアス様を借り受けたいの伝言でございます。」

「……ファイアスを？」

「俺を？」

問い返すアシュリー達に若干戸惑いつつ、兵士は伝言を続けた。

「はっ……。なんでも重要な事柄だとか……」

アシュリーは一瞬フィフィと視線を合わせた。

「……行ってくれば？」

その言い方に反論しようと思ったが、先に兵士が声を上げた。

「では、御承諾の意をお伝えして参ります！」

「あっ……」

フィフィが何を言う間もなく走り去って行く兵士。アシュリーなど、すでに歩き始めている。

「……じゃーお言葉通り行ってきますねー」

思い切り投げやりな言葉をかけると、さすがにアシュリーが振り返るのが見えたが、フィフィはさっさとその場を後にしてやった。

ところで、まだ数日間の付き合いだと言うのに、ニルヴァーナという大魔術師からの呼び出しには何かあるのではないか、という不安が沸き上がってくる。そして、それが確信に近いものだというのが怖い。

（そつだよな。まだ一週間も経ってねーじゃん……）

だというのに。

ニルがどういう人間なのか、大体分かる気がする。

先程の兵士に案内されてニルの回廊まで来ると、フィフィは目を閉じて出来るだけ深呼吸をした。

「あれ？」

見ると、回廊の扉の前にニルの小さな助手がいて、こちらに手を振っていた。

「ユンファ様。フィアニス様をお連れ致しました！」

兵士が敬礼をする様が異様だ。だが、その顔には柔らかな表情が浮かんでいる。それに答えるように、ユンファも笑顔を返す。

「ごくろう様でした！ありがとうございます。」

もう一度敬礼し、兵士が去っていくと、ユンファは回廊の扉を開いてフィフィを招き入れた。

「さあ！フィアニス様、どうぞお入り下さい！」

「あ、ああ…ありがとうございます、ユンファ。」

「あ、わたしのことはどうぞ、ユンとよんで下さい！」

純粋な笑顔が愛らしい。答えてフィフィも笑った。

「じゃあ俺の事はフィーって呼んでいいぞ。それに、同じ助手同士なんだし、ユンのが先輩なんだからさ。敬語なんて使う必要ないって。」

「せんばいなんて…わたしはほんのこどもなんです…」

「歳は俺が上。助手歴はユンが上。ほら、同等だろ？」

そう言うと、ユンファは嬉しさいっぱいの顔を上げた。

「……！じゃあ、ともだちになってくれますか？」

“友達”という言葉に面食らうフィフィだったが、すぐに頷いた。

「そりゃもう、喜んで！」

「……ありがとう！！」

喜んではいやぐ姿がまた、愛らしい。

（癒されるなー）

そんなユンファに手を引かれるのが、また癒されるのだった。

さて、そんなユンファの主が氷の女神（…この一件からは俄然悪魔のように思うが）なのだという事を、本人に会うまでつかの間忘れてしまっていた事が悔やまれる。すっかり油断していて、ついつい話に適当に相槌を打ってしまったのだから。

「いらっしやいフィアニス。無事にアシュリーの護衛になれて良かったわ。」

穏やかな笑みに迎えられ、フィフィは促されるまま椅子に腰かけた。

「お陰様で。ありがとうございます。でもあれ」

「殿下の体勢を崩す機会なんてそうそう出来ないのよ？とても良かったわ。」

「それって俺の事を喜んでくれてるんじゃないやなくて殿下の」

「そうそう、アシュリーにはきついお仕置きになったろうから、今後は貴女の事を認めざるを得なくなるわね。無理矢理追い出そうなんて考えないでしょうから、安心なさい。」

「……………ありがとうございます。」

ニルの笑顔と口調に完全に主導権を握られ、フィフィは口を出すのを諦めた。ニルの隣でユンファがにこにこ笑って話を聞いているのも、脱力を誘う原因だ。

「それでね」

ニルが楽し気に話を進める。なんだか無邪気に楽しんでいるように思えて、ついつい気が緩む。

何と言っても、まだ出会って一週間も経っていないのだ。

「アシユリーの事だから、貴女に城内の事や仕事について、積極的に教育や指導をするとは思わないのよね。どう？」

これには素直に頷いた。

「はい。今日はオルクス様、リディオス様、それと、ルキセオード様に紹介して下さったんですけど、名前だけ言ってもらって。助手は必要ないから要らないと言ってますし。必要ないと思われるなら教えようとは思わないでしょうね。」

ニルは気持ちよく相槌を打つ。

「ええ、そうでしょうね。どうせふてくされているんでしょう。殿下やオルクス様にかかわれてるでしょうから。けど、何も分からないんじゃない、満足に助手も出来ないわね？」

何かひっかかりつつも、本当の事なので頷く。

「まあ、書類なんて分かりませんし、お出かけなら付いていくしかないですし……？」

「それじゃあ困るわよねえ。クライスト王国の大魔術師、その助手ともあるう者が、その恰好、その言動では、ね？」

ちよつと腹の立つ言い方だが、まあ、そういう見られ方には慣れている。だが確かに、フィフィがこれでは“どこにでもついていく”助手兼護衛という立場からは困るかも知れない。そう思い、フィフィは頷いた。

「はあ………どういう事があるのか分かりませんし。」

「もちろん大魔術師ともなれば、様々な式典にも出席しなければいけないし、そういう時は、例え隣にいる事が出来なくても、側に控えていなければいけないわ。そう、衆目があるのだから、それ相応の身なりと言動を身につける必要があるわよね？」

ニルはコンファを見て微笑む。

「ユンだつて正装をして場に出るものね？」

「はい！ニル様のおそばにいるのが、わたしのしごとですから！」

歡喜のオーラいっぱいユンファを見て、思わず微笑む。するとそれを狙ったかのように、ニルはフィフィに微笑んだのだった。

「だから貴女も、大魔術師の助手に相応しいものを身につけなくては、ね？」

ユンファの笑顔につられて頷く。

「……そうですね。それなりには努力しないと……」

ニルの笑みが変わった。それに気付いた時には、もう、遅い。

「では、今日から始めましょう。貴女の教育に当たる人を紹介するわ。」

「は？」

和やかな会話に流されていた自分に気付く。ニルの勝ち誇ったような笑みに、一気に冷や汗が噴き出した。

「どうぞこちらにいらして。」

「え？」

ニル達がいる部屋の奥の扉が開くと、そこには、一目で上流階級の育ちだと分かるような、上品で可憐で、凜とした雰囲気的女性が立っていた。

「こちらは今日、今から、貴女の教育指導にあたる、ハンスファルク家の御息女で、クルスティーユ嬢です。クルス嬢、この方がアシユリーの助手兼護衛の、フィアニスールセです。」

紹介された女性は、きりりとした目でフィフィを見ると、優雅な礼をしてみせた。

「クルスティーユハンスファルクと申します。僭越ながらフィア

ニス様の教育指導をさせて頂く事になりました。ぜひ、よろしくお願い致します。」

突然の事態に対応出来ないフィフィ。しかしニルは、容赦なく言った。

「名乗りを返すのが礼儀というものよ?」

「え? あ、でも…」

「ねえ?」

「……… フィアニスルセです……… よ、よろしく申し上げます………」

「さ、ではさつそく始めましょうか。クルス嬢、頼みますね。」

「はい、ハディエス様。私にお任せ下さいませ。」

「は? え?」

ニルは戸惑うフィフィを無理矢理部屋から押し出し、クルスはフィフィの戸惑いに構わず、参りましようと言っただけ言っただけでフィフィの前を歩き出す。フィフィはかろうじてついて行くものの、事態を整理するのには数分かった。

「随分急に決まったんですね?」

フィフィはニルの顔を思い浮かべながら聞く。急ではないに違いないと確信しつつ、いやそこまで強引じゃないだろうと信じたい。が、クルスはいたって冷静沈着に答えた。

「いえ、フィアニス様がこちらへいらしてすぐに、ハディエス様からお話がありましたよ。」

「……… やっぱそうなんですな………」

（あの人は小悪魔だな……いや、本性が。）

「フィアニス様には」

「は?」

何故か若干語気が荒いクルスの台詞に、フィフィは小首を傾げた。

クルスはきつ、とこちらを見据えて（睨んで？）言う。

「まず、言葉遣いを中心に学んで頂きます。歴史や情勢などは、後々やりましょう。」

「……………」

（なんか…初対面にも関わらず敵意を感じるな…）

フィフィは黙って彼女の後について行く。こういう理由の分からない怒りはつかない方がいいのだ。

そうやって大人しくついて行ったのだが、アシュリーの回廊まで来ると、クルスはぴたりと足を止め、フィフィに道を譲った。

「ん？」

わけが分からずに首を捻ると、若干苛立った様子で言われた。

「フィアニス様が先にお入りになって下さいませんと、私が侵入したと思われてしまいます。」

「そんな大袈裟な…俺が後ろにいるんだし。」

そう言うのと、クルスは信じられないとでもいうように目を見開いた。

「な……まさか、本気で仰られているのですか？それとも、私がそんなに嫌いですか？」

「え？」

（嫌ってんのはあんただろーに。）

ますますわけが分からない。さらに首を捻るフィフィに、クルスは何かを耐えるように一度目を伏せ、フィフィに言った。

「…どうかお先にお入り下さいませんか？大魔術師の回廊に印だけで入るような権利は、私にはないのです。」

（印……？）

そう言われてフィフィは思い出した。ここへ初めて足を踏み入れる時、あの兵士は“書類を持っているから大丈夫だ”と言った。そして、“だから危険はない”と。

（そうか……なるほどな。）

「すいません。…けど、俺が先に入ればクルス嬢も入れるもんなんですか？」

え、とクルスの目が言っている。無知をこれ程驚かれる事に、フィフィは驚いていた。

「……フィアニス様には、まず回廊についてのご説明が必要ですね…。」

「頼みます。なんせアシユリー様はかなりの面倒臭がり屋で、何も教える気がないもんですから。」

そう言った途端、クルスはフィフィを睨みつけた。

「御自分の主をそのように言うものではありません！貴方は、礼儀というものを知らないのですか？」

「……………」

本気で怒っている。フィフィは驚いて声も出ない。

「良いですか、フィアニス様。主を侮辱するような発言は、断じてしてはいけない事なのです。それに、貴方はギルドで働いていたようですけれど、そこでの常識は通用しないものと思ってお下さい。ここはクライスト城。陛下の御元なのですよ！」

「……………はい…」

クルスは、フィフィを快く思っていない。それはフィフィの身元に関係していたのだ。

彼女はギルドの者を良く思っていない。本来ならば関わりたくないのだ。それがニルに頼まれ、受けるしかない悔しさと、フィフィの、忠誠心のかけらもない態度をプライドが許さないのだろう。

（この人は、自分に誇りを持ってる。）

地位の高さや育ちの良さにではない。自分の身分と、その意味に。

「…すいません。クルス嬢。まず回廊について詳しく教えて貰えま

すか？」

そう言つと、クルスは憤りを抑える為に一呼吸おいてから、説明をしてくれた。

「…………この回廊は、ウィルレイユ様ご本人が定めた方だけを受け入れます。王族の方はもちろん、同じく大魔術師であるハディエス様も受け入れられます。定めた方以外が、万一この回廊に入ろうとすれば、すぐに魔術が働きます。」

一旦言葉を切り、クルスは少し恐ろし気に回廊を見やった。

「例外として、一時期のみこの回廊の出入りをされる方は、陛下を通じてウィルレイユ様に許可を伝えられ、印を渡されます。そして、その印を持つていなければ、回廊に入る事は出来ません。」

「助手は入るって事ですな？」

「もちろんです。常に大魔術師様のお側にいなければならないのですから。」

「で、そういう人と一緒なら、誰でも入るって事ですか？」

クルスは少し考えながら言った。

「……いいえ。誰でもというわけではありません。印を持つ者で、尚かつウィルレイユ様がフィアニス様…その助手の方が一緒であれば入る事が出来るのです。」

「結構嚴重なんですね……」

「大魔術師は国の要。クライストの盾であり剣なのです。故にそれだけ、日々に危険が伴うのです。」

ここでフィフィは首を傾げた。

「…そんな大事な国の柱なのに、俺なんか助手だからってこつも簡単に側にいれていいんでしょうか？」

そう質問すると、クルス嬢は驚いたようにしばしフィィィを見つめ、若干微笑んだように見えた。

「…そうですね…それだけ御自分の立場に責任を感じて頂けるのは良い事ですわね。………もちろん、フィアニス様を信頼なさって、陛下も助手とお認めになったのでしようけれど、まだまだ心から信頼するには当たらないとお考えかと思えます。」

「なら、俺がさっさと出入り出来ちゃっていいんでしょうか？なんか緩い気がするんですが…」

そう言つと、クルス嬢は深く頷きながら答えた。

「ええ、ご安心下さい。大魔術師様には使い魔がいますから。」
「使い魔？」

言いながら思い当たり、ああ、と頷く。

「ウイスペルの事が！」

期待を込めてクルス嬢を見ると、若干困つたように眉根を寄せた。

「……？わたくしなどではウィルレイユ様の使い魔を拝見出来る機会はありませんから、ウィルレイユ様の使い魔がどのようなものなのかは、分かりませんわ。」

「あ、そうなのか…」

フィィィはアシュリーと出会う前に、まずウイスペルに会ってい

る。それに、ウィスペルはよく耳飾りから出てきてはフィフィの周りをうるちよろしている。だから滅多に見れない存在だとは思ってもしなかった。

「ともかくも、例えばフィアニス様が、万一ウィルレイユ様に危害を加えようとさなる事があっても、使い魔がそれを防ぎます。」
「へえ……」

言われてフィフィは思い出した。出会った時、ウィスペルにはひどい目に会わされたのだ。思わず苦い顔でもしていたのだろう。クルス嬢は首を傾けて訊いてきた。

「まさか、そのような経験があたりですか？」
「あ、いや…俺がこの城に来て初めてアシュリー様の回廊に入った時ですね。その使い魔が威嚇してきたんですよ。こっちはアシュリー様探してただけなんですけどね…」

まあ、とクルス嬢は心底驚いたようだ。

「不思議な事もあるものですわね…。もちろん書状が何かお持ちだったのでしょうか？それなのにそんな事が起こるなんて…」

「アシュリー様が言うには、“城にはない気配”だったからじゃないかって言っていましたけど。」

「城にない気配…？ギルド特有の気配でもあるのでしょうか…」

「俺にはさっぱり分かりませんがね。」

おどけて見せると、クルス嬢はくすりと笑んだ。その様はとても愛らしく、先程からのあまり表情の浮かばない様子とはまったく違った。思わず息を呑む程だ。

(……いつもああやって笑うのか？…同性でも可愛いと思うよなー…)

「さあ、立ち話はこれくらいに致しましょう？フィアニス様、お先にお入り下さい。」

「あ、はい。」

どうやらクルス嬢のフィフィに対する心構えは、若干柔らかくなつたようだ。

回廊に入り、アシュリーを探して奥の部屋へ向かう。石の壁に扉が現れたのを見てもクルス嬢はさほど驚いた様子はなかった。おそらく魔術を見るのはそう珍しい事ではないのだらう。灯りの灯った階段を降りていき、突き当たりの扉を開ける。

と、アシュリーの側をうろついていたウィスperlが、一瞬で耳飾りの中へ戻っていった。ちらりとクルス嬢を伺うが、彼女は気付かなかったようだ。机に向かい、本に没頭している主に、フィフィは声をかける。扉からだ机にいるアシュリーは背を向ける形となる。

「アシュリー様」

「何？」

見向きもしない。取り合えず用件を言う。簡潔に。

「俺に先生が付きました。」

「は？」

耳慣れない言葉に、アシュリーは思いつきり迷惑そうな顔をして振り返った。

「クルスティーユ嬢です。今日から俺に色々教えて下さるそうです。」

「クルスティーユ」ハンスファルクと申します。以後、お見知り「
「ちよつと待つて。なんで？」

クルス嬢が丁寧にあやうする中、アシユリーはクルス嬢の方を全く見ようとせず、そう問いかける。その様子を覚悟していたとはいえ、クルス嬢はひどく悲しかった。だが、フィフィはそれに気付かなかった。

「ニルヴァーナ様からそう言われましたので。」

「……まさかその話だったの！？」

その慌てように、思わずにやけそうになる。

「ええ、そのお話でした。アシユリー様のお側にいるからには、色々勉強しないといけませんから。」

「なっ……また、ニルのやつ……！」

「まさかアシユリー様が俺に礼儀作法など教えてくれるんですか？」

「なんで俺が？別に知る必要もないだろ？」

「必要だ重要だとニルヴァーナ様は仰ってましたよ？」

「ニルはそういうのが大好きなんだよ。礼儀作法とか行儀作法とか。ああいうの。」

「まあ俺も、お城にお世話になるわけですし、せめて最低限の作法は身に付けておいた方がいいのかなーと思ひまして。そういうわけで教えて頂きますから。」

「ちよつ……」

言いかけ、アシユリーは少し考えて言った。

「……一応訊くけど、どれくらいかかる？」

「さあ、どれくらいでしょう……？」

振り返ってクルス嬢に訊く。彼女は軽く頭を下げたままで答えた。
「……フィアニス様にもありますが、およそ三ヶ月、とハディエス様より仰せつかっております。」

「その間君の仕事はどうするつもり？」

答えたクルス嬢ではなく、あくまでフィフィに問いかける。

「あー…どうなんですかね。」

「またも振り返って訊く。クルス嬢は若干困ったように答えた。

「詳しくは伺っておりませんが…一日、数時間頂ければ幸いです。」

「言つとくけど、俺は君をいちいち呼んだりしない。いい？」

「じゃあ誰か呼びに寄越して下さい。」

「だから、そういう事はいちいちしな…？」

突然、可愛らしい音が聞こえた。まるで鈴を一振りしたかのよう。クルス嬢も思わず目で探しているが、おそらくウィスperlだろう。その証拠にアシュリーは半眼で耳飾りの方を睨んで黙っている。

「……………」

ウィスperlと耳に聞こえない会話でもしているのだろうか。しばらく黙っていたアシュリーは、何か嫌な事でもあったのか、顔をしかめた。片手は腰、片手は顎に添え、何やら考えているようだ。

「あの一…？」

問いかけるフィフィに答えもせず、アシュリーはついには目を閉じて考えている。

（ウィスperl…か？……どうしたんだろう。）

黙って見守っていると、今度は目を開けてフィフィを見つめ出した。

「え…なんですか？」

聞こえているのかいないのか。アシュリーは黙ってしばらくフィフィを眺めた後、しぶしぶといった様子で首を振り、深く溜め息をついた。そして、おもむろに耳飾りを外した。

「？」

フィフィとクルス嬢が見つめる中、ウィスperl入りの耳飾りを、アシュリーはフィフィに突き出した。

「これを身につける。」

（うわっ…めっちゃ嫌そう！しかも命令口調！）

口の端が動きそうになるが、必死に押しとどめる。

「…なぜですか？」

「……………いいから。」

（説明するの面倒臭いししたくないって、顔に出てますよー。）

思いながらもフィフィは取り合えず受け取った。

「……これ、どうやって付けるんですか？」

そう言ったフィフィを面倒臭そうに見やり、アシュリーはここで初めてクルスの方を見た。見たと言っても、ちらりと視線を送っただけ。クルスは即座に一礼し、部屋を出て行く。

「え、クルス嬢？」

「こっち向いて。」

アシュリーの命令に、多少腹立ちつつも向き直る。フィフィが何か言うより先に、アシュリーはフィフィの手を掴み、動かす。

「こうやって抑えてて。」

「……………」

耳飾りの石を下から持ち、耳朵に金属が当たるようにさせる。支えたフィフィの手を支えつつ、アシュリーはもう片方の手で動かないようにフィフィの頬を支えた。そして、目を閉じて唱える。

「？？？汝は我に住まう動かぬ時。 我の吐息に道を繋ぎ、再び自由を与えるまで離れる事を禁ず؟؟」

言い終えると、耳飾りの付け根に口を寄せ、封印の魔力を吐息に込める。吐息はわずかあれば充分で、アシュリーは確かに封印されたのを確認した。

アシュリーが呪文を唱え、封印を行った直後。フィフィはアシュ

リーを思い切り突き飛ばした。本当は殴り倒したかったが、さすがにそれはまずいと思って止めた。すぐに殴れば良かったと考え直したが。

「何するんだよ！」

怒るアシュリーに怒鳴り返す。

「あんたこそ何してんだ！！気色悪いだろーが！」

「は？」

アシュリーが本気で分からないようなので、フィフィは教えてやった。

「耳に息吹きかけられて気色悪いっつてんだよ！」

一瞬の沈黙の後。事態を理解したアシュリーは奮然と言い返した。

「そっしょうと思っつてやったんじゃない！」

「結果そっつなっつてんだよ！」

「封印しただけだろ？」

「他にやり方なかったのか！」

「ない！！！」

きっぱりと言い放つアシュリー。フィフィは両手を握り閉めた。

その様子を見て危険を感じたのか、アシュリーは一步下がった。

「何、殴る気？」

「俺が言うのもなんだけどな」

フィフィは本当になんだけど、と思った。

「何？」

「……ちよつとは憤みを持てよ！」

「は？」

目を丸くするアシュリーを一瞥し、フィフィは足音も荒く部屋を出た。

- 09 - (前書き)

クルス視点です。

アシュリー＝ウィルレイユ。

その名はすでに城へ上がっていた、十五の美しい大魔術師よりも有名になった。彼が城へ上がったのはわずか十の時。幼い少年を、国王陛下自ら隊を組んで迎えに行ったという。

クルスの祖母は、その様子を遠巻きに見たと話してくれた。

小さな家の前に皆が跪き、陛下が中から少年を連れて出てきた。少年は驚いた様子で隊を見ていたが、怖がる様子も、興奮する様子もなかったという。陛下が何事か囁かれると、少し面倒くさそうに顔をしかめ、それを見て陛下は笑っていたらしい。隊は歓声を上げて小さな大魔術師を祝福した。

当時、アシュリー＝ウィルレイユという名は知られていなかった。というか、誰も知らなかったのだ。クルス達貴族でさえ聞いた事なかった。それくらい、無名だったのだ。

だが、陛下自ら迎えに行ったことで、その名は大きく知れ渡った。それならば、とどれだけ聞いて回っても、やはりアシュリー＝ウィルレイユを知る者には出会えなかった。城の中でも不審がられていたと聞いている。それが神秘的だと貴族達は喜んでいて。滅多に人前に出ない事も、神秘性を高めていた。

そんな彼を、ヴィルジウス殿下がとても気に入っている、という噂が流れた。どこへ行くにも連れていくのだとか。

殿下と行動するようになってから、アシュリー＝ウィルレイユは

人間味が増した、と祖母は話していた。気難しく、何事にも興味が薄い。しかし殿下にだけは信頼を寄せている、と関係者は口々に言った。

そんな彼を直に見たのは、殿下の二十歳の祝いの席だった。

殿下の側に控え、他の者のように浮かれた様子もなく、ただ静かに側にいた。あまり見た事のない、明るい灰色の髪。深い群青色の瞳。精霊か何かかと思った。ニルヴァーナハディエスを見た時もあったが、こちらはまた違う性質の神秘さがあつた。何か、とても惹かれた。

その日から、クルスは他の貴族の娘達と遊ばなくなった。お茶会も社交辞令。美容も最低限。他は全て勉強に費やした。別に、アシユリーの部下になりたいとは思っていない。ただ、同じところで働きたいと思っていた。あの人と同じ場所で、生きていけたらと思った。だから、官になろうと思っていたのだ。

そうやって勉強に勤しんでいたクルスに、ニルから声がかけられた。あのアシユリーに助手が出来、その人に色々な作法を教えろというのだ。これは、クルスにとつてとても嬉しい申し出だった。と同時に、何か物悲しかった。嫉妬かも知れなかった。けれど、あの人の役に少しでも立つならと思って引き受けたのだ。

その助手はひどかった。ニルから聞いてはいたのだが、男か女か分からないような出で立ち、態度、言葉遣い。おまけに主人であるアシユリーにぞんざいな振る舞いをする。

始めは我慢していたのだが、すぐに堪忍袋の緒が切れた。元来、気の長い方ではない。

怒ると、助手は一瞬きよとした後、意外にも素直に謝り、態度を改めた。そうはいっても、とても礼儀にかなうものではなかったけれど。

この人にその気があるのなら、アシユリーの為に自分が教育しようと思えた。その後間近で見たアシユリーはとても冷たく思えたが、助手とのやりとりを聞いていると、案外子供みたいな人かも知れないと思った。その直後、大声で怒鳴り合う声が聞こえたけれど。

これは後できつちりとお灸を据えてやらねばならない。

「聞いていらっしゃいます？ファイア二ス様？」

「んーはっ。え、ええと、どこでしたっけ？」

クルスは毎度の事だと思いながら睨みつけた。ファイフィは肩を小さくしてお説教に備えている。

「わたくしは今、言葉遣いをお教えしたばかりですわね？」

「あ……すみません、どこまでやったでしょうか？」

ファイフィは反省している。

が、何度同じ事があっただろうか。クルスはにこりと笑みを貼付けて言った。

「朝は苦手なようですわね。」

そう言われて、ファイフィはほっとしたように首を縦に振った。

「はい、苦手です。というか頭使うの苦手なんですけど。」

「では時間帯を変えて頂きましょう。」

「え、いいんですか？」

期待している。こうした無邪気な様子を見ると、わずかに女性に見える。

「ええ、明日からは昼食の時にいたしましょう。ウィルレイユ様にそう伺って頂けますか？」

「昼かぁ、いいですね！」

「こちらで昼食を取って良ければ、こちらに運んで頂くようにもお伺いして下さいね」

優しく念を押すと、快く頷いた。それを見て苦笑してしまう。

やはり、これは嫉妬だと思う。

だから、フィフィが気を抜いているとつい意地悪したくなってしまうのだ。

（けれど、こちらが真面目にやっていますのに、この方が居眠りなをしているのですもの。これくらいは覚悟して頂かなくては？）

フィフィには、もう少し真面目に取り組めるようにしてあげるつもりだ。クルスはそう決めて、楽しそうに微笑んだ。

（？わたくしの気が晴れませんわ。）

うきうきしているフィフィを眺め、クルスはぐぐつと首をもたげそうになった苛立ちを押さえつけた。

「つつかれた……」

フィフィはお腹を抱えて歩いていた。時刻は昼過ぎ。普通なら昼食をとって倦怠感ある時間帯だが、フィフィのお腹は呻いていた。つまり、ろくに食べれていない。

「鬼だ……あの人は鬼だ……」

元々、フィフィの勉強時間は朝だった。朝起きてまず、クルスに教えを乞う。だが、フィフィがあまりに集中出来ないため、昼に時間を変更された。昼食をとりながらやりましょう、というので楽しそうだとわくわくしていたのだーが。

『言葉使いを間違えられた時点で、昼食は没収いたしますから、充分注意なさって下さいね。』

につこり笑ってそう言い渡された。それが始まってまだ五日。いつも夕食までお腹を空かせるようになってしまった。言葉遣いは、慣れない。

「くそ……どつか…なんか食べるもんじゃないかな…」

「フィー？」

幼い声が聞こえて振り返ると、驚いた様子で走ってくるユンファがいた。

「よお、ユン。一人か？」

「はい！今お昼をいただいて、きゅうけいもいただいているところ

です。」

「昼…そうか…」

うらやましい。

「どうしたんですか？具合でもわるいんですか？」

心底心配してくれるユンファに感動しつつ、フィフィはここぞとばかりに詰め寄った。

「なあ、どつか食べ物分けてくれるようなところ、ないか？」

「えっ……食べるものですか？」

きょとんとしている。フィフィはこくこくと頷いた。

「腹減ってて……」

「アス様はお昼をくださらないんですか…？」

そんなのひどい、とばかりに心配してくれる。フィフィは首を振った。

「そうじゃないけど…まあ、ちょっと事情があつてな。なあ、知らないか？」

「そうですね……あ、たんれんじょうのしょくどうなら、あるかもしれない！」

「鍛錬場の食堂…ね。サンキュ。」

手を振って別れる。ユンファはまだ心配そうにこちらを見てくれた。安心させるようにもう一度手を振って、フィフィは鍛錬場に向かう。

（飯……とにかく、飯！！）

もう、表情が怖い。通りかかった官が避けている。そんな状態のフィフィに、果敢にも声をかけるものがいた。

「フィアニス様？」

聞き慣れない、穏やかな声。フィフィは空腹による機嫌の悪さを忘れて声の主を探す。すると、濃い緑の瞳の、凛々しい青年が側へ歩いてきた。その青年の名を思い出し、誰かを思い出してフィフィは首を傾げた。

「ルキセオード様？」

呼ばれて微笑むと、通りかかった女官や侍女達が悩殺されているのを見た。本人は全く気付かないのか、興味がないのか、至って平然とフィフィに話しかける。

「どうされましたか？怖い顔をされてますよ。」

そう言って笑うが、氣遣ってくれているのが分かる。フィフィは事情を説明した。

「昼食があまり食べれなくて…鍛錬場の食堂ならまだ食べれるんじゃないかって聞いたので、そこに行こうかと。」

「…昼食ですか…」

これはまたアシュリーが疑われているな、と思ったが、ルキセオードはにこやかに案内を申し出た。

「では御一緒致しましょう。私も鍛錬場へ行くとこでしたので。」
「あー…助かります。」

並んで歩き出す。フィフィはふと思いついて訊いてみた。

「…ルキセオード様は、従騎なんですよ。」

「ええ。…私にそのようなお言葉遣いをして頂かなくても、結構ですよ。」

「え？でも…」

戸惑うフィフィに、ルキセオードは穏やかに笑う。

「立場的には、似た様なものです。」

「……………」

フィフィはまじまじとルキセオードを見つめてしまった。従騎と、大魔術師の助手は同じくらいの位置にある、と初めて知った。

「どうされました？」

長く見つめるフィフィに驚いた様子で、ルキセオードは若干緊張した様子で訊く。すると、フィフィは真剣な顔で答えた。

「…実は、俺は今言葉遣いを習ってるんですよ。それで俺の先生が、言葉遣いを間違えたら昼食を没収するんです。」

「……………それは…手厳しい方ですね……………それで空腹なのですか。」

「そうですね。で、そうまでして言葉遣いを直せと言われてるので、ルキセオード様にどんな言葉遣いをしようか悩んでいます。」

「……………」

今度は、ルキセオードがフィフィを見つめる番だった。そして、笑い出した。

「すみません。…ああ、でも、改まった物言いをされますと……………隔たりを感じます。特にフィアニス様は外から参られた。ですから無理さなる必要はないと思いますよ。」

言われて、フィフィはほっとした。そう。本当に性に合わない話

し方なのだ。

「良かった！慣れないんですよ、ほんと。口が回らなくなってくる……」

「どうか楽にお話下さい。ありのままで結構ですから。」

「ありのまま……ですか……」

少し考え、フィフィはルキセオードに訊いた。

「俺とルキセオード様ってどれくらい差があるんですか？」

「フィアニス様。ユンファにされていたような話し方で結構ですよ。」

「……………」

聞いていたのか。

「じゃあ聞くけど、どっちが偉い？」

くすくすと笑いながら、ルキセオードは答える。

「どちらが……そうですね……本当に同じくらいの地位なのですよ。」
「……………」

にや、とフィフィは笑った。

「じゃ、ルキセオード様も話し方変えて下さい。でないと隔たりを感じます。」

「……………」

虚をつかれたらしく、ルキセオードは一瞬固まった。

「……なかなか手強い。では、俺のことはルキ、と呼んで下さい。」

「ルキ様？」

「隔たりが。」

「ルキ。」

「はい。」

「その話し方はクセ？」

「ですね。いくら気をつけてもこつなってしまうので。」

「ふーん…」

「そちらはどう呼んだら？」

先程とは少し違う、何か悪戯を楽しむかのような笑みに驚きつつ、フィフィは答える。

「好きに呼べばいいけど。」

「好きに…ですか。」

少し考え、ルキセオードは頷いて言った。

「では、フィースと呼びます。」

「フィース？」

「ええ。」

フィフィは記憶をまさぐる。

「…あんま呼ばれたことないな。」

「そうですね？」

それもそうか。とフィフィは考える。元々名前はフィフィ、なのだから、どう考えたって“ス”は入らないのだ。

「新鮮だな…」

「気に入ってもらえたようですね。」

そう言ったルキセオードは楽しそうだ。フィフィは笑い返した。

鍛錬場へ着くと、ルキセオードはフィフィを食堂へ案内した。通りかかる兵士達は皆ルキセオードに敬礼し、不思議そうにフィフィを見ていた。

食堂へ入ると、皆一斉に立ち上がり、大きな声でルキセオードに挨拶する。ルキセオードが軽く返し、楽にしろ、と言うと途端にもとの騒がしさが戻った。

騒がしいといっても、すでにほとんどの者は昼食を終えているらしく、人はまばらだった。それでも元気が溢れているから、昼食時はもっと騒がしいのだろう。

「さ、フィース。好きなものを選んで下さい。」

ルキセオードが並んだ料理を示して言う。選ぶ前に、フィフィは首を傾げた。

「ルキはもう食べたんじゃないのか？俺に付き合う必要なんかないぞ。」

そう言うつと、ルキセオードは微笑んで答える。

「いえ、フィースの昼食に付き合うくらいの時間はあります。それに、少し話してみたいと思っていましたから。」

「……ならいいけど。」

言いながらも料理を選び出している。

一通り見て、大きな肉がごろごろ入っているものを選んだ。

「これ、なんの肉？」

給仕の若者に聞くと、元気よく答えてくれた。

「牛ですよ！一番人気！」

「だよなあ。うまそーだもんな。」

それだけで満足そうに皿に盛り、ルキセオードと向かい合わせで

席に着き、もくもくと食べ始めた。その様子を見ていたルキセオードだが、ふとフィフィがしている耳飾りに目を留め、眺める。

「ん？」

気付いたフィフィが訊ねると、ルキセオードは不思議そうに訊いてきた。

「あ…その耳飾りはアシュリー様のものでは？見た事があります。フィフィはもくもくと咀嚼してから答える。」

「そうそう。この間…その先生が付く時に、無理矢理つけろって言われて…。多分ウィスperlがなんか言ったんじゃねーかな。」

「……ウィスperlというと、アシュリー様の使い魔の？」

「…やっぱり知ってたんだ？そう。俺には鈴の音にしか聞こえないけどな。鳴らなくても耳を傾けてるような時もあるから、やっぱりなんか、魔術の一種で会話してんのかな。」

ルキセオードはますます不思議そうに、興味深そうに耳飾りを見つめる。

「俺も詳しくは知りませんが、その耳飾りの石は瑠璃石という宝石で、数ある瑠璃石の中でも妖精が宿る石だそうですよ。そういうものを、魔術師は“精石”と呼ぶようですが…」

そこまで言っつて、ルキセオードはフィフィがきょとんとしているのに気付いた。

「？…どうしました？」

「……いや、ルキッて自分の事、俺って言っただ？ほんととは。」

「ああ…そうですよ。私、というのも半分クセですが……」

「ふうん…」

再びもぐもぐと食べ出したフィフィに、ルキセオードは訊ねた。

「アシュリー様は、何故ウィスペルを貴方に？」

「自分で呼びに行くのが面倒臭いからだよ、あの人は。ウィスペルが連絡役を買ってくれたんだよなー？」

呼びかけるように言うと、耳元でちりん、と鈴の音が答えた。その様子に、ルキセオードは感心した面持ちだ。

「すっかり懐いていますね。」

「そうなのか？なんか、始めからこんな感じだけだな。」

「それは……なんとも珍しい……」

「あ、そーだ。俺も訊きたい事があるんだけどさ。」

「はい、なんですか？」

「エウエラって誰か知ってるか？」

フィフィはあの、ヴィルジウスとの対戦を思い出しながら訊いた。

「……エウエラ……。時の大魔女ですね。彼女の何を知りたいんですか？」

「俺さ、ニル様にこんな描かれたんだけど、なんか凄い事になってるらしくて。どういう事になってるか分かるか？」

差し出されたフィフィの手をとり、ルキセオードはまじまじと見つめた。

「……エウエラの図形……」

「なんか、皆が言うからそれは分かったんだけどさ。オルクス様は樹力が混雑してあるっていうし……そもそもどんな意味があるのかと思っ
つて。」

「……殿下の体勢を崩す事が出来たのは、これがあつたからなのです
ね……。」

ルキセオードは真剣な面持ちで図形を見つめていた。その真剣さに、フィフィは少し不安を感じる。

「……ルキ……？」

「……エウエラは、ヴォルテル王の時代からイルジス王の時代にかけて存在していた大魔女です。」

「え、それってつまり、いつ？」

慌てて問いかけるフィフィに、ルキセオードはくすりと笑った。

「我らが王、ウルセディ陛下の四代前に当たる王の時代に生きていました。」

「ん……それならなんとなく分かる……かな。」

難しそうに頷くフィフィに、ルキセオードはなるべく簡潔に話す。

「エウエラは他に類を見ない程の魔力の持ち主で、魔術の使い手でした。時を経るごとに外見も中身も衰えるのが人ですが、エウエラは身体的には何ひとつ衰えず、魔力、魔術に関してはますます強大になっていった。」

「……つまり、見た目はもう、どこかで止まってた……？」

「そうです。そして……はつきりとした時期は分かりませんが、彼女は人でなくなっていた。」

「……？えつと……不老は人のうちに入るのか？」

心底納得出来ない様子で言うフィフィに、ルキセオードは軽く笑った。

「肉体があるので、一応は。エウエラは今や“大精霊”です。世界の気脈に身を置き、契約によって人に力を貸す。普通、大精霊ともなれば簡単に接触は出来ないのですが、エウエラは元が人であったからなのか、案外気楽に人と関わっているようですね。」

「気楽……」

呆れたように言うと、ルキセオードは再びフィフィの手にある図形に視線を落とした。

「…エウエラは特に、魔女に力を貸すのが好きなようですね。エウエラと契約出来るのは女性が多いようですから。…そして、貴方にも興味がおありのようだ。」

「え、俺に？」

「エウエラは例え契約者の言葉であろうと、気に入らない相手にはわずかの力も貸さないようなので、まず、貴方に興味があると考えていいでしょう。」

「……………」

不思議だ。工作上、魔術師と関わる事はあっても、それはほとんどの場合、味方ではなかった。魔術師のように魔術に携わり、精霊や妖精や神と力を共有したり、そういう存在を尊いと思った事はないのに。何故、エウエラという大精霊はフィフィに力を貸すのだろう。フィフィはまじまじと図形を見つめた。

「樹力つてのは？」

「……対象のものを“成長”させる力だと聞いています。」

「成長？」

訊ねるフィフィに、ルキセオードは若干困ったように首を傾げた。

「…これ以上は俺には……………」

「ああ…武人だもんな。魔術の事は魔術師様に聞いた方がいいか…」

とは言っても、主であるアシュリーは面倒臭がつて説明してくれない事は確実だし、ニルもにこりと笑ってはぐらかしそつだ。

「ま、先生にでも聞いてみるか。」

「そうして下さい。」

苦笑しながらルキセオードがそう言つて、フィフィはそれを見て笑つた。

和やかな雰囲気のところへ、何やらばたばたと兵士達が駆け込んできた。見れば雨に降られてしまったようだ。皆一様に外を見て怪訝そうな顔をしている。

「どうした？」

思わずルキセオードがそう訊ねると、兵士達は顔を見合わせてから言った。

「それが……突然空が妖しくなったと思ったら、急に大雨が降り出したんですよ。」

少し耳を澄ませば、外がかなりの雨に降られているのが分かる。

「…今日はそんなに天気悪かったっけ？」

フィフィが首を傾げると、兵士が即答した。

「いえ、先程までは晴れていたんですよ。晴天、とまではいきませんでした。」

なおも不思議そうに兵士は続けた。

「それに、急に曇ったというよりは、急に雲が渦巻いたんです。」
「雲が渦巻いた？」

ルキセオードが若干の緊張をもって言うと同時に、ちりん、とウイスペルが鳴いた。

「ん？」

なんとなく、アシュリーが呼んでいるような気がして、フィフィは席を立つ。

「…アシュリー様から呼ばれましたか？」

ルキセオードが思慮深い目を向けて聞いてくる。フィフィは若干驚きつつも、食堂の入り口へ向けて歩き出す。

「そうみたいだな。ルキ、今日はありがとな。」

「ええ、また時間があればお付き合いです。」

「ああ！」

笑顔で手を振って食堂を出る。建物にそって造つてある廊下は、外側の壁はなく、柱で天井が支えられている。その廊下は決して長くはなかったが、そこを早足で歩いている間にも、風が急に強くなっているのを感じた。

「……………嵐か…？」

呟いて扉まで走る。雨に濡れたり、強風に煽られるのはごめんだ。扉を開けると官達の足取りが忙しそうだった。早く扉を閉めるように促され、扉を閉めるとフィフィも急ぎ足でアシュリーの元へ向かう。官達は歩き回り、時に廊下の端へ寄って話し合い、何か緊張したような面持ちだった。

（……………そう言えばさっきルキもあんな顔してたな…。天気と関係あるのか？）

思いつつも、急ぐ足はだんだんと速度を上げて、いつの間にか走り出していた。

アシュリーは自室で書類を熱心に読んでいた。ここ数日で報告さ

れた出来事の中に、気になる事があったのだ。それに、陛下からも知っておくように言い渡されていた。

（陛下が知っておけと仰る時は、厄介事を調べると仰っているのと一緒にだ。）

あの人はいつもあだ、とアシュリーは思った。大事な事を何でも無い事のように言っ、アシュリーにそれを計るように促す。そうやってはつきりしない物言いがアシュリーは嫌いだったが、あの人はわざにそうする。難しい事はさも簡単そうに言う。しかし目は有弁で、態度や物言いより遥かに多くの事を語って？？いや、押し付けてくる。

ふと、外の空気が急速に変わるのを感じた。外、というのも城の外だ。

（？あり得ない。）

アシュリーは外を探る。状況が分かれば分かる程、アシュリーは首を傾げた。

（これは…どういう事だ？）

報告書にもう一度目を通す。そして、睨みつけた。
と同時に。

自室の扉が荒々しく開かれた。

一瞬、嵐で壊れたのかと思った。

「えーっと…お呼びでしょうか？」

扉を開け放った乱暴とは全く逆の、どこか能天気さを伴う声でファイファイは言った。アシュリーは一瞬扉に視線を映したが、すぐに声をかけた。

「遅い。」

「……………」

青筋がたちそうになったが、抑えた。

「それでも走ってきたんですけど。何かあったんですか？」

言い返しつつも、それ以上アシュリーの言葉が続かないように先に言葉を紡ぐ。企み通り、アシュリーは反撃するよりも後の言葉に意識を持っていた。

「これを読んでおいて。嵐が収まったら調査に行かないといけないと思う。」

言うだけ言って書類を押し渡そうとして？押しとどめて、ファイフイに触れるか触れないかの距離まで書類を顔に突きつけた。ファイフイは押しのけるようにして書類を受け取ると、首を傾げて聞いた。

「調査って、どこかへ出かけるんですか？」

アシュリーはもう目線を別の書類へ移していた。

「出かける時は付いてくるんじゃないかったの？」

さらりと皮肉を言われるも、出かける為にわざわざ呼ばれた事に驚いた。あれほど助手は要らない、邪魔だと言っていたのに、ファイフイに仕事をさせようというのだ。

「……………」

お礼の一つも言おうと思ったが、気難しいアシュリーの事だ。そのやり取りだけで気が変わるといふ事もありそうで、ぐっと我慢した。

（お礼もろくに言えないなんて、変な相手に仕える事になったなあ……）

「…これ、読んでおけばいいんですか？」

そう聞くと、アシュリーはじつとフィフィの顔を見て言った。

「…君は、俺の何？」

言われてフィフィは一瞬考えた。

「助手です。」

「…その間は何…」

ぼそりとアシュリーが突っ込むが、フィフィは聞こえないふりをした。

「助手なら、それらしくして。」

それだけ言ってまた視線を机の上に戻す。フィフィはしばらくアシュリーを眺めた後、一応、一礼をしてアシュリーの部屋を出た。部屋でゆっくり読む事にしたのだ。

?? 激しい雨と風は三日三晩続いた。

その間アシュリーは一度も部屋を出た様子はなかったし、誰も部屋へ入れなかった。ファイフィはする事がなかったので、クルスの部屋へ招いてもらい、礼儀作法などを教わっていた。おかげでなかなか上達したようだ。

城内をうろついても皆声を抑えて話していて、誰かが通りかかると去っていく。

ファイフィは一人状況が分からず、皆が外を眺めては何か話している様子から、嵐が何か関係ありそうだとは思ったが、話してくれる人はいなかった。少しの期待を持って鍛錬場へ行ってみるものの、ルキセオードはいなかったし、兵士達に聞いても状況は分からないようだった。

ならばと思つて書庫へ行つて天候関連の書を探して読んでみるも、二、三ページ読むだけで意識が逸れていつてしまうので諦めた。ただ、その書は魔術と天候に関わる書のように、ちらつと見た限りでは、魔術によつて天候に影響を与える事が出来るのかも知れない、とは考えられた。

それでやつとアシュリーに貰った（預かった？）書類の存在を思い出して、慌てて部屋へ戻つて読んだ。

書類には、ここ一年で起こったある出来事が報告されていた。海辺のとある国のとある場所からの変化。それはある現象によつて場所を移し、徐々にクライストに迫っていた。

（ん……………？）

フィフィは思わず眉をひそめた。それから書類を読み直して、最初に変化があった場所では、今も変化が拡大しているという事が分かった。その後に変化があった場所でも、同様に変化が拡大しているようだ。それは決して急速ではなかったが、誰も手出し出来ないようだった。変化を運んでいるとある現象とは、“嵐”だった。

（こんなに頻繁に…しかも定期的に起こるもんか？嵐って…）

大きな窓を見やると、豪雨で景色がひどく歪んでいる。大きな木が風で煽られているのがなんとなく分かった。

（…これでもし、クライストでも他と同じ様な変化があったら…）

自然な現象とはとても思えない。あまりに不自然な嵐だ。この世界に何かが起こっている？その証拠となるだろう現象だ。

フィフィはふと、自分が身を置いていた世界を思い出していた。こんな風と雨では、無事では済まないだろう。

（城は丈夫だよな…やっぱり。）

これだけの雨風にもびくともしない。雨漏りも無ければ風の衝撃も感じない。まるで、窓の向こうに別世界が広がっているように感じた。それは奇妙な感覚で、しかし、ほっと出来る事だった。

（あたしは今、城で働いてるんだな…）

そう、何故か感慨深く感じた。

- 12 - (前書き)

読んで頂いている皆様、ありがとうございます！

理解しにくい、分からない、矛盾点などあるかも知れません…

その場合はお教え下さい。

三日三晩続いた突然の嵐は、ゆるやかに終わっていった。去って行った、というよりは、その場で消えていった、というのが正しいだろう。起こった時と同じで、その場で現れ、その場で消えていった。人々は不思議そうに空を眺め、首を傾げた。

嵐が消えた朝、フィフィは暖かい日差しで目を覚ました。暴風雨ですっかり退屈していたフィフィは、その時間を喜んで睡眠に費やしたのだ。

まだ少し眠気が残る目をこすり、軽く頭を振って眠気を追いやる。もそもそとベッドから出て、光に向かって伸びをする。全身がほぐれると、すっかり晴れた景色を見るため、窓を開けてテラスへ出た。

「うわー…」

中庭のあちこちに大きな水溜りが出来ており、綺麗に咲いていた花々もめちやくちゃになっていた。大木には大きな傷がついている。補修や警護の為か、兵士達が走って行くのが見えた。

「こりゃひでーな…」

言いつつ、フィフィは身を翻して部屋を出て行った。主の元へ向かう為に。

回廊を出てすぐに兵士に呼び止められた。本当に出てすぐの所で呼び止められたので飛び上がった。兵士は何喰わぬ顔で用件を伝えていったが、その背中が笑っているのをフィフィは感じた。

ともあれ、アシュリーが出かけたという事だから、急いで向かわなければ。

嵐が明けたのは朝日が昇る前で、アシュリーはすぐに城を出た。あの変化が現れているという情報を得たからだ。場所は城下から少し離れた、海に面したところだ。大きくて立派な宿泊施設が建っている。サファイアという名のこの施設はあまりに有名で、城の関係者も利用する事がある。その経営者から、変化の知らせがあつたのだ。

すぐにサファイアへ向かおうとして、思い出してウィスperlに呼びかけた。しかし肝心の助手が熟睡しているらしかつたので、近くにいた兵に伝令を頼んで城を出た。

サファイアのある大きな町に着くと、従業員が待っていた。周りの住人達も皆、困った様子でアシュリーの動向を見守っている。それを感じ取ってはいるものの、アシュリーは案内の従業員以外に目を移す事はなかった。

「支配人のフォルクローゼがウィルレイユ様をお待ちしております。どうぞこちらへ」

不安気な従業員に軽く頷き、アシユリーはただ付いていく。そんなアシユリーを、あまたの視線が追いかけた。

噂に違わずサファイアは美しい建物だった。その造形もさる事ながら、目の前には白い砂浜にエメラルドブルーの海が広がり、プライベートビーチを囲う緑も見事なまでに計算されて配置され、サファイアの敷地全体、どこを眺めても美しかった。

だがしかし、海へ続く砂浜には今、大量の花が咲き乱れていた。青から紫へ花卉の色が変わっているその花はかなり美しい。が、海へ近づけない程広がっている様子から、これが人工的に植え付けられたものではない事を物語っていた。加えて、よく見れば波が被るところにさえ花が咲き乱れており、これがこの花の異常さを感じさせた。

「嵐が止んだと思ったらこれです。」

気がつくとすぐ横に、銀色の髪の青年が立っていた。その目は深い碧色で、美しいこの海を連想させる。

「私が気付いた時はまだ埋め尽くされてはいなかったんですよ。ウイルレイユ様をお待ちしている間に、こんなにも広がってしまいました。」

ああ、では、と思って青年を見ると、目が合って微笑まれた。

「お初にお目にかかります。私がサファイアの支配人であり、ウイルレイユ様に知らせを送った、フォルクローゼⅡルセと申します。」

そういうと丁寧な礼をする。まるで洗練された動きは、上流貴族

を思わせた。

「…………ルセ？」

「はい。どうぞ覧になりますか？この植物を。」

ひっかかりが疑問にかわる前に質問を投げかけられ、アシュリーは視線を花に戻した。指で花弁をそつとなぞるようにすると、花は逆らわず、ふわりと揺れた。

「…………害はない。」

「それは良い知らせです。お客様になにかあつては大変ですので。」
「……………」

少し考え込むアシュリーを見て、フォルクローゼは口を開いた。

「…実はお待ちしている間に、少しでもなんとか出来ないかと、色々試してみたのですよ。」

「試した？」

怪訝な表情のアシュリーに気付かないのか、フォルクローゼは話を続ける。

「ええ。まず、引っこ抜いてしまおうとやってみたのですが、雑草よりも強固な根の持ち主のようで、誰がどれだけやろうとも抜けません。ならばと思って切ってしまうかと思つたのですが、茎が裂けることがあつても、繊維が切りきれないのですよ。これも、どんな道具を使おうが駄目でした。」

（どんな道具を使つたんだ…？）

思つたものの口に出せず、その合間にもフォルクローゼは話を続ける。

「最後の手段と思って燃やそうとやってみたのですが、海に守られているかのようで、どれだけ炙るうとも焦げ跡すらつかないのです。我々では、どうすることも出来ず、ますますウィルレイユ様のお力に頼る他ないと思って心待ちにしておりました。」

最後ににこりと笑ってさりげなくプレッシャーをかけた。そこに一瞬、ニルを見たような気がして、アシュリーにとってフォルクローゼは要注意人物となった。が、まだ恐るるに値しない。むしろ無茶無謀が目につく。

「…………ルセ。忠告しておく。」

「はい。」

「…命が惜しくば、自然の摂理から外れているものに触れるな。」

「…………肝に銘じます。」

忠告に返す目はとても真摯だった。その態度は、やはりどこか一般人らしからぬところがあるように感じる。

さておき、とアシュリーは植物の解析にかかった。これが自然の摂理から外れた、あるべきでない植物だというのは分かる。だが、その異常さはどこからきているのか。それが分からなければ対処が難しい。

（この植物は…報告書によれば“嵐の度”に”世界に広がっているものだな。浜辺…しかも海水の被るところに生え、見る間に増殖していく…。嵐自体が月の満ち欠けに従って起こっているから、“嵐は何かを起こされている”事になる…。

植物は“嵐に乗って”広がっている…前回の嵐でこの植物が現れたのはレシテ…レシテからの距離が、嵐が影響を及ぼせる範囲と考

えていいな…。植物はどんな状態で運ばれるのか…。何を糧に生長しているのか…)

そこまで考えたところで、にわかに騒がしい事に気付いて顔を上げる。と、フィフィがやってくるのが見えた。一度兵士に止められるが、顔見知りだったのか、お互い笑って言葉を交わしている。

(…………この短い間に、もう顔見知りがいるのか…)

若干驚きつつも、フィフィが近付いてくるのを黙って見ていた。しかし、フィフィは思いがけない人物に止められた。

「フィー、こんなところで何を？私に用があるなら、悪いが今は取り込み中だから、サファイアで待っていてくれないか？」

「はあ？」

(は？)

アシュリーも驚いた。フィフィを止めたのはフォルクローゼだ。それも、親し気な態度で話しかけている。

「俺はアシュリー様に用があるから、フォンは気にしないでいいよ。」

(知り合い……………？)

アシュリーは小さく首を傾げる。それに気付いたフォルクローゼが、アシュリーに疑わしげに訊ねた。

「ウィルレイユ様。この娘とお知り合いのですか？」

娘、という言葉に違和感を感じる。そう言えば近くにいた兵士も

驚きに目を見開いている。これは少し厄介か、と考えながらも自分にとってはどうでもいい事だと思い直し、アシュリーは肯定した。

するとフォルクローゼは驚き、フィフィに向かって問い質し始めた。

「一体どうして、どういう経緯で？」

「いやあ、安定収入を目指してたら、たまたま城の仕事があったんだよ。それで。」

「安定収入？一体どうしてそんな考えを？」

笑いながらそう聞いている態度を見ると、フィフィはこれまで長い間、ギルドの仕事を自ら選んでやってきたのだろう。その考え方が変わった事が、フォルクローゼには可笑しいらしい。

「まあ……なんとなく。悪人面ばかり追っかけるのにも疲れたっというか……」

「へえ……？それで、城では何を？まさか侍女だなんて言わないだろうな？」

これも大いに笑って言う。フィフィは呆れた様子で言葉を返す。慣れているようだ。

「助手だよ。」

助手、という言葉に、フォルクローゼは笑いを引っ込めた。

「助手？」

真剣な表情で聞き返す。すると、今度はフィフィが可笑しそうに

笑って言った。

「そ。助手。正確には、助手兼護衛。」

「……それは、どなたの？」

聞かれたフィフィは、教え込まれた言葉遣いで答えた。

「こちらにいらっしゃるアシュリー様が、私の主人です。」

示されたアシュリーは、なんの感慨もない目でちらりとフィフィを見た。正直、フィフィがこんな言葉遣いを見ると、違和感を感じる。フォルクローゼはフィフィとアシュリーを交互に見ると、悩まし気にアシュリーに訊ねた。

「本当のようですが、何故フィフィを選ばれたのか、お伺いしてもよろしいですか？」

聞かれたアシュリーは大して考えもせず、ただこう答えた。

「上の策略と陰謀。俺には必要ない。」

「ちよつと……」

げんなりするフィフィを横目に、アシュリーは淡々と言った。

「それで、話がしたいなら離れて。邪魔だから。」

「……… 大変失礼致しました。我々に出来る事があればなんなりとお申し付け下さい。そこへ連絡係の者を置きますから、御用の際はあれにお伝え下さい。」

フォルクローゼが深々と礼をするのも最後まで見ず、返事すらし

ないでアシュリーは植物の解析に移った。その横に、フィフィも佇む。顔を上げたファルクローゼはしばらくそんなフィフィを眺めていたが、一つ首を傾げてサファイアへ戻っていった。

解析には半日かかった。昼を過ぎる頃までアシュリーは植物の生えている端から端までを歩き回っていたが、納得した様子で中央へ戻った。そしてフィフィは、初めてアシュリーの魔術を目にするこ
ととなったのだ。

「??? 汝は我に住まう動かぬ時。 我の吐息に道を繋ぎ、彼のものの
生命の時を固く封じ給え??」

聞いた事のあるような呪文だが、耳飾りをつけられた時とは異なる言葉が続いている。アシュリーは続けて紡いだ。歌うようになめ
らかで、囁くように優しい声音だ。

「??? 汝は我が僕。 風に住まうもの。 我が吐息に力を与え給え??」
アシュリーが差し出した両手に誘われるように、植物を囲うよう
に風が吹き始めた。

「??? 汝は我が僕。 海に住まうもの。 我が名、アシュリー＝ウィル
レイユにおいて、誓約を果たす事を命ず??」

アシュリーが深く呼吸をする度に、風は高く大きくなり、植物は
完全に風に覆われた。

「??? 汝、誇り高き光。 その御名において我と誓約を結ぶものの罪

を罰し給え??」

そう言い終えると、アシュリーは手を下ろした。風は先程より弱くなっているものの、相変わらず植物の周りだけに吹いていた。明らかに自然の風でない事は分かる。それを確認すると、アシュリーはくるりと踵を返して歩き出した。

「え…」

慌ててフィフィも後を追う。

「終わりですか？」

「終わった。」

「あれ、どうなったんですか？」

フィフィに答えず、アシュリーは待機していた従業員に言った。

「あの植物には決して近寄らず、触れないように。あれが消えるのには少し時間がかかる。」

「は、はい！」

そう返事が返ってくると、アシュリーは従業員を通り過ぎ、明らかに馬車へ向かっていく。

「え、待って下さい！」

フィフィが言っても、止まる筈がない。

「消えるのに時間がかかるって…? どういう事ですか? アシュリー様でも解決…」

いきなりアシュリーが振り返ったので、フィフィは思わず口を閉ざした。アシュリーはフィフィを睨みつつ、かなり面倒くさそうに言った。

「……………馬車で話すから、黙って。」
「……………」

フィフィは大人しく従った。アシュリーから何かの説明がある、というのが珍しく、同時に説明しておかなければならない事態なのだろうと思ったからだ。それがどれ程重要な事態なのかは分からないが、とにかく国の大事に関わる事なのは確かだ。

サファイアのある浜辺を離れてしばらくは、アシュリーは書類に夢中になっていた。フィフィは大人しく黙っていた。が、そんなに長い時間は我慢出来ず、結局はアシュリーの言葉を待たずに話しかけた。

「それでアシュリー様。一体どうなったんですか？アシュリー様でも解決出来ないような事態なんですか？」

最後の言葉に弾かれたようにアシュリーは顔を上げ、フィフィを睨んだ。

「……………（なんですか）…？」

「君は、俺の助手？」

「……………そうですよ。残念ながら。」

「なら、国民を不安に陥れる様な言葉を、安易に選んで使わないよ

うに。」

「……………」

フィフィはちょっと驚いた。アシュリーが普段嫌々仕事をしているという訳でないし、城下の人間を下賤の民などと言っているのを聞いていたわけでもない。しかし、人と関わりを持つのを面倒くさがる彼が、フィフィの軽率な言葉に怒るとは思わなかったのだ。

そんなフィフィを、一瞬前とは打って変わって不思議そうに眺めた後、アシュリーはあの植物について話し始めた。

「あの植物は、一年程前から報告に上がっていた、世界で起こっている変化と一緒にものだと思う。最初にあれが現れたのは、エイシャントの孤島に近い、フェルウェイル王国で、今回クライストで発生したような唐突な嵐の後に発見されたらしい。

その三ヶ月後にはイリエル国で嵐の後にあの植物が発見され、その二ヶ月後にはピステイル・オス共和国で。その後二、三ヶ月おきにラナス国、ハークヴェル帝国、レシテ国に嵐が起こり、その後に必ずあの植物が発見されている。」

「……………じゃあ、あれは嵐に乗って広がっているんですか？」

「そう考えられる。それも、自然の摂理から外れた嵐だ。その嵐に乗って広がっているあの植物も、自然の摂理から外れてる。」

「えーっと…自然の嵐ではないとすると、魔術で嵐を起こしているって事ですか？」

そう言うと、アシュリーは僅かに考え込むような仕草をした。

「…………魔力の溜まり場で稀にそういう事も起こるけど、定期的に月の満ち欠けに伴って起こっていると、人為的に起こされると考えられる。あの植物も何かしら手を加えられている。」

フィフィもまた、少し考えてから言った。

「…誰かが定期的に嵐を起こしているって事ですよね？」

アシュリーが答える前に、フィフィは言葉を続ける。

「誰かが嵐を起こす。一ヶ所じゃなくてあちこちに。定期的に起こって、距離も等間隔。……なら、嵐あの植物を運んでいるって事ですか？それともあの植物はついで？」

「あの嵐は明らかに植物を運ぶ為に起こされてる。」

「なんでそう言い切れるんですか？だってさっき、害はないっておっしゃってましたよね？」

不思議に思っただけで聞くと、アシュリーは若干面倒くさそうに説明してくれた。

「……生き物に害はない。でも、精霊達には害がある。あの植物は力を糧にしてる。あんなのがずっといたら、この国から精霊が消え失せるだろうな。そうなれば魔術師は力を失う。」

「…………誰かがそれを望んでいるって事ですか…」

「…血を流さずに国の力を削ぐのが目的なら…けど、呑気過ぎる。」

「……………」

首を傾げるフィフィに、アシュリーはさも面倒臭そうに説明する。

「…例えばクライストの精霊を喰い尽くすなら、あのペースだと五年はかかる。どこの国の力を削ぐ気なのか分からないけど、悠長すぎるだろう。」

「……じゃあ…なんの為にこんな事…？」

「さあ。」

一言。あまりにも短く、あっさりとした一言に、フィフィは思わず突っ込んだ。

「“さあ”って…。国の一大事ですよね？」

するとアシュリーは淡々と答えた。

「…理由はどうでもいい。」

「は？」

国民を不安にさせるなど言っておいて、どうでもいいと言い放つ。若干憤るフィフィを前に、アシュリーはごく普通に答えた。

「…クライストを脅かすものは報復を受ける。必ず。」

それはフィフィが初めて聞く、“国の盾であり剣”と称される者の言葉だった。

その日の夕方には城へ戻った二人だったが、アシュリーはすぐに国王に呼ばれていった。フィフィは取り合えず状況を整理し確かめる為に、クルスティーユかニルを探す事にした。

城を彷徨っていると（まだ城の構造がよく分かっていない為、回廊とクルスの私室と鍛錬場以外の場所では彷徨う形となる）、どうやらニルも国王に呼ばれたらしいと分かった。ならばクルスティーユを探すしかない。

ぼんやり覚えているような廊下を彷徨い彷徨い歩いていたら、いつの間にか周りに誰も歩いていない事に気付き、いつの間にか物音さえしない廊下にいる事に気付いた。

（なんで…）

なんとなく、廊下に灯されている灯りさえ、音を立てないようにしている気がする。

（これ…やばい所に入っちゃったんじゃないかな…）

「いつ!?!」

突然、右手を強く引つ張られた。驚くよりも焦りを感じたのは、それが、前方に引つ張られたからだ。もちろん、この廊下にフィフイ以外の人間はいない。それは見れば分かる事なのだ。

「うわっ」

なおも前に引つ張られている。誰もいない。誰も見えないのに、ファイファイは右手は掴まれ、引つ張られている。

「くっ…！」

言いよの無い不気味さを感じて、足に全神経を集中させて踏ん張る。すると若干右手を引つ張る力は弱くなったものの、ぐいぐいと前へ引きずられる。

「なんなんだよ！」

左手で右手の周りをはたいても何も感触はない。そうこうしている間に、周りの様子が変わっている事に気付いた。

（どこだ！？）

円形の、高い壁に囲まれた部屋にいる事に気付いた時、唐突に右手を引つ張る力は消えた。その反動でファイファイは床に尻餅をつく形になった。

（なんなんだ…！？）

辺りを見回しながらさつと立ち上がる。そこは漆黒の床、漆黒の壁で、柱は白く高い。柱には灯りが灯してあるのだが、数回見回しても出入り口が見つからなかった。

（なんで……今ここに入ってきた筈だよな？）

どこからか日の光が注ぎ込んでいるが、天井は確かにあるのに窓はどこにも見当たらないのだった。

『びつくりした？』

(!?)

軽やかな、笑いを含んだ声が聞こえた。

(どこから……あたしに言ってるのか?)

『すっごい焦ってたわよね』

くすくすと楽しそうな笑い声が聞こえる。腕を引っ張っていたのは声の主だと察し、フィフィは腹立たしさにまかせて怒鳴った。

「俺と話しがしたいなら目の前に出て来い！」

これで姿を現さなければ、フィフィは一切言葉を発しないと決めていた。それに、魔術師ならばウィスperlに頼んでアシユリーやニルに知らせて貰えばいい。

『ああ、それもそうね。』

そう聞こえたかと思うと、目の前に一人の女性が現れた。

「悪戯、大好きなのよ。」

そう言って笑う女性は、美しかった。が、同時に可愛らしさもあった。淡い白灰色の髪は長く、緩く編まれて膝下辺りまで伸びている。胸元の開いた白いドレスは繊細で柔らかい印象で、綺麗であり可愛らしい。華奢な体つきなのだが、悪戯が好きだと言って無邪気に笑う様はふてぶてしくもあった。

(…なんだこの人……)

半分睨みつける様なフィフィの視線に気付かないのか、女性は興

味深々にフィフィの顔を覗き込んで訊ねた。

「ね、フィフィ＝ルセよね？」

「……………あんだ、誰？」

「あ、それを問題にしたかったのよ！私は誰だと思う？」

心底楽しいらしく、彼女はうきうきとフィフィの前を行ったり来たりし出す。

が、フィフィは事も無げに言った。

「興味ない。元の場所に返せ。」

ぴく、と彼女は動きを止め、大仰に溜め息をついた。

「駄目。楽しくないわねえ…人生楽しんでる？」

（は？）

「最近めつきり減っちゃったのよねえ、私と関わりを持つ人。だからちよつと悪戯と意地悪しただけなのに、あなた、冷たいわよ。」

冷たい、と流し目で言われても、フィフィはこの美しい女性を悲しませてはいけない！などとは思わない。

「悪戯と意地悪で不愉快な思いをしない程の仲じゃないからな。俺とあなたは。」

「……………誰かに似てる台詞ね。」

「は？」

「私が言ったのか…」

ぼそりと言って床を睨む女性。フィフィはこの女性に頼るの止め

て、ウィスペルに頼む事にした。

「誰か助けを呼んでくれよ。」

ちりりん、と可愛らしい鈴の音が聞こえると、女性は面白そうに視線をフィフィに戻した。

「駄目よ。光の眷属だろうと私には関係ないことだもの。」

「あんたは何者？」

「ああ、ねえ…睨むのやめなさい。せつかく正式に力を貸してあげようとしてるんじゃないの。睨むのはゼルヴァで充分！」

「正式に力を貸す？」

正式も何も、力を借りた覚えはない。

フィフィには。

「…俺はあんたを頼った事ないけど？」

すると、彼女は大仰に溜め息をつき、首を振る。

「ちょっと。それはひどいわよ。いくら鈍感で能天気だからって。」

「喧嘩売ってんのかあんたは！」

「売られてるのはこっちょよ？全く。クビにならなかったの、誰のおかげだと思ってるの？ひどいわね。」

（クビ…？）

クビと聞いて思い浮かぶのは、半月前の御前試合。フィフィは思い出して言った。

「ニル様とユンのおかげだ。あとは、運かな…」

「運って何よ！一般国民がヴィルジウスに勝てるわけないでしょ！
能天気過ぎよ！」

「……………てめえ…」

「私のおかげでしょ？私の！私が盾になってあげたのよ？」

「ん…？」

あの御前試合では誰も舞台には上がっていない筈だ。それに、あの瞬間だって誰も近くにはいなかった。盾が必要だった場面は、たった一瞬。それで王子は体勢を崩した。

「……………ニル様がくれた魔術…？」

「うーん…まあ、それでも良しとするか。」

「あれはニル様がくれたんだぞ？あんたがどこに関係するんだよ。」

女性はがつくりと肩を落とした。

「ああ…なんて鈍いの…。それとも、かなり馬鹿にされてるのか知名度が落ちたのね。やっぱりこのままじゃいけないわ。忘れられちゃったら意味ないじゃないの…」

「だから、言ってみろよ。どう関係してるのか。」

はてながいっぱい、という感じで促すフィフィに、女性は気を取り直してにこりと笑んだ。それは、人を魅了する柔らかな笑みだ。この時初めて、この女性が人外のもののように感じた。

「私はエウエラ。大精霊よ。」

そう言った彼女の足下には、いつの間にか大きな白い豹が寝そべっていた。

「…エウエラ…？」

「そうよ。分かったでしょう？あなたのクビを守ってあげたのは、私。」

「大精霊、エウエラ！？」

「そうそう、そうなのよ。分かった？」

「……………」

驚愕に言葉を失うフィフィを見て、エウエラは満足そうに微笑んだ。

「私に選ばれる者は少ないのよ？感謝なさい。」

「な…なんでエウエラが…？っていうかあなたはニル様と契約してるんじゃない？」

「んーまあ、助けてあげてもいいとは言ってるけど…元々の契約者はユンファなの。ユンファがニルヴァーナも助けて欲しいっていうから、気が向いている間は力を貸してるだけよ。」

「ユンが…？」

「ユンファは時の中でも稀な子よ。すごい子だわ。」

言いながらエウエラはしゃがんで白豹の毛並みを撫でた。白豹は気持ち良さそうに喉を鳴らす。

「……………それで、俺になんの用ですか？」

不思議そうに首を傾げるフィフィに、エウエラは呆れた様子で言った。

「まだ分からないなんて、鈍いにも程があるわよ！もっと考えなさいよー！」

「正直関わるのめんどくさいんで。言ってくれば済む問題じゃないんですか？」

「済むけど！…済むけど！ああもう！」

悔しそつに頭を抱えた後、エウエラはフィフィを睨みつけて言った。

「あなたを加護してあげる。」

「……………は？」

「右手を寄越しなさい。右手を。」

フィフィが返答する間もなく、勝手に右手がエウエラに伸びた。

「え！？」

「???この生命に宿る輝きは私の糧となり、私を創り出す生命の全てはフィフィールセの僕と成り得る。」

この輝きは生命の輝き。

この言葉は生命の言葉。

混じり合うその真実は全てに宿る意思あるものの楔となり、ここに消え去ることのない約束を刻み、戒める力となれ??」

エウエラは差し出されたフィフィの右手に触れる事なく、両手で包み込むようにして呪文を詠った。手は日だまりにあるかのように暖かくなり、手の甲の図形が光り蠢いているのが確認出来た。息を呑むフィフィに、エウエラは笑ってこう唱えた。

「???彼女が私を受け入れるその時だけ、私は彼女に全てを譲ろう??」

その微笑みに魅入った瞬間、フィフィは柔らかなものに、体も、意識さえも包まれ、ようやく閉じ込められた空間から出られたのだ。った。

「?????うわっ」
「！」

意識が完全に消えかけた時、急激にまた引き戻された。

?? 気に体の感覚と意識が戻ったのだ。それで、うまくバランスが取れず、フィフィはまたもや尻餅をついた。

「うつ、いてー……」
「フィアニス！」

顔を上げると、そこにはニルの姿があった。驚きつつも訝しんでいるのが分かる。ニルは立ち上がるのに手を貸しつつ、不思議そうに訊ねた。

「一体どういうこと？まさか魔術の勉強でもしているの？」
「……まさか。俺はたった今、悪戯が大好きな大精霊様に意地悪されて、ようやく帰してもらっただけですよ？」

皮肉たっぷりに、明後日を見て言うフィフィに、ニルは真剣な面持ちで訊ねた。

「………… エウエラに呼ばれたの？」
「…呼ばれたというか、無理矢理連れて行かれたというか…………」

立ち上がって、ありがとうございます、と礼を言っ
てフィフィは自分の足で立った。歩きましょう、とニルに言われ、二人並んで歩
き出す。

「ところで、ここはどの辺ですか？俺、迷ってて…その間に誘拐さ
れたみたいなんですよね。」

「それで…」

ニルは納得した様子で頷いた。フィフィには何を納得したのか分
からないが、特に聞こうとも思わなかった。

どうでもいい。とにかく休みたい。

「…ここは城の三階。真っ直ぐ行くと古書庫があるわ。分かる？」

「ああ！ってことは右に行くとか武器庫で、厨房もあるんですよね？」

「そうよ。大分覚えたみたいね。」

お陰様で、とフィフィは笑った。

「…それで、エウエラに何かされた？」

「……………ニル様も何かされた事あるんですか？」

「え？」

「大精霊っていうから、どんなものなんだろうと思いきや…。ユン
はなんで契約しようと思ったんだろう…」

「ユンがエウエラと契約しているって、エウエラ本人から聞いたの
？」

「そうですよ。ニル様にも力を貸してるって言っていました。」

「そう……………」

落とした声音に気付き、フィフィは首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「……あまり口外しないで。」

「え？」

不安そうな目を見るのは初めてだ。ニルがこんな顔をするなんて……。フィフィは思わず足を止めそうになったが、ニルが構わず歩いて行くので、少し遅れて続いた。

「……ユンは……稀な子なの。」

「……それ、エウエラも言っていました。」

ニルは何も言わなかった。

「どういう事ですか？何か……よくない事でも？」

ニルはすぐには答えなかった。フィフィもすぐには言葉をかけない。小さく深呼吸をしてから、ニルは答えた。

「……ユンのする契約は、私達とは違うの。その契約を快く思わない人の方が多いのよ。だから……人に言わないで欲しいし、契約について聞かないで欲しいの。」

いつも、しかと目線を合わせ、相手の意向を絡み取ってしまうようなニルだが、この時だけは目線を合わせようとしなかった。僅かに俯き、淡々と話していた。その様がひどく儂気で頼りなく、フィフィは頷くだけに留まった。

ちりん、と耳元で鈴の音が聞こえた。はっと立ち止まると、気付いたニルが頷く。

「あの嵐と植物の件だと思うわ。」

「そう言えばニル様も呼ばれてたんですね…」

「話はアシュリーから聞くといいわ。行きなさい。」

「はい。じゃあ失礼します。」

さつと礼をしてフィフィは駆け出す。半月前と比べて、言葉遣いや礼の動作などが変わりだしたフィフィを見送り、ニルは僅かに笑顔になった。

「遅い。」

開けた途端にそう言われ、フィフィは扉を押した手に力を込めた。

（この人は……）

「すみません。大精霊に埒されていたもので。」

「は？……エウエラに？」

首を傾げたと思ったら、アシュリーは唐突にフィフィの右手を掴んで引っ張った。

「ちよっ……」

その手の甲をじつと眺め、アシュリーは不思議そうにフィフィを眺めた。図形は、今や刺青のように右手全体に広がっており、そこだけ色を抜いたような白さだった。もの言いたげに見られ、さすがに口を開く。

「……何か思うなら、言ってみたらどうですか？」

ごろつきや指名手配犯に、軟弱そうだが、女だ、という目で眺められる事はあっても、この生き物なんだろう、という目で見られた事はない。少なくとも、アシュリーに出会うまでは。なのでとっても居心地が悪くなる。

が、アシュリーの一言は、そんな心地悪さなど一瞬で吹き飛ばした。

「君って、変だと思う。」

「あんたよりマシだ絶対に！！」

先程から理不尽な扱いを受けていると感じていたフィフィは、アシュリーの一言で爆発した。思わず手を振り払う。クルスが見ていたらきつと激怒していただろう。振り払われて少し驚いた様子のアシュリーだったが、ことさら平然と言ってきた。

「君より俺の方が普通。絶対に。」

「んなわけあるか！どう考えたってあんたのが変人だ！」

怒鳴るフィフィに、アシュリーはさらりと話題を変えた。

「あの嵐が始めに発生した、フェルウェイル国に行くから。」

「は？」

「明日出発。今日ニルがレイフィス国王陛下に訪問を伝達してくれる。今回は調査での訪問だ。出来るならついでに事を片付ける。」

「……レイフィスって誰ですか。調査して解決するなら、いつ戻れ

るか分からないって事ですか。」

「……………」

説明するのが面倒臭い。と顔が言っている。フィフィは大仰に首を振った。

「あーもういいです答えなくて！クルス嬢に聞きますから。明日出發ですな分かりました！」

言うだけ言って退室する。アシュリーの返事に構わず荒々しく扉を閉めると、フィフィは怒りに任せて駆け出した。

「あ?????????????!」

行き交う兵士や官がぎょつとしているが、そんなの知ったこつちやない。

この城に来てから、理不尽な仕打ちばかり受けている気がした。

出発の日は快晴だった。

嵐は大きな爪痕を残したものの、夢ではなかったのかと思える程、後の天候は恵まれ、クライスト本来の穏やかな天候が続いている。

城門と城とを繋ぐ庭には、フェルウェイル王国へ向かうアシュリ
ー一行と、見送りの人達がいる。見送りは、ヴィルジウス王子の名
代でリディオス、同僚であるニルと助手のユンファ、そしてルキセ
オードだけだ。

クルスには出立前に、しばらく授業は受けられないと言っておい
た。では旅先でも礼儀作法には気をつけるようにと念を押された。
そして、見送りには行けないから、気をつけて、と。どうしてか訊
ねると、苦笑しながら身分が低いから、と答えられた。小さく謝る
と、その必要はないと言ってくれた。

それにしても、少し寂しい見送りなんじゃないかとフィフィは思
った。けれど、フィフィは元々、見送る、見送られるという習慣が
ない。少し寂しい見送りの、当事者達が平然としていれば、見送り
ってこんなものかと思うに留まる。

「では、クライストの調査団という形で、フェルウェイルへ向かい
ます。」

アシュリーがことさら、じゃあ行ってきます、という風に別れの挨拶をすると、フィフィも今回の旅がなんでもない事のように思えてきた。

「ウルセデイ陛下から、無事に、と託かってきた。我が主からは、早々に解決するようにと。」

リディオスが表情を一ミリも動かさずにそう言つと、アシュリーはげんなりと肩を落とした。

「……ようするに事態を完全に解決するまで帰ってくるな、でもさつさとやれ。ってことだな……」

ぼそりと言うアシュリーに、ニルが言葉をかける。

「道中気を付けて。あの時みたいにならないようにね。」

「余計なお世話。本当に。」

「フィアニス、貴方がしっかり護衛するのよ。その為にいるんですからね？」

突然矛先が自分にむいて、フィフィは若干動揺した。

「はい。きつちりお守りいたします。」

「……いい態度ね。言葉遣いも改善されたし……いい感じよ。」

「……………肝に命じます。」

言葉の端々から圧力を感じてそう返すと、ニルはにやりと笑った。悪魔の笑みだ。しつぽが揺らめいて見える。

「アシュリー様、ファイニス、どうかお気を付けて…」

ユンファだけが心底心配そうにそう言うので、フィフィは思わず笑顔になった。

「心配なさらず。アシュリー様を守るのが仕事ですから。」

ユンファがほっとしたように笑うと、アシュリーは用が済んだとばかりに城門へ足を向ける。フィフィは若干先を思いやりながら、その後に続く。

「第一師団長サージェス。アシュリー様、ファイニス様を無事フェルウェイルへ送り届け、お二人の任に助力し、また無事にクライストへ帰還する。以上が今回の任である。命を賭して任務を遂行せよ。」

ルキセオードにそう言い渡されると、サージェスと呼ばれた師団長他、第一師団が一斉に敬礼した。

「はっ！！」

その様は実に壮快だった。思わず振り返ったフィフィに対し、アシュリーはもうすでに馬車に乗り込んでいた。

（はやっ！自分の見送りだったのに…）

「フィース。」

呼ばれて振り返ると、ルキセオードが側に立っていた。

「ルキ…」

若干緊張を含んだ姿勢に、フィフィも緊張する。

「クライストの大魔術師は、常に命を狙われています。フィースも気を抜かないよう。アシュリー様を狙うに当たって、まずフィースから、と考える事もあります。」

そんなに危険なのか、という思いが顔に出たのだろうか。ルキセオードは微かに頷いた。

「…了解。自分とアシュリー様の身くらいはなんとか守れる。」

心配するな、とは言えなかった。ギルドで危険な目にはあっているが、これから起こりうる危険がその比に及ばない事だってあるだろう。

「…それは良い知らせです。いざという時、師団は捨て置いて構いません。俺の師団です。簡単にはやられませんから。」

ルキセオードはそう言って微笑んだ。それで、フィフィも緊張が解れた。しっかりと手を握って別れをすますと、急いで馬車へ乗り込む。

と、アシュリーと目が合った。

「……なんですか？」

「……………」

何も言わずに視線を逸らす。わけが分からない。が、それはいつもの事なので。

（アシュリー様って目の付けどころもちよつと変わってるしな）

くらいにしか思わなかった。

「第一師団、出立！」

サージェスの号令で、一行は動き出す。見送りの四人は、ルキセオードとユンファを残し、すぐにその場を去って行った。しばらくその場を動かなかった二人だが、ユンファが口を開いた。

「……天魔の一匹でもおつけするべきでしょうか……」

その言葉に、ルキセオードはやや緊張した。ユンファがどんな能力を持っているのか、よく知っている。

「……ユンファ様。貴方がそうしたいのなら、おつけになればいいと思いますよ。」

今度はユンファが、緊張した面持ちでルキセオードを見上げた。ルキセオードの目は静かで、温かだった。

「けれど、本当にそうしたいと思ってらっしゃいますか？」

「っ……」

とたんに目を落とすユンファ。こんな子供に頼りな気にされると、

大体の者はつつい甘やかしたくなるが、ルキセオードは先程と変わらず、しっかりと姿勢を正したまま言った。

「ユンファ様。貴女は確かに強大な力をお持ちで、それを頼りにされる事も多い。ですが、貴女はニルヴァ？ナ様の助手であり、その前に、貴女という人間です。それを忘れてはいけません。」

「……え……？」

ユンファは驚いてルキセオードを見上げた。

「力を使う事はお好きではないのでしょうか？なら、必要に迫られた時以外は、無理に使う事はありません。」

「……………」

ありがとうございます、と言わなければと分かっている。が、言葉が出なかった。

ユンファの力は特別に稀で、忌み嫌われる場合がほとんどだ。それでもこの城で働く事になったのは、ひとえに、力の強大さだ。“兵器として”この城に迎えられたのだ。本当は働きたくなかったが、ユンファには居場所が何処にもなかった。だから、生き存える為に招致を受け入れた。その時、心は死んでいた。それを救ったのがニルで、ニル以外にユンファを“人”として扱ってくれる人は存在しないと思っていた。

だから、ルキセオードの態度、そして言葉には驚いた。ユンファを小さな、頼りない子供としてではなく、忌み嫌われる化け物ではなく、同じ城で働くものとして、見てくれていると感じたのだ。これは、ユンファには大発見だった。幸せな出来事だ。

「……わたし…怖くないんですか？ 気味悪く…ありませんか？」

おそろおそろ聞いた質問には、明るい笑みが返ってきた。

「私は何も怖くなどありませんよ。むしろ頼りになりますし、天魔は大切なものなのでしょう？」

「……でも、わたしは……」

ルキセオードはそつと肩に手を置いた。人の手の温度が、ユンファに伝わってくる。

「ユンファ様。貴女はその力を、気味が悪いとお思いですか？ 怖いと？」

ユンファは大きく首を横に振った。

「なんの為に振るわれるべきだとお思いですか？」

これには、少し考えた。戸惑いながら答える。

「……へいかには、国の安全を守るために使えと言われました。そのためには血を流すこともひつようで、じゅうような事だと……」

「ニルヴァ？ ナ様は如何です？」

「…ニル様には、自分と、守りたいものがきずつかないために使いなさいと言われました。」

逡巡するユンファを見て、ルキセオードは微笑んだ。

「では、ユンファ様。貴女の力は、貴女が使い方を決めればいい。貴女が陛下の意を汲みたいと思うならば、その為に使えばいい。二

ルヴァ？ナ様の意を汲みたいと思うならば、その為に使えばいい。」

「……………わたしは……………」

「どちらを取ってもいいし、どちらも取らなくてもいい。全ては貴女の力で、貴女が決める事なのですから。」

不安気に彷徨っていた視線は、少し経つと彷徨うのを止め、しっかりとルキセオードを見上げた。

「はい。わたしは、わたしの考えで力を使います。」

馬車の中は静かなものだった。アシュリーは出発後すぐに眠ってしまった。フィフィはすることもなく、しばらくは城下の景色を眺めていた。

「……………」

賑やかな様子を見ると、助手になる前を思い出す。親しい知り合いも、仲の良かった仲間もいた。しかし、以前の生活では、いくら親しい仲であっても、別れは唐突で、当たり前のことだ。今こうして町を眺め、知り合いを見つけたところで別れを言いにわざわざ馬車を降りる事もない。そんな事するのは不自然であつたし、可笑しい事だ。

そしてまた、再会も出会いも唐突で、自然な事。フィフィにとってそれが常識だ。別れも、出会いも、大きな出来事ではない。

しかしそういう事をしないと後でうるさいのが一人だけいる。その人物の顔と、何を言われるかを想像して、フィフィは若干目つきが悪くなった。

「具合でも悪い？」

思いもかけない言葉を聞いてかなり仰天した。アシュリーがいつの間にか起きて、ファイフィを不思議そうに見ていた。

「ああ、いや。…馬車の中って慣れてないんで、馬に乗せてもらっていいですかね？」

そう聞き返すと、アシュリーは頷いた。

「サージェスは良いって言うと思う。」

「じゃあ、聞いてみます。」

そう言って、進む馬車の扉を開けると、横にっていた騎士がぎよっとして慌てた。

「ファイ、ファイアニス様…！危ないですよ。」

「平気だよ。俺、馬に乗ってた方が楽なだけだし、乗っても良いかサージェス師団長に聞いてくれるか？」

「は…？はあ…。しばしお待ちを。」

そう言うと、騎士はすぐに前方へ移動して聞いてくれた。サージェスが驚いたように振り返り、また騎士に視線を戻して何か話す。騎士も言葉を返し、しばらく考えてから、サージェスが下がってきた。

「ファイアニス様。あいにく、ファイアニス様の馬を用意してございませんで、騎乗なさるのは難しいかと……」

「じゃあ御者席にいたら駄目か？」

「はあ……。御者が恐縮してしまうと思いますが…」

「……………そーかー」

扉を開けた状態のまま悩むフィフィに、アシュリーが声をかけた。

「サージェスをそれ以上悩ませないように。馬がいいなら、リーリクに着いたらあげるから。」

「滅相もございません、アシュリー様。わたくしが至らず、フィア二ス様には申し訳ありません。」

「え、いや、俺の我が侘だから……………すみません。アシュリー様、お願いします。」

「……………サージェス、もういい。」
「はっ！」

大人しく扉を閉めると、フィフィはアシュリーに頭を下げた。

「すみません。お願いします。」

「……………そんなに馬がいいの？」

「馬がいいと言うよりは、じっとしてるのが性に合わないんです。だから、まだ馬に乗ってた方が楽だなーっと思ひまして。」

「……………寝てれば？」

「俺、あんま長い時間寝れないんですよ。どうしても起きてしまいます。」

「……………取り合えず座って。」

言われてフィフィは対面に腰掛けた。

「リーリクに着くまでは我慢して。サージェスは俺達を守るためにあちこち気を配らないといけないから、煩わせないように。」

「……………はい。」

「……………」

数時間後、フィフィは眠っていた。規則的に起こる揺れに眠気を誘われたのか、あるいは差し込んでくる日差しの暖かさか。もしかしたら心地良い音のせいかも知れないが、うとうとしていると思ったら、意外にも早く寝入ってしまった。

腰掛ける為というよりは、安らぐ為の馬車の座席にすっかり身を委ね、肘掛けにもたれるようにして眠り込んでいるフィフィを、アシურიは眺めていた。

人がこんな風に寝ているところに遭遇した事がないので、珍しかった。

そう言えば、フィフィが来るまでは、誰かとこんなに長く一日を一緒に過ごす事はなかったように思う。それに、ここまで人前で無防備でいられる人にもあった事がない。無防備でいる、という意味ではヴィルジウスもそうしているが、彼とはまた違う。というか、彼は違う。色々な意味で人とは違う。比較にはならないかも知れない…。

そう考えて、アシურიは頭を振って考えを追い出した。

（さっきは何をあんな真剣に見てたんだろう…）

外を眺めていても、アシურიの興味を惹くものは特にない。ただ人がいて、通り過ぎて行くだけだ。

フィフィの事を、不思議だと思う。月給につられて城に来たらし

いが、そもそもギルドの賞金稼ぎが、どうして城で働こうと思ったのだろうか。確かに安定した収入にはなるだろうが、ギルドとは違い、どんな危険も命じられれば断る事など出来ないというのに。

軽い気持ちで来たのかも知れないと思いきや、御前試合も逃げずに、むしろ堂々と戦い、助手兼護衛という仕事をきちんと果たそうとしてるように見える。

（変……）

そう言ったら本人は怒っていたが、そう思えるのだから仕方がない。フィフィは変だ。アシュリーにはそう思える。最初の頃は城に居づらそうだったのが、一週間も経てば何喰わぬ顔で歩いているし、始めは誰もフィフィに好意的ではなかったのに、いまではよく話しかけられているのを見かける。

そもそも、ルキとあんなに親しくなっていたのには驚いた。ルキ自身は誰にでも友好的な態度を取るが、あれはもう、心を許していると言っているだろう。それに、ユンファがかなり懐いているのにも驚いた。

（変……）

こんなにも自分をさらけ出して、周りに命を預けて、よくギルドの世界で生きて来られたと思う。それとも、本当は誰にも自分を見せていないのだろうか。

「……………よく寝てる……」

呟いても、ぴくりとも反応しない。もうとっくに町から外へ出ているが、その変化にも気付かないのだろうか。フィフィはすやすや

と寝入っている。

「……………これだけ寝てて、護衛なんて出来るの…？」

そんな疑問にも、気付かない。アシュリーはフィフィの観察にも飽き、自分も寝る事にした。

リーリクという、クライスト帝国最東端の町についたのは、出発から三日目の事だった。

町に着いて、アシュリーに馬を貰って（魔術で移動させたらしいが、フィフィは見れなかった）、一泊して、さあ朝だ出発というところまできて、フィフィはようやく気付いた事があった。

「アシュリー様」

馬車に乗り込もうとしていたアシュリーに声をかけるが、アシュリーはやはり見向きもせずに答えた。

「なに。」

フィフィは馬に騎乗して続けた。

「今思ったんですが、クライストからフェルウェイルまで、どうして魔術で移動しないんですか？」

その質問に、師団全員の視線を集めた気がした。

「……………」

言葉を失ったのはアシュリーだけではなく、師団全員が、驚きに硬直していた。

「……………いや……………すみません……………政治には疎いもんで……………」

あまりの緊迫感に、思わず肩を竦めて謝った。アシュリーは大仰に溜め息を吐いた。かなり呆れているようだ。

「……ちよつと乗れる？」

馬車へ入れ、という意味だ。フィフィは馬を騎士に預け、しばし馬車で移動する事になった。

「どうして魔術を使わないか、考えてみて。」
「……………」

説明するのが面倒臭い、と顔に描いてある。が、サファイアで的一件と同じように、話さなければいけないと思っているようだ。

（こりゃあ、国同士の関係に関わることか？）

そう判断して、フィフィはよくよく考えてみた。しかし、魔術でぱつと移動する事に、そうそう問題はないように思える。便利じゃないか。ぱぱつと伝達出来るし。

「……………まずいんですか？」

そう言つと、アシュリーは頭が痛そうに顔をしかめた。

「……………相当信頼しあっている国同士でなければ、魔術で転移するのは宣戦布告に値する。」

「えっ……………移動しただけで？」

「攻撃とみなされる。それくらい、国同士の間で転移移動は重要視されている。しないのが常識だ。万一魔術で相手の許可なく移動すれば、移動先以外の国からも非難されるだろうな。」

「なんで……いや、何故ですか？……あつ！国境が関係なくなるから？つまり、関所を通り抜けられるからですか？」

「そう。不法侵入になるけれど、それ以上に、魔術での移動は内容を細かく把握出来ないから、国際的に禁止されている。」

「行かれちゃまずいところに入れちゃったり……って事ですね？」

「そう。……ギルドに魔術師はいなかったの？」

「あー、いましたけど……ギルドの魔術師って変態ばつかでしたから、関わりませんでした。」

遠い目でそう言われると、アシュリーは何かいけない事を聞いた様な気がして、ほんの少し罪悪感を感じた。

「……まあ、国際的禁止事項を平気で破っている者もいるけど。」

「は！？」

「聞いた事ない？ウォルスIIイセリアダイン。」

「……あ？？？？っ！！神出鬼没の魔人ウォルスだ！！」

フィファイが突如大声を出したので、アシュリーはその煩さに思いっきり耳を塞いだ。

「あ、すいません」

「煩い。無駄に煩い。」

「……………」

かなり耳に響いたのか、アシュリーはしばらくしてから、ようやく手を耳から外した。

「…ウォルスは国際指名手配。けどまあ、捕まらないだろうな。」

「………そんな事言ってるいいんですか？」

「クライストに仇成さない限りは。…それに、あいつは特別だから。」

あの子は稀なの、と言ったエウエラの言葉が被さった。魔人の存在も稀、という事だろうか。

「…特別、ですか？」

「そう、特別。古代の一族の末裔だから………」
「へー………」

よく分からないが、そうなのか。と、思い込んだフィフィの態度が気に喰わなかったのか、アシュリーは、もういいよ、と言ってフィフィを馬車から追い出した。再び馬に騎乗したフィフィは、うきうきと旅を再会した。

クライスト帝国を北東へ進んでいくと、やがてはフェルウェイル王国につくのだが、その間には、クライストから順に、レシテ国、ハークヴェル帝国、ラナス国、ピオティス・オス共和国、イイエル国がある。

嵐は海沿いにやってきたから、その痕跡を調べながら辿るのだ。

最短距離で隣接する国々を通るのなら、ハークヴェル帝国にピオティス・オス共和国、そしてイイエル国だけで済む。そうフィフィが言つと、呆れた様子でこう返ってきた。

「それじゃあ調査にも解決にもならない。」と。

そんなわけで一行は今、レシテ国にいた。

レシテはクライストに比べると、随分小さな国だ。それもその筈、クライストとハークヴェルという帝国に挟まれている形になる。両帝国に海へ押しやられ、肩身の狭そうな国だ。

実際、アシュリー達が到着するなり、国王の使いが慌ててやってきて礼を尽くした。事情を説明して、後にハークヴェルへ渡ると伝え、それならばと伝令役を買って出たのだ。アシュリーはそれを断ったが、あまりに恐縮した態度に、側で見ていたフィフィは可哀相に思えてしまった。

「なんか……可哀相なくらい縮こまった態度ですね。」

国王の使いが去ると、フィフィはぽつりと呟いた。それにアシュリーが淡々と答える。

「帝国に挟まれているから仕方がない。それに、両国の仲はあまり良くないから、余計に敏感になってるんだろ。」

「あー……噂には聞いてましたが、そんなに仲悪いんですか？」

アシュリーは面倒くさそうに顔を上げる。今は宿の一室の中。外には見張りの騎士もいる。それを確認して、アシュリーは答えた。

「両陛下のものの考え方が違っし、意見の通し方も違っ。仲が良いとは、とても言えない。」

「……間にあるレシテとしては、穏便に毎日を送りたいわけですね。」

フィフィがそう言うと、アシュリーは深く頷いた。

「もしも両帝国が戦争でも始めれば、レシテは火の粉を被るどころか、真っ先に戦場にされるのは分かりきってるから。」

「……実際、戦争になりそうなんでしょうか？」

そう聞くと、アシュリーは沈黙した。フィフィも言葉を失う。あまり仲が良いとは言えない。というのは噂で知っていた。それは、クライストの国民の間では当たり前前に流れている噂だったが、それを真剣に考えているものはいないだろう。それこそ、城に仕える者以外には。

「……そんな状況で、ハークヴェルに入って大丈夫なんでしょうか？」

アシュリーは溜め息とともに答えた。

「……今のところは。」

「どういう事ですか？」

問いかけるフィフィに、アシュリーは呆れた様子だ。

「……君は、本当に質問が多い。」

「今説明して下さると、後々面倒が少なくなりますよ。」

につこり笑ってそう言うと、アシュリーは観念したように視線を逸らした。

「………… ハークヴェルはクライストを落とす機会を虎視眈々と狙っている。表立っては同盟を申し込んだり、不可侵をうたってはいるが本心は違う。」

アシュリーは淡々と続ける。

「我らがウルセデイ陛下は争う気はないと暗に伝えてはいるが、だからと言って侵略を許すわけにもいかないから、ある程度はこちらの力を誇示する必要がある。」

アシュリーは暗くなってきた室内を照らすために、燭台に火を灯した。とはいっても、実際はウィスペルが飛び回って灯を灯す。

蠟燭の光に照らされていると、アシュリーの神秘さがいつそう際立つ。

「それが、ゼル又陛下には忌々しいようだ。」

そう言っアシュリーはしばらく窓の外を眺めた。ひょっとしたら色々と思いを馳せていたのかも知れない。

ふとフィフィに向き直ると、なんでもない事のように言った。

「まあ、すぐにどうこうなるような対立じゃない。今のところは。」

「………… それにこした事はありませんね。」

「もう寝るから、出てって。」

眠た気に目を向けるアシュリーに言われてフィフィは一礼し、部屋を出た。

翌朝、ファイフィはウィスベルに起こされ、心地良い朝の空気をいっぱい吸い込んで身を起こした。今日明日はハークヴェルを通過するのだ。少し警戒しておいた方がいいかも知れないと、ファイフィは少し気合いを入れた。

朝食を摂ると一行はすぐに旅立つ。その時もレシテ国王の使いがわざわざやって来て見送ってくれた。その様はまさに帝国の僕だ。なんとも言えない気持ちでファイフィはレシテを後にした。

レシテ国とハークヴェル帝国の間には、短い渓谷がある。道があるとはいえ、大きな岩が多く見通しがかなり悪い。そのせいか、師団全体が僅かに緊張しているように見えた。渓谷を抜けて行く人々もいるのだが、その人たちも僅かに警戒しながら通り抜けているように見える。

（見通しは確かに悪いけどな……。こういう場所で襲撃にでもあつたら、この大所帯じゃ身動き摂りづらいつたらないな。）

少し馬の足を止める。両側にそそり立った大岩を見上げると、その上に逞しく生い茂っている緑が見えた。

（……ほんと、見えない……）

前を見ると、少し止まっていただけなのに師団の姿が見えなくなりそうだった。

（道なりも急で、はぐれはしないけど見えなくなるのは簡単だな。）

そう焦らずに馬に前進を促し、師団を追う。すると、道を曲がってすぐのところ、師団とフィフィの間辺りに座り込んでいる旅人が目に留まった。通り過ぎようと近づくと、その旅人の顔色が悪い事に気づいた。マントを羽織り、フードも被っている為分かりづらいが、顔色が悪い。

フィフィは馬を止め、その旅人の側に降りた。気づいた旅人が顔を上げる。その両目がとても珍しいものだと思いつく。

（深い紫色……見た事ないな……）

思わず魅入ってしまったっていると、旅人が微笑んだ。

「どうかしたか？」

少し低めの、心地よい声音。その目も、その声音も、どこか常人とは違う気がして、フィフィは僅かに警戒した。

「……顔色が悪いぞ。具合でも悪いのか？」

男は驚き、また微笑んだ。

「俺を案じてくれてるわけか。」

純粹に嬉しそうに微笑まれると、警戒している自分に少し罪悪感を感じるが、ここは気を引き締める。

「レシテなら近いぞ。もう少し頑張れば着く。」

「あいにく、レシテには用が無い。だが心配無用だ。すぐに良くなる。」

「薬でも置いてってやるうか？」

「……お人好しだな。」

「別に、分けられる時は分けたいだろう。で、要るのか？」

「いや……お前の気持ちは貰っておこう。薬は不要だ。」

「そうか……まあ、気をつけろよ。」

そう言つて騎乗するフィフィに、男は嬉しそうに微笑んだ。フィフィは少し離れてしまった師団と合流する為、馬の横腹を軽く蹴った。

「お前、いい女だな。」

（……！）

声が耳に届いたのは馬が走り出してからで、フィフィはそう言った男の姿を確認する事が出来なかった。この格好で、少し話したくらいで、こうも確実に女だと判断された事に驚いた。

（あいつ、一体……？）

振り返ってももう岩に阻まれて男は見えない。何か厄介な相手に絡んでしまった気がして、フィフィはじわじわと不安になっていた。た。

??アシュリー一行はレシテの短い渓谷を無事に越え、もう一つの帝国、ハークヴェルへようやく足を踏み入れた。

溪谷を越えた所はなだかな下り斜面で、ハークヴェルの城下町を一望出来る。

「うわぁ……」

その壮大な景色と共に、伺い知れない予感がフィフィの胸をざわつかせた。

この国には何かがある？そんな予感が。

ハークヴェルの城下町へと足を踏み入れる。

溪谷^{けいこく}から伸びる斜面には長く石畳が敷かれ、城下町に近い所は鉄で作られたアーチで飾られていた。細工は美しいが、重々しい雰囲気だ。門兵もアーチに沿って並んでおり、入るのも出るのも妙に緊張感を誘う。

そのアーチが終わると、一際大きく荘厳な鉄門が開かれており、いかにも“入れてもらおう”という印象を受ける。

入ってすぐにアシュリーは馬車を降り、待機していたハークヴェルの兵によって、一足先に城へと運ばれていった。レシテとは違い、さすがに帝国はただでは通してくれないらしい。

「アシュリー様、馬に乗りますか？」

「いい。」

その方が楽なのに、とフィフィは目で訴えてみたが、アシュリーは見向きもしないで歩き出した。一応護衛でもある為、フィフィも仕方なく馬を降りた。馬はサージェスへお願いした。

「なんか、重々しい所ですね。」

そうフィフィが呟くと、アシュリーは淡々と言葉を返した。

「ハークヴェルは鉄がよく採れる。だから城はもちろん、そこらの住居だってクライストよりよっぽど丈夫だろう。」

「ああ、クライストは木造ですよね。」

頷いてから、ふと疑問に思ってアシュリーに問う。

「もし火事なんか起こったら、クライストってまずいですよね？」
「は？なんで？」

アシュリーは心底不可解そうにフィフィを振り返った。

「だって木造じゃないですか。ここと比べたら断然危ないですよね？」

「……………君は、馬鹿？」

「……………はあっ？」

毎度の事なのだが、よくよく考えればまだ三ヶ月と経っていない。だから、そう。まだまだ言われ慣れないのだ。青筋が浮くのも仕方ない。

「ば、馬鹿なのはよく分かってますから、分かるように説明してくれませんか？」

怒りすぎて笑顔しか出ないフィフィに、アシュリーはつんと前を向いたまま答えた。

「君は人に答えを求めすぎだ。少しは自分で考えなよ。」

（あんたが説明しなさすぎなんだろうーがっ！）

「アシュリー様。俺が無知なの分かってますよね？」

怒りが爆発しそうなのを堪え、フィフィはアシュリーの行く手を遮って仁王立ちした。

「……邪魔。」

心底煩わしそうに顔をしかめられ……キレた。

元来売られた喧嘩は買う性分だ。

うん。よく我慢してきたと思う。

「あれ、分かってないんですか？ 求人書類も見てたのにそんな事も頭に入らないんですかねえ、アシュリー様は。魔術の事しか分かんないほんくらなんですかねえ？」

「なっ……！？」

さすがのアシュリーもほんくら呼ばわりされて癢に障ったようだ。さつと強ばった表情を見て、フィフィは胸がすつとした。思わずにんまりしてしまう。

「ニル様が色々教えてくださるわけですね。ついでにアシュリー様もニル様にとやかく言われるわけですねー？」

ふふふと笑って首を傾けると、アシュリーはわなわなと震えてい

た。信じられないものを見る様な目でフィィを見つめている。

一応、衆目を考えて声は控えめだ。が、側でサージェスと師団が硬直していた。皆、フィィを恐ろしげに凝視している。

（ん……？なんで怖がつてんだ？）

そう思ったのもつかの間、アシュリーが動いた。

ぎつ、とフィィを睨みつけ、どん、と思いつ切り押しのけられた。

「っ！？」

アシュリーにとって全力でも、鍛えてあるフィィには弱い衝撃だったが、それよりもアシュリーの強い視線に驚いた。

「うるさいっ！」

「へ……？」

一言叫ぶとずんずん歩いて行ってしまう。

「……………へ？」

フィィの挑発に呆れるか怒るかと思っていたが、あの怒り方は予想と違った。何か、嫌な事でも思い出させてしまったのだろうか。

（……………あれ…なんかあたし…古傷抉^{えぐ}った……………？）

恐る恐る第一師団を振り返ると……………。

「……………」

全員が全員、気まずそうにフィフィをちら見していた。

（うわっ！直視出来ない程まづかったのか…！？）

青ざめて慌ててサージエスの元へ駆け寄る。

「さ、サージエス！俺、まずい事言った？」

「はい。フィアニス様。あれはかなりまずいと思われます。」

「即答！？即答なのか！？」

今度は黙って、全員が頷いた。もはや、言葉が出ない。

「……………」

これは、まずい。

（あたし…今度こそクビ？）

「いや…こんなんで…？」

フィフィは数秒考えて、師団を振り返る事なくそそくさとアシユリーの後を追った。

追いかけて、近づいて。フィフィはかける言葉に迷ってただ後ろ

を歩いた。

（いや…どうしようか。）

アシュリーは怒っていた。それと同時に、何かを耐えているように見えた。

（どこだろ…？ぼんくら？…いや、魔術しか分かんないってところか？）

考えて、きつとそうなんじゃないかと思った。

アシュリーは魔術以外の事が苦手だと、誰もが少なからず分かっている。だからこそニルも、兼護衛という職務をファイファイにやらせたがったのだろうし、アシュリーをからかうのだろう。

（アシュリー様…結構気にしてんのかな…）

いつもいつも傲岸不遜ごうはんふそんなものだから、何事にも疎いのかと、勝手に思い込んでいた。

それに、さっきのは傷つけるつもりはなかったのだ。

ちょっとだけ、いつもの腹いせのつもりだった。

「……あーあ……」

小さく零す。こつやって零れた言葉は、なかった事には出来ないんだと、今更思った。

どんなに傲岸不遜に見えても、アシュリーだって人なのだ。

そこは、軽んじてはいけなところだった。

「アシュリー様…」

声をかけてみるものの、反応は期待出来そうにない。

（今は無理か…）

前方からハークヴェルのものだろう、重厚そうな馬車がくる。それが着く前に、とフィフィは思い切ってアシュリーの横へ駆けた。

「俺、言いすぎました。すみません。」

一言だけ、アシュリーの目を捉えて言った。

アシュリーはふいと視線を逸らす。それで、フィフィは一步後ろへ下がった。

馬車でアシュリー達を迎えに来たのは、妙齡の女性だった。いかにも賢そうで、ニルと似た雰囲気があるものの、なんだか無機質な感じがして、フィフィの目にはちよつと不気味に写った。

「ようこそ、ハークヴェルへ。わたくしは皇従（しんじゆう）のセシリア・ヴェルフェアと申します。ウィルレイユ様は馬車へどうぞ。師団の方々は恐れ入りますが、後へ続いて下さいませ。」

（なんだこいつ…）

フィフィは眉根を寄せた。丁寧と思いきや強引だ。

一つ頷いてアシュリーが馬車へ向かうと、当然の如くフィフィも後へ続いた。

「失礼ですが、こちらは？」

セシリアはずっとアシュリーとフィフィの間へ入る。その所作がいやに静かで、フィフィはざわつきを感じた。

（なんだ、こいつは…？）

間に入られて不快だと思ふ以前に、何かがおかしいと感じた。何かが異様だ。

「俺はアシュリー様の助手で、護衛も兼ねています。お側にいるのが仕事です。」

不快感を押さえ込み、教えられた態度を絞り出す。セシリアは怪訝そうにした後、アシュリーへ視線を向けた。

「ウィルレイユ様。この者が必要ですか？」

（！？）

ざわり、とうなじがざわつく。しかしそれを一瞬で押さえつけ、フィフィは主の許しを待った。アシュリーはすでに馬車へ乗り込んでいて、その表情は伺えない。

「……………御者席へ。」

普段となんら変わらない口調。しかし、拒絶されているのが分かった。

セシリアがフィフィへ視線を戻し、淡々と言い渡す。

「こう仰っています。よろしいですね。」

「……………はい。承知しました。」

ぐつと拳を握りしめ、馬車の脇を通り過ぎて御者席へ乗り込む。隣に座るハークヴェルの兵士は、鉄仮面で表情さえ見えなかった。

（…胸くそ悪い国。）

そう心の中で呟いて、フィフィは大人しく馬車に揺られた。

ハークヴェルの城は荘厳だった。加えてやはり重厚で、一番息苦しく感じる。馬車は城の中まで入る事が出来て、円形に開けたところで止まった。

セシリアが先に馬車から降りると、アシュリーも出て来る。意識してフィフィを視界に収めないようにしているのが分かる。それには構わず、フィフィは御者席から降りてアシュリーの後へ続いた。

師団は城内正門前に居るようだ。

「陛下にお会いになられた後、すぐに例の植物を見に行かれますか？」

セシリアにそう問いかけられると、アシュリーは軽く頷いた。

「そうさせて頂きます。」

「承知致しました。案内をご用意致します。」

「それには及びません。」

きつぱりと案内を断ったアシュリーに、セシリアが僅かに顔をしかめた。それを見て尚、アシュリーは言った。

「お手数をかけて頂く程の事ではありません。ここからでも十分に場所が分かります。」

セシリアは怒気の籠^{こも}った目でアシュリーを見据える。

「失礼ですが、ウィルレイユ様。ここから植物の魔力を、感知出来ると？」

「もちろんです。……こんなに濃い気配がするではないですか。」

くすりとアシュリーが笑った。

（えっ！？）

びっくりして、フィフィは先程の暗い気分が吹っ飛ぶ程にアシュリーを見つめた。

（初めて見た……アシュリー様……こんな顔出来るんだ……）

高圧的で、小馬鹿にしたような、それでいて綺麗な笑み。

セシリアの纏う雰囲気が変わった。ぐっと拳を握りしめ、羞恥しゅうちと怒りに耐えている。この程度の魔力も感知出来ないのかと、そう言われたも同然なのだ。

しばし拳を握りしめて怒りを抑えると、セシリアは射る様な冷たい眼差しをアシュリーへ向けた。

「……さすがは、ウィルレイユ様。案内などと、失礼でしたね。」
「お心遣い、痛み入ります。」

わざとらしく感謝の意を伝えれば、セシリアは忌々しげにそれを見やって歩き出した。

「謁見の間はこちらでございます。」

セシリアの視線が外れた途端にいつもの表情に戻ったアシュリーの後に、フィフィも慌てて続く。そして、じっとその後ろ頭を見つめた。

（……意外とやるんだな……）

フィフィと顔を突き合わせるといつも子供っぽい喧嘩しかしないから、仕事なんか出来るんだろうか、と内心呆れていたのだ。

（でもいいのか…？ハークヴェルはクライストを狙ってるのに…喧嘩吹っかけるみたいな態度とって。）

フィフィにはよく分からない。

もう少し後でアシュリーに聞いてみよう。そう思ってた黙って後ろを歩いた。

謁見の間を出ると、どこにも兵士がいなかった。このままどうぞお好きに、という事らしい。城へは留まらずに先を急ぐと伝えてあるせいかも知れない。師団は城の一階で待機だ。

ハークヴェル国国王、ゼルヌへの謁見は、かなり疲れた。

何せ威圧感が半端ない。この国の雰囲気からして威圧感たっぷりだが、加えて国王だ。なんか、身体がすごく凝った気がする。

アシュリーとの壁が、さらに居心地の悪さを生み出している。

（でも、いつまでもぐだしてんのもなあ…）

思えばこんな風に、誰かと長い時間行動を共にする、という事がなかった。

ギルドの仕事で何人かで組む事があっても、気が合わなければ解散する事が多かったし、ともすれば報酬の分け前争いで真剣に戦う事もあった。

（そう考えると……アシュリー様と助手のあたしって……“絶対裏切らない相手”？）

もしそうなら、それは、とても不思議な関係に思えた。

（……まあお互いに排除する理由がないしな。）

助手は要らないと言っているアシュリーも、単に面倒くさいだけで、特に不都合があるというわけではないのだ。そりが合わなくても、一緒にいけない事はないと思う。

（でもなあ……）

どうしてか、このままでは嫌だった。単に居心地が悪いというだけかも知れないが、なんとなく、このままにしておきたくなかった。

「アシュリー様。このままあの植物の所に行くんですよね？」

隣へ並んでその声をかけると、アシュリーはちらりとこちらを眺めた。すぐに視線を前へ戻すが、フィフィがずっと横に並んでいると、観念したように小さく息を吐いた。

「……君は護衛の仕事をして。」

短いけれど、それは紛れもなくフィフィを受け入れた言い方で。

「はい！喜んで！」

弾んだ声のフィフィをぎょっとしたように見つめ、何故か腹が立つたらしく、アシュリーはずんずん進んで行った。

当然、フィフィも追う。たった一言で喜ぶ自分が可笑しくて、無性に笑えた。

(アシュリー様の言う通り、あたしって変なのかもな)

- 16 - (後書き)

皇_レ從_レ：言_レつてみれば皇族、城のお使い係です。勝手に考えた役職です。

植物のある浜辺までは、城から遠く離れていた。浜辺へ着いた時はもう陽が暮れかかっている、空は赤く、不気味に光っていた。

「あ、あそこですかね？」

見た事のある色彩がちらつき、フィフィはアシュリーの前を行こうとした。

が。

「ちょっと！何してるの。」

「え、何って、先に行って見て来ようかと……」

がしっ、とアシュリーに腕を掴まれた。ついでに思いっきり睨まれている。

「君、サファイアでの話、聞いてなかったの？」

「サファイアでの………？」

言われて思い返してみる。

（そっぴやフォンとなんか話してたっけ？それに帰り際に触るのかなんとか……でもあれってアシュリー様がなんとかした後だよな？）

うーん、と考え始めたフィフィを見つめ、がっくりと肩を落とした。

「……何も頭に残ってないのか…」

ごまかして笑うと、睨まれた。

「“命が惜しくば、自然の摂理から外れているものに触れるな”って言ったんだ。君も、無闇に近づくんじゃない。」

その目は、とても静かで、深くて。

「……はい。」

あんまりにも神秘的で、見蕩れてしまつて。やっぱり耳に残らなかった。

「……後ろにいて。あれには触らないで。」

「はい。」

素直に頷いて、ちゃんと後ろへ回つた。

ハークヴェルに辿り着いていた植物は異様な程増殖していた。完全に浜から上がり、花畑と化した植物の中に、浸食された民家が見えた。ちよつとした密林だ。

「…すごいですね…この辺りに住んでいた人は、非難したんだろうな…」

アシュリーは黙ってじつくりと植物を検分する。

（結構力が喰われてる…。確かにすごい有様だ。けど……何かおかしいな…）

ふと足下の幹を見て、息を呑んだ。

（……水を纏わりつかせてる…？）

植物の根元にたゆたう水は、液体である筈なのに砂に馴染まず、生き物のように揺らめきながら植物に纏わりついていた。

魔力を少しだけそこへ零してみる。と、途端に貪るようにアシュリーへ向かってきた。

（！？）

「アシュリー様！」

ぞわりと総毛立つような、こうした感覚が身体に絡んでくる。と同時に力を大量に吸われている感覚があり、ぐらりと目眩も感じた。

だが、それは一瞬だった。どん、と衝撃を感じたかと思うと、不快な感覚は消え失せた。おまけに、何か温かい感覚がアシュリーを包んでいた。

（なんだ…？）

状況が呑み込めず瞬きするアシュリーの耳に、ほつと息吐く音と、心配そうな声が聞こえた。

「大丈夫ですか？アシュリー様。」

「……………」

聞き慣れた声に視線を動かすと、フィフィが心配そうに覗き込んでいた。

（いつの間に…？それに、これは…？）

状況を把握して、一気に驚きが増した。

「俺を助けたの？」

「は？」

助けた本人としては、そんな質問はあんまりだと思う。今度はフィフィががつくりと肩を落とした。

「この状況でそれ言います？なんか、やばかったじゃないですか。」

あの水に襲われた時に襲った衝撃は、フィフィがアシュリーに激突する形でその場から退いたかららしい。その勢いに当然ついていなかったアシュリーは尻餅をつき、フィフィは抱えたままだったのでつられた。

状況をしっかり把握したアシュリーが慌てるより先に、フィフィが抱きしめた腕を解いた。

「まあ無事そうですね？」

そう確認の為に覗き込まれて、アシュリーは頷いた。そして、目を合わせずに言う。

「助かった。」

するとにんまり笑われた。

「それは褒め言葉ですよねえ。」

「褒めてない。」

調子づくフィフィにしっかり言い返して立ち上がる。

「君はなんともない？」

「はい。なんとも。あれはなんだったんですか？」

フィフィは本当になんともないようで、密かに胸を撫で下ろす。

そして、あの水を眺めた末、踵を返した。

「…宿で話す。」

思わずアシュリーを凝視してしまったフィフィだが、本人はさつさと師団の元へ戻ろうとしていた。

その背を、まじまじと眺める。

（あ、アシュリー様が…面倒くさがらずに話すって…話すって言った…！）

そして、思う。

（うつかり“へー！”って口に出さなくて良かった！）

言っていれば間違いなく、じゃあいい。とか言われそうだ。

ゼル又陛下から、好きな宿へ泊まれるように計らわれていた為、一行は浜辺から少し離れたところで宿をとった。師団を含めて二十名程になる為、大きな宿となった。

「入って。話すから。」

着くなりそう言い、アシュリーは部屋へフィフィを招き入れた。そして、扉を背に立ち、すぐに詠唱する。

「??? 汝、静寂を統べるもの。此の空間に響く音を固く封じ給え?」

突然の詠唱に驚いたものの、歌う様な、囁くような柔らかい声音に聞き惚れてしまった。

(きれいな声……)

普段の仏頂面からは想像出来ない声音だ。なんて思っていると、アシュリーはさっさと椅子に座っていた。

「今のは……?」

「この部屋の音が漏れないようにした。」

視線で来いと言われて、はいはい、と声を出さずに返事をする。

「あ、で…あれ、なんだったんですか？」

側へ寄って訊ねてみると、珍しく邪険にされなかった。かわりに難しい顔をしており、僅かに怖いと感じる程だ。

（だけど…）

不覚にも、どきりとしてしまった。

（いやいやいや。物珍しいだけだつて。）

そう呟いて一人で頷いた。

「今回の事だけど」

「はいっ!？」

思いつきり考え耽っていた為に飛び上がってしまった。

「……………なに？」

怪訝そつに首を傾げるアシユリーに笑ってごまかし、先を促す。

「いえ、何か分かったんですか？」

「……………あの植物は海に加護を受けてる。それは間違いない。」

フィフィの様子を訝しみながらも話しを続ける。

「海に加護…ですか？」

「そう。……君の為に説明しておく、海に加護を受けていれば火を受け付けなくなる。魔力が高くなれば海の手も多少は操れるようになる。」

（すげえ……！アシュリー様があたしの事気遣ったよ！）

なんて感動している間にもアシュリーは淡々と話す。

「それと別に……触れたものの魔力を喰らうよう、誰かが手を加えてる。」

（……アシュリー様に纏わりついてた、あれか）

「でもアシュリー様。フォンはあの植物を触ってたんですよね？だけどなんともなさそうでしたよ？」

「フォン？」

誰だそれ、と訴えられる。しっかりと話し合っていたように見えたのだが……覚えていないのか。苦笑しつつも教えてあげた。

「サファイアの支配人ですよ。」

「ああ……。彼には魔力がないから無事だったんだろう。君が俺を助けた時も少しは触れた筈だ。だけど君も無事だろ？」

「……確かに。」

「……で、あれに手を加えた誰かが、何らかの目的の為に魔力を集めてると考えられる。」

「何らかの目的ですか。」

さっぱり分からないので首を傾げた。集めてどうするというのだろっ。

「…君には前に話したけど」

アシュリーはそう前置きして続ける。

「魔力がある程度溜まると、そこから“何か”が生まれる。例で言えば今回の嵐だ。」

そう言つて、じつと見つめられて。数回瞬いた後に気付いた。

「え！？じゃああれですか！？あの植物は嵐で運ばれて、そこで次の嵐を生み出す魔力を蓄えてるんですか！？」

大きな声に顔をしかめるアシュリー。やべ、とフィフィは笑つてごまかした。

「あ、すいません。」

「君は騒がしい。無駄にうるさい。…いい加減に学習して。」

（うわあ。いつもながらの棘…）

「びっくりしたもんで。」

気をつけます、とは言わなかった。何故ならうるさがっているのは今の所アシュリー一人。他に誰かから苦情が来たら気をつけよう、とこっさり決める。

「で、じゃあやっぱりその、手を加えた奴ってのはフェルウェイル国にいるって事ですかね？」

「……………」

アシュリーが黙った。

「……………違うんですか？」

フィフィは瞬く。

「最初はそう思った。確かにフェルウェイルで発生してるし、手を加えられたのもそこだと思う。だけど、フェルウェイルの人間がそれをやったかどうかは分からないだろ？」

言われて少し考える。確かに、人は移動する。国を移動する事だつてあるわけだ。

「けどじゃあ、なんの為に？わざわざフェルウェイルに出向いてこんな事して、それでまた元の居場所に帰ったわけですよ？違う国の人間だしたら。」

「……………」

再びアシュリーは考え込んでしまった。側でその様子を見ながら、フィフィは首を捻る。

（嵐であの植物を増やしてって、一体何になるんだ？大陸全土に広がったとして…今からでもおそよ三年はかかる。確かにやっかいな

植物ではあるけど…まさか世を夢んだ誰かが道連れに？…ってレベルでもないよな。それなら毒でもバラまいた方がさくっと出来るもんな。」

フィフィは早々に考えるのを放棄してアシュリーを見やる。と、アシュリーがぽつりと呟いた。

「……嫌な予感がする。」

（……嫌な予感？）

首を傾げるフィフィはすでに眼中にないようで、アシュリーは窓へ視線をやった。

（クライストを離れて良かったんだろうか…。このままフェルウェイルへ向かって…。）

ざわざわと身の内が騒ぐ。

（不安材料には警戒すべきだ。）

そう判断して、再び詠唱した。

「??? 汝は我が僕。 風に住まう者。 我が意思、彼の者へ届け給え。 汝に降る災いは、我が光が裁きを下す??」

ふわり、とアシュリーの差し出した手に鳥が舞い降りた。

「鳥………?」

またもいきなり詠唱し出したアシュリーを眺めていたのだが、鳥の出現にはさすがに度肝を抜かれた。

「違う。精霊だ。」

冷静に言われて苦笑する。そりゃあただの鳥でない事くらい、フイフィにだって分かる。

「ニルに用心するよう、伝える。」

「用心……ですか?」

訊ねるフイフィには目もくれず、アシュリーは窓を開けて鳥を外へ送り出した。そして、窓を閉めてフイフィへ向き直る。

「この話はこれで終わり。もう寝るから、出てって。」

「え?」

(アシュリー様が嫌な予感するって事しか分かってないけど?)

言葉を呑み込んで、フイフィはしぶしぶ頷いた。

「分かりました……おやすみなさい。」

くるりと踵を返し、さっさと部屋を出た。

だから気付かなかった。

おやすみと言われたアシュリーが驚いていたなんて。

今夜の宿の部屋へ行き、外套を脱いで寝台へ放り投げた。そのまま腰掛けて、ぼんやり窓の外を眺める。

（なんか、難しいなあ…）

主人のアシュリーもさることながら、クライストを取り巻く状況もややこしい。フィフィには縁のなかった世界だ。

正直、面倒くさい。

（けど、アシュリー様があれだけ考えてるんだもんな。）

自分は考えるのも策を練るのも苦手だ。手伝える事はほんの僅かだろう。もしかしたら無いのかも知れない。

「まあ、やれる事って言ったら、やっぱり警護くらいかな。」

小さく呟いて苦笑する。

（城に戻ったらちょっとは魔術について勉強するか。）

そう考えて、灯されていた蝋燭を吹き消した。

闇が辺りを包み込み、宿の宿泊客も皆眠りを貪っている頃。

月明かりが僅かな窓掛けの隙間から室内に入り込む。その光の先には、ぐっすりと眠る姿が見えた。

音も無く窓掛けが揺れた。

じつくりと時間をかけて窓が開かれる。人一人通れる程に開くと、するりと男が忍び込んだ。窓を開けたのとは対照的に素早く寝台へ近づくと、そのままの勢いで腕を振りかぶり、一気に振り下ろした。

「させるか!」

「!?!」

ガキンッ!と刃がぶつかった。男は即座に飛び退いて乱入者を確認する。

寝台に寝そべる人物を跨ぐように立ち、短剣をこちらへ向けて威嚇しているのは小柄な人物だった。月明かりを受けた瞳が爛々とこちらを狙っている。一体どこに潜んでいたのか。全く気配を感じさせなかった。

「何...?」

狙われた人物はようやく目が覚めたようだ。男はさっと身を翻し

て窓から飛び出した。

「サージェス！下！」

叫び声はしたものの、幸い、対峙した人物は追って来ないようだった。

ひやりと空気が冷えた気がして、意識が戻った。しかし瞼が重かったためにそのまま放っておいたら、いきなり寝台が大きく沈んで真上で叫ばれた。

「させるか！」

と。

かなり聞き慣れた声だ。という事は、さっき寝台が沈んだのはフィィが乗ったからか。そう言えば金属音が聞こえたような。一体なんだ。何がどうなってフィィが部屋にいる。そして寝台に乗っている。

「何…？」

不機嫌も露に瞼を開けると、フィィが短剣を持って自分の上に跨ぐように仁王立ちしているのが見えた。その目が鋭く光っている。

「一体、何…」

身体を起こして、寝台の頭の方へ移動してフィィの下から抜け

出す。

かたん、と窓から音がした。

「サージエス！下！」

再び怒鳴り声が降って来る。音がした窓を振り向くと、何故か窓が開いていた。

「……？」

（何これ。どういう状況？）

アシュリーは瞬いた。

「大丈夫ですか？アシュリー様。」

相手が去ったのを確認して、フィフィはすぐに窓を閉めてアシュリーを伺った。とうのアシュリーはまだ眠そうだ。ぐさりとやられそうになったというのに、呑気なものだ。思わず頬が緩む。

「無事みたいですネ。」

「……で、一体何事？鍵かけてあったと思うけど？」

心底不思議そうに言われ、フィフィは得意そうに笑った。

「アシュリー様。ギルド出身者を舐めちゃあいけませんよ？こんな

鍵、開けられるに決まってるじゃないですか！」

もの凄く得意そうだ。満面の笑みが眩しい程に。

(……………そこは自慢する所じゃないだろ。)

眠気も手伝ってか、普段ならすぐに切る所を心の中で留めた。代わりに溜息が出た。

「で？何してるの？」

「呑気ですね……。たった今殺されそうでしたよ？」

「……………！？」

目を丸くしてフィフィを見つめた。

(アシュリー様……………危機感なさ過ぎじゃねえ？)

先が思いやられる。と思った矢先、アシュリーは表情を一変させて窓を睨んだ。

「……………どうしたんですか？」

(今更あいつに怒りが湧いた、とか？)

なんて思っただけだと首を捻っていると、アシュリーが声を絞り出した。

「……………この部屋には術がかけてあった。」

「へ？」

「君と、サージェス達しか入れないように。」

「え、でも……」

あの男は入ってきた。という事は。

「誰かが術を解いたんだ。」

「き、気付かないもんなんですか？それって…」

途端にアシユリーに睨まれた。

「俺を誰だと思ってるの？」

（うわあ！俺様な台詞！）

「……………こんな事出来るのは一人しか思い当たらない。」

「え。思い当たるんですか。」

あっさり分かってしまつて、ちよつと拍子抜けだ。するとまた呆れ顔をされる。

「分からない？」

「分かりませんよ。大体そいつがそんなにすごいつてんなら、そいつがここへ来て狙えば良いじゃないですか。なんでそいつはあの男にやらせたんですか？…まさかあの男が術を解いたなんて言いませんよね？」

「……………君つて、馬鹿？」

（うああっ！殴りてえ！）

ぐつと拳を握りしめたのにアシユリーが気付き、慌てて寝台の上を移動する。

「ちょ、ちよつと、まさか殴る気？」

うつすらと笑ってにじり寄る。

「どうかなあ……？馬鹿にされたままって事がないんで、手が動いちやいそうなんですよねえ……」

「……………！」

真っ青になったアシュリーを見て、楽しそうにフィフィは笑う。

「ねえ、アシュリー様。誰に術解かれたんですか？」

教えるよな？という威圧をかけて軽く首を傾げた。

「……………！ウオ、ウォルスだ！」

拳を警戒しながらも、睨みだけは利かせてアシュリーが叫んだ。

「ウォルス？」

「だから、ウォルスⅡイセリアⅡダイン！分かったら離れて！」

（……………）

「魔人か！」

フィフィは拳を解いて一步離れた。それをしっかりと確認してから、アシュリーはほつと息を吐いて元の場所へ戻る。

「……くそ…暴力主義者め……」

ぼそりと零れた悪態は、しっかりフィフィの耳に届いていた。

「なんですかー？アシュリー様？」

「別に……それよりもう寝かせてくれる……」

もはやさつき怯えただけで体力を使い果たしたようだ。ぐったりしながらそう言われて、フィフィはほくそ笑んだ。

「まだウォルスが術を解いた理由を聞いていませんよ。」

アシュリーはしばしフィフィを睨んだ後、根負けして盛大な溜息を吐いた。

「……………座れば……」

「ありがとうございます。」

につこり笑ってフィフィは椅子を引き寄せた。

「……………ギルドでウォルスの噂は聞かなかったの……」

堂々と寝台で横になりながら、ついでに目を閉じながらそう話しを進めるアシュリーは、どうやら憔悴して嫌がる事すら止めたようだ。

（体力も忍耐力もないって……ますますこの人が有事に役立つのか心配だよな。）

なんて思いながらもフィフィは答えた。

「ギルドでは特にないですよ。男だとか、もの凄い魔力だとか、実は神とか精霊の子なんだとか。神出鬼没ででかい事には力は貸さないで、どうでもいいような小さい事しか手を貸さないんだとか？」

（結構あるじゃないか……）

思いつつも疲れていたので突っ込まずにおいた。突っ込んだらうるさいに決まっている。

「けど回復役としてウォルスと組んだ事あるやつは、やっぱりんでもない魔術師だって言ってますけどね。」

「もういい……」

アシュリーは溜息を吐いた。

「噂にあるように、あいつは“ちょっとした手伝い”をよくしてる。今回もそれだ。」

「今回も……？アシュリー様の術を解くのが？」

「そう。」

「でも……それをやるんだついたらついでに他の奴は眠らせる、とかはしないんですか？もしくはやってくれて言われそうですけど……」

「それはやらない。“ちょっと”手伝うだけだから。」

「……アシュリー様、ウォルスと仲良いんですか？」

「……………は？」

あまりに分かったように言うものだから、ついそんな事を訊いて

しまった。が、アシュリーがとんでもなく嫌そうな顔をしているから、違うのだろう。

「違うんですね。」

「どうしたらそうなる訳？」

「よくご存知のようなので。」

「……………」

ぐつと詰まったところを見ると、よく知ってはいるらしい。

「なんでちょっとだけなんでしょう？」

「退屈してるから。」

「ちよつとしか出番ない方が退屈じゃないですか？」

「…ほぼどんな事でも出来るから、全てをやるのは退屈なんだよ。」

つまりは優秀過ぎて打ち込めるものがない、という感じだろうか。

「もういい？」

珍しくちよつと弱った声音を出されて、なんだか胸がむずむずした。

「…はい。分かりました。ありがとうございます。」

ごまかすように立ち上がり、ぺこりと一礼して踵を返す。しかし部屋の扉を開けて振り返った。

「じゃあアシュリー様、良い夢を。」

ぱたん、と扉が閉まる。

「……………」

（刺客に襲われた後に言う事？）

と毒づきつつも、アシュリーは胸がもやもやしてしばらく扉を見つめていた。

「サージェス、どうだった？」

宿の一階に部屋をとったサージェス達を訊ねた。さすがは第一師団。起き抜けに侵入者を追って全力で走ったにも関わらず、全員がしっかり目を醒ましているし、状況も把握しているようだ。

「闇に溶け込むように消えてしまいました。申し訳ございません…。」

「それは俺も一緒だ。追いかけなかったしな。」

深々と頭を下げるサージェスにそう言うと、僅かに緊張が解れたようだ。

「というか俺ってサージェスにこんな態度取ってもいいのか？」

「もちろんです。アシュリー様の助手なのですから。」

即答されるとなんだか居心地が悪い。

「えっと、それで…」

事態の説明を求めると、小さく頷いて教えてくれた。

「どの者かは分かりませんでした。アシュリー様と知って狙ったのは確実でしょう。他にこの宿に要人はおりません。」

「アシュリー様の話じゃ、手伝ったのはウォルスらしいぞ。」

そういうとサージェスは渋い顔をした。

「さようですか…また厄介な…」

「…俺は今日は寝ないから、昼間は頼むな。」

「はい、畏まりました。ご無理なさいませんよう。」

「おう。サージェス達もな。」

笑って別れようとすると、サージェスがもの言いたげにこちらを見ている。

「…どうした？」

「いえ…」

問われて苦笑する。

「フィアニス様は…護衛という職が板についていらつしやる。」

「ああ…そりゃあ、伊達に賞金稼ぎやってないからな。正直、助手より護衛の方が向いてるよ。」

「……なれば…何故この職へ志願されたのですか？」

他の団員を返ししながら、サージェスは不思議そうにフィィを見つめた。と、フィィが苦笑する。

「…フォンが過保護だからさ。」

「フォン、とは？」

「ほら、サファイアの支配人だよ。あいつがうるさいんだ。金に困るならサファイアへくればいい。だから賞金稼ぎは止めるって。だから、黙らせてやろうと思ってさ。」

フィフィは言われた時を思い出したのか、不機嫌そうに虚空を睨む。

「別に金の為に賞金稼ぎやってんじやなかったんだけどな…性に合ってるっただけで。でもサファイアなんて絶対性に合わないから、城の仕事ならこういう仕事もあるかもって思って探したんだ。」

そう言っただけで笑うので、つい厳しい口調になってしまった。

「しかしフィアニス様。城へ仕える身では、命じられれば受け入れるしかありません。その覚悟はおありなのですか？」

すると、フィフィは不敵に微笑んだ。その目は鋭く、爛々と輝く。

「アシュリー様の命令なら、聞いてやるつもりだ。」

それは、不敬だ。本来ならば国王陛下へ絶対の忠誠がなくてはならないのだから。

（だが…この目は強い。）

フィフィならばアシュリーを裏切らず、確実にその全てで護るだろうと思われた。

「さようですか…。ではこれからも、アシュリー様をお願い申し上げます。」

深々と頭を下げられて、フィフィは慌てて胸を張った。

「あ、ああ！任せとけて。」

そうしてそそくさと部屋へ戻っていく。

その背を見送りながら、サージェスは微笑んだ。あのアシュリーに、良い相手が付いたものだ。

翌朝、宿を出たところでセシリアが待ち構えていた。どうやら昨夜の騒ぎを聞きつけたらしい。宿の主人とわずかな客以外は眠っていたから気付いていない筈だが、それを聞きつけるところはさすがハークヴェルの皇従ウヰグツルと言えるだろう。クライストの動向には少しも目を逸らさない、というところか。

探るようなセシリアに、アシュリーは淡々と答えた。

術を解いたのはウォルスだという事。フィフィとサージェス達が追ひ払った事。宿の客にも、誰にも怪我ひとつなかった事。

逆にアシュリーを狙う者に心当たりはないか、と聞いた所、ぴくりとセシリアの眉が動いた。心当たりがあるのか。それとも不当な疑いをかけられたと憤ったのか。それこそ溢れんばかりの怒氣を目に宿し、アシュリーと、その真後ろで睨み返していたフィフィを睨みつけた。

「どうぞお氣をつけて。」

と、かなり棒読みな言葉を送り、アシュリー一行の後ろ姿を睨みつけて送り出してくれた。

「アシュリー様……」

珍しくアシュリーにくつついて馬車に乗り込んだフィフィは、戸惑い氣味にアシュリーに声をかけた。そして、それに対してアシュ

リーも珍しくフィフィに目を向けた。

「ハークヴェルが差し向けたと思ってるんですか？」

ずばりと聞いたフィフィに、アシュリーはすぐに視線を外した。

「…言っただと思うけど、両帝国はあまり仲が良いとは言えない。」

「あ、はい。」

「そしてクライストを落とす機会を狙ってる。」

「……はい。」

フィフィはアシュリーを見つめていた。窓から光が差し込んで、アシュリーの深い群青色の瞳が透き通り、きらめいて見えた。それが綺麗で、思わず魅入ってしまう。

「となれば俺が今ここにいる状況は、良い機会だろう。加えてあの植物だ。」

「………けど、あんなしょぼい奴差し向けるなんて甘過ぎませんか？」

見蕩れていて、慌てて言葉を返した。アシュリーは気付いていないようだ。

（そりゃそうか。人に興味ないもんな…。）

「相手もそんなに馬鹿じゃない。こっちの程度を調べたんだろう。」

（魔術と武術の程度か…。あっちはウォルスが手伝うんなら、あとはあたしとサージェス達の腕によるわけだ。）

相変わらずアシュリーの瞳を見つめていると、さすがにアシュリーが気付いてぎょつとしていた。

「なっ…何？」

近くでまじまじと見つめられるなんて事はないのだろう。びびっている。

「いやー……目えきれいだなーって。言われませんか？」
「……………は？」

アシュリーは思いつきり怪訝そうにこちらを見て、続いてずばりと突っ込んだ。

「真面目に聞いてるんじゃないかなかったわけ。」
「え？やだなあ聞いてましたよ？小手調べだったわけでしょ？」

あはは、と笑いながら言うと、怪訝そうにしながらも信じたようだ。

「あの植物と嵐を発生させたのがハークヴェルだとは言いきれないけど、あの植物を利用する事は考えられる。」

クライストを護る大魔術師の一人が国を離れた。それでクライストの護りが崩れるわけではないが、大きな力が離れた事には変わらない。落とす機会としては、十分だ。

「だとしたらこれから先、クライストへ戻るまでの間に何度襲撃があるか分からない。」

また窓の外を見ていたアシュリーは、つと視線をフィフィへ向けた。油断して、またアシュリーの目を見ていたから、どきりとした。

「君は護衛の仕事に専念して。サージェス達としっかり連携取れるように。」

「……………」

頷きそうになって、フィフィは口を結んだ。

（頷けるかよ。）

ちよつと不機嫌になったフィフィを見て、アシュリーは首を傾げる。

「どうかした？」

「…あの、アシュリー様。俺って助手兼護衛ですよネ？」

両足に両肘を乗せ、前屈みの姿勢でアシュリーを睨み上げる。

「……………今更なに？」

「ちゃんと分かってくれてるんですよネ？」

少し考えてからアシュリーは頷いた。

「うん。」

「その間はなんなんですか。」

さらに不機嫌に睨みつけられ、ちよつと焦る。取りあえずフィフィの両手が握られていないのを確認した。

「だから、何。」

「俺は貴方の為にいるんですよ?」

言われた台詞がさらりと心を撫でて、もう一度頭の中で反芻する。

「俺は軍人じゃない。サージェス達と一括りにしないで下さい。俺は国の為には動かない。貴方の側にいるのが仕事です。貴方を護る事が。」

「…なに……」

真っ直ぐに睨みつけられて、ぞわりとした。

強く、強く、光を受けて瞳の奥が輝く。

琥珀の色が射抜く。

「いざという時、サージェス達は捨て置いていいとルキにも言われました。そうじゃなくても俺は貴方の側にいる事を優先します。」

ごくり、と我知らず息を呑む。もはや言葉が出なかった。

「だからアシュリー様。ここから先は何を言われようと、絶対に離れませんから。」

言われたまま、アシュリーは動けなかった。言葉が出て来ないし、身体も動かない。

フィフィはそんなアシュリーをしばらく睨むと、すっと立ち上がって馬車を出て行った。

途端に身体が動いて、思わず溜息を吐く。

(……………何……………)

おかしい。フィフィに警戒するよう促しただけなのに。何故自分が圧倒されているんだろう。

（やっぱり、変だ……）

それがフィフィの事なのか、自分の事なのか。思いがぐちゃぐちゃになって自分でもよく分からなくなっていた。

クライスト城？？ニルヴァーナの回廊。

日の当たる半屋内の廊下でひなたぼっこをしていると、風の精霊が飛んでくるのが見えた。ユンファはあっと声を上げて立ち上がった。両手を差し伸べて導く。

迷わず小さなユンファの手にふわりと降り立ち、精霊は形を変えた。鳥の姿から、光り風を纏う精石に。それをそっと両手で包み込んで、ユンファは回廊の屋内へ続く扉を開けた。

造りはアシュリーの回廊と左右対称になっており、やはりニルの自室は地下にある。が、そこへ行くには絵画の婦人に導いて貰わなければならないのだ。

「しるべ」よ。主の元へしもべをいざなえ」

幼い声に促され、婦人は手を差し伸べる。とは言っても絵画の中

で手を動かすだけで、その手が現実に触れる事はない。その絵画の婦人の指先に触れようとすると、ニルの部屋へと導かれるのだ。

「ニル様！アス様から伝言ですよ！」

机に向かって書類を片付けている主へ走り寄ると、立ち上がって抱きしめてくれた。

「ありがとう、ユニ。……あら、光の加護を付けたのね…何か分かったみたい。」

「あのお花ですか？」

「ええ。」

そつとユニファの髪を撫でながら、ニルは椅子に座つて、精石に封じられていた魔力を解き放つ。すると精石から水平に陣が広がり、光と風がニルを包み込んだ。目を閉じて、集中する。

と、アシュリーの声が聞こえた。ニルの側にいたユニファも陣に包み込まれ、ユニファにも声が聞こえる。初めて体験する伝言の魔術に驚いた。

「???ニル。あの植物は魔力を喰らうように手を加えられてる。出来るなら書術を施して食い止めておいて。」

ついでに喰らった魔力を溜めて、新たな嵐を生み出すように仕組まれてる。すぐに嵐が向かう先の国へ警告して。

周りには常に注意して。多分ハークヴェルはこの機会に何かしらすると思うけど、今回の件とは別かも知れないし、策の一つかも知れない。俺はこのままフェルウェイルへ行つて片付ける。

……君が暴走しない事を祈る 』

声が消えると同時に精石が輝きを失った。風も光も止み、ユンフアは息を吐いた。

（すごい…声が頭にひびいてた…）

見上げると、ニルが苦笑していた。

「…好き勝手言うわね…」

「…ニル様？」

心配そうに見上げるユンファの髪を撫で、ニルは立ち上がった。ぐずぐずしてはいられない。

「出かけます。ユン、手伝ってね。」

「はいっ！」

元気よく答えたユンファに微笑みかけ、回廊を出る為、歩き出す。前を向いてユンファから顔が見えないようにすると、ニルは虚空を睨みつけた。

（触れると魔力を喰われるのに、書術を施せですって？あの馬鹿、無茶しか言わないのね…）

帰ってきたら苛めてやろうと、にやりと笑ったのだった。

回廊を出て、国内専用の転移魔術陣のある部屋へと歩いていると、その部屋の前に見知った姿を見つけた。

「あら、ルキ様。どうされました？」

ルキセオードは声をかけられて微笑した。そして、軽く礼をする。

「護衛をするよう言われましたので。お供致します。」

「そう…ではお願いします。」

従騎であるルキセオードが供をしてくれるのなら、万が一魔力を喰われ過ぎて倒れても安心というものだ。ユンファでは運べないから、天魔を呼ぶ事になっただろう。

(…兵器だと言いながらも、陛下もユンファの事を案じてくれるようになったのね…)

振り返るとユンファが真っ直ぐに見つめ返してくれる。ユンファに頷いて、ニルは転移陣へと足を踏み入れた。

「ルキ様も陣の中へお入りください。」

「はい、では。」

陣はそうそう大きくはない。三人も入れればいいだ。

「では、移動します。」

?? 汝は“移ろい”。我はニルヴァーナハディエス。誓約に従い、その力を示せ??」

言い終わると同時に光と闇の粒子が三人を呑み込んでいく。圧力を感じた次には一気に解放され、目を開けるとそこはもう、辺り一面に花が咲き乱れていた。

「これは……」

見渡して、ルキセオードは啞然とした。サファイアの浜辺を侵していた植物は、今やサファイア自体に侵入しつつあった。

「……ユン、分かる？」

植物が水を纏い、アシュリーが張った結界の中で、精霊達を喰らおうとあがき、精霊達が逃げ惑っている。ユンファはじっと結界を見つめたあと、小さく頷いた。

「……見えます。」

逃げ惑う精霊が苦しげに喘いでいる。その声はか細く、まるで風を切る様な小さな声だ。

ニルはゆっくりと植物へと足を進めた。アシュリーが結界を張っていないければ、今頃サファイアは呑み込まれ、町にまで到達していたかも知れない。

「一体、何が起こっているのですか？」

ルキセオードは状況が読めず、控えているユンファにそう問うた。ユンファは、ニルを見つめたまま答える。

「このお花は、せいいい達を食べてしまっんです。」

「精霊を…食べる?」

魔術の扱いすら知らないルキセオードには、不可解な言葉に聞こえた。目に見えないものを食べるというのが、よく分からない。

「えっと…人間で言えば…血を抜かれていくような感じです。」
「血を…」

呟くルキセオードに、ユンファは頷いた。

「でもせいいいに血はありませんから、血を抜かれたぶんだけ、消えていつてしまいます。」

もう姿がよく分からないほど、存在が消失しつつある精霊も見える。アシュリーが原因を突き止めて解決するまで、保たないだろう。

「ルキ様。」

結界の際まで近づいたニルが振り返った。静かにこちらを見つめ、強く言葉を発する。

「私が倒れたら、お願いします。」

「ニル様…」

ユンファでは倒れたニルを運べない。運ぶとするなら天魔を喚ばなければならぬ。そうさせたくないから、ニルはルキセオードに頼んだのだ。

「お任せください。」

力強くルキセオードが頷くと、ニルはユンファに笑いかけた。

「ユン。アシュリーの魔術を助けてくれる？」

頼られて、ユンファは、しっかりと頷いた。

「はい！“停止”と“しゃだん”ですね！」
「そうよ。頼んだわね。」

力の入るユンファを愛おしげに眺め、ニルは呼吸を一つして、植物へ触れる。

触れた途端、その指先から力を持つ水が這い上り、ニルの魔力をまさぐり、貪^{むさぼ}った。

- 19 - (後書き)

すみませんが大変忙しくなっ
てまいりまして、滞っております。

大分遅い投稿になりますが、どうかお付き合い下さい！

今までのお話で感想を頂けると励みになります！

（っ…！無理矢理、血を抜かれているみたい…！）

遠くなりそうな意識を必死に留め、指先に意識を集中させて幹に文字を刻む。ニルがなぞると、そこに文字が刻まれた。

特に道具を使って削るわけではなく、ただ、魔力を込めてなぞるだけで、そこに術を刻める。それが書術だ。ニルはその技術が格別に高い。それ故に、若くして大魔術師として迎えられたのだ。

（…《構成を歪め…あるべき形を崩せ》…）

植物を作り出す力が正常に働かないよう、存在が安定しないように書き記す。

（…《魔力の流れを戒めの風へ》…）

溜め込んでいた魔力が、アシユリーの術の助けになるように、これも書いていく。そうすると少しだけ、ニルの身体を弄る動きが弱ったように感じた。だが、依然として魔力が抜けていく事は止められない。

（…貪欲な術ね…。私は結構魔力が多い方なのに…）

目の前がくらくらする。頭を振って耐える。きつく目を閉じて、気合いを入れて開けた。

(…《連なる全てはこれに従う》…)

フェルウェイルから広がったであろう全ての植物に、同じ効力を発揮するように刻み込む。指先が震えた。視界がぼやける。

最後の人文字を書き終えると、ニルは意識を失った。

「???ニル様っ!!」

ニルが倒れたのを見て、ユンファが駆け出そうとした。

「いけません!」

とつさにルキセオードがその腕を引つ掴んで止めた。

「はなしてください!ニル様が!」

倒れた途端に力ある水がニルを覆った。蠢く様は、本当に生き物であるかのように見える。

「ユンファ様、私が行きます。貴女があのようなになれば、悲しむのはニル様ですよ。」

「っ……!」

諭されて、呆然とニルを見つめるユンファの背をぽんと叩き、ルキセオードはすぐさまニルの元に駆け寄り、抱えて結界から飛び出した。水は粘度があり、ニルを逃がすものかと絡み付いてくるよう

だったが、結界を出てしまえばただの水と化した。

「ニル様！ニル様、しっかりしてください！」

全身ずぶ濡れとなったニルに縋りついて、ユンファは今にも泣きそうになりながら必死に声をかけた。

「ユンファ様、大丈夫ですよ。気を失っているだけです。」

ルキセオードの落ち着いた、柔らかな声音が耳に届いて、ユンファはただ無言でニルを見つめた。小さく、呼吸をしている。

「よかった……」

心の底から安堵して、ユンファは幸せそうにニルを抱きしめた。

（……このお二人は……お互いがとても大切なのだな……）

ニルのユンファに向ける、切ないくらいの愛情や、ユンファがニルに向ける、怖いくらいの依存心。見ていると、こちらの心がかき乱される程の。

しがみつくユンファを宥め、ルキセオードは立ち上がった。

「さあ、このままにはしておけません。戻りましょう。乾いたものに着替え、ゆっくり休ませて差し上げなければ。」

「……………あ……はい。」

不安気に揺れる瞳は、おどおどしながらもニルとルキセオードを見た。そして、すっかり頷いて、ユンファは城へ帰還するための陣

を創り出した。自分と、ニルを抱えたルキセオードが陣に入っているのを確認すると、主に習って歌うように詠唱する。

「?? 汝は“移ろい”。われはユンファソルシアミット。主ニルヴァーナハディエスのゆるしをもって、わが支配を受け入れよ。せいやくに従い、その力を示せ??」

幼い声が精霊を喚び、縛り、使役する。そんなユンファは、やはり唯の子供にはなり得ないのだと、ルキセオードは悲しくも思い知った。

ニルを抱きかかえて陣のある部屋からニルの回廊へ移動する。ユンファはその先を行って回廊を開き、途中出会った女官にニルの着替えを頼んだ。

女官はニルとルキセオードを見てぎょっとしていたが、すぐに走って行ってくれた。

ルキセオードはニルの執務室へ入ると、一先ず厚手の布でニルを覆った。椅子へもたれさせ、女官が来るのを待つ。

「あの…ルキ様…」

ユンファがニルの側で膝立ちになりながら、顔をルキセオードへ向けて、落ち込んだ様子で声をかけた。

「……ありがとう、ございました…」

その様子を見て、ルキセオードは胸が詰まった。主が倒れた時、思うままに助けられなかった事が悔しくて、ふがいなさを感じているのだろう。あの時ばかりは、ユンファは子供なのだと意識せざるを得ない。

「…そうご自分を責めないで下さい。」

「え……？」

どうして自分の気持ちが分かったのか、不思議そうにルキセオードを見つめる。見つめ返す瞳は、心が解れる程に温かった。

「こればかりは仕方ありません。例えユンファ様が成人されていても、体格がありますから…やはり、男手が必要だったでしょう。」

言われて初めて、ああそうか、と思い至った。確かにそうだ。今は子供だからと嘆いても、結局大人になってもニルをここまで運べたか分からない。

「そう…か……そうですね…」

なんだか啞然としてしまったユンファを見て、思わず笑ってしまう。

「そうですよ。」

そう返したところで、回廊に訪問者ありと知らせが入った。

「ああ、先程の女官でしょう。それでは私は…これにて失礼致します。」

「はい。ありがとうございました、ルキ様。」

幾分明るくなった顔を見て、ルキセオードはほっと胸を撫で下ろしたのだった。

ハークヴェル帝国からラナス国へと移動する前夜。フィフィは宿の部屋で、窓を開けて夜空を眺めていた。たくさんの星が瞬いて、優しい光が降り注いでいるようで、ほっと落ち着く。

出窓に肘をついて眺めていると、隣の窓が開いて、アシュリーが夜空の遠くを見ていた。

「アシュリー様。」

声をかけると、ちよつと驚いて身を引いた。

「…何してるんですか？」

「…別に。」

二人ともそう言ったきり、夜空を眺め続けた。

ぱさり、と夜空の向こうから羽音が聞こえた。するとウイスペルが耳飾りから飛び出して、アシュリーの前でふわり、ふわりと飛び始めた。

「…何してるんですか？」

もう一度そう聞くと、ちらりと目線だけ向けられた。

「…帰って来た。」

「帰って?」

何か送り出しただろうかと首を捻ると、羽音が近づいてきて、姿が見えてきた。

（あ……）

アシュリーがニルへ送った精霊だ。仄かに光を纏っているのが分かった。

「ニル様からですね。」

アシュリーはそれには答えず、さっさと鳥と共に部屋の中へ引込んだもつとした。

「あ、待って下さい。今そっち行きますから。」

「は?」

不可解そうにするアシュリーにやりと笑いかけ、フィフィは出窓に足を置いた。

「えっ?」

驚くアシュリーに目もくれず、フィフィは軽く勢いをつけて窓を飛ぶ。

「よっ、と。」

一瞬後にはアシュリーの部屋の出窓へ足をつけて、するりと部屋入り込んだ。さて、と振り返ってみると、アシュリーが大きな溜息を吐いていた。

「なんですか？」

「なんで回って来ないの？」

「だって飛んだ方が早いじゃないですか。」

「……君は、やっぱり変。」

（変って…）

思ったものの、へそを曲げられてニルからの報告を聞けなくなったら嫌だ。ここは黙っておいた。

アシュリーが椅子に座ると、フィフィも近くの椅子を引き寄せて腰を降ろす。特にフィフィがちゃんと座るまでは待たず、アシュリーは精霊の魔力を解き放った。

すると精霊は精石へと姿を変えながら、陣が水平に広がり、光と風が二人を包み込む。目を閉じて、集中すると、ニルの声が響いた。

『??? 無茶な事言ってくれたわね。戻ってきたら…覚えてなさいよ！』

一言目から怒っている。ちらりとアシュリーに目をやると、目が思いつきり泳いでいた。

（なに無茶言っただろ…）

ちょっと笑ってしまふ。

『植物の“生長の阻害”と“全体への伝達”は上手くいったわ。』

溜め込んだ魔力は貴方の“遮断”へ流した。“停止”は上手くいかないみたいね。海の精霊が力を貸しているみたい。

それから、他国への警告は陛下が。すでに噂は回っていたようで、思ったよりすんなり頷いたそうよ。

あとはハークヴェルね。こちらは今の所目立った動きはないようだけど……（・・・）がこそこそ笑っているから、まあ、何か企んでるのは間違いないわ。用心しておく。

早く片をつけてくれないと、殿下が大暴れするわよ??。』

ニルからの伝言は、それで終わった。

溜息を吐くアシュリーに、フィフィは訊ねた。

「で、結局よく分からなかったんですが、どういう事でしょう?。」

「……………」

面倒くさそうに見やるアシュリーにっこり笑ってみる。と、案外素直に教えてくれた。

「あの植物はニルがなんとか広がらないようにしてくれた。ただ、

海の加護が邪魔して“停止”の術がうまく働いてない。そのせいで魔力を喰らうのは完全に止められない。」

「とりあえず今以上は浸食されないんですね。」

「そう。あとはハークヴェルの状況だ。」

そこまで言ってアシュリーは少し逡巡しているようだった。

「どうかしました？あ、部屋に魔術かけなくていいんですか？」

“静寂”ならかかっている。そうじゃなくて……」

僅かに視線を落として、アシュリーは言った。

「本来なら俺が言う事じゃないけど、話しておく。」

「あ、はい。」

神妙な面持ちだ。自然と座り直した。

「……ニルの名前：ハディエスというのは、闇の精霊を示す言葉だ。まあ、単純に言えばハディエスという一族は、闇の精霊に愛されている。」

「あ、愛……？」

失笑だ。なんだその一族は。

「一族は生まれながらに闇の精霊に憑かれてる。だから、争い事や企みの気配がすると、闇の精霊が喜んでいるのが感じられる。ニルが言ってたのは、そういう事。」

「ああ……あいつってというのは、その精霊の事ですか。」

「そう。」

「で、やっぱ何か企んでるんですね。ハークヴェルは。」

アシュリーは頷いた。その目に剣呑な光が灯る。その目に、魅入ってしまった。

（アシュリー様が言う、“クライストに仇為す”状況になりつつあるって事か…）

これは自分の得意分野かも、と思うと嬉しくなって、思わずにんまりと笑った。

「…何がおかしいの？」

アシュリーが、いきなりになまりし出したフィフィに怯えていた。それにさらに笑みを深めて、フィフィは颯爽と立ち上がる。

「いえいえ、なんにもおかしくありませんよ？明日はようやくここから出れるわけですし、張り切って寝ます！」

「え？なんで張り切るのに寝られるの？」

アシュリーがまともに突っ込む中、フィフィは笑顔でアシュリーの部屋を後にする。

（暴れると思うと、嬉しいな！）

スキップでもしそうな程うきうきしながら、フィフィはご機嫌で寝台へ潜り込んだ。

（早く出発したいなー…）

しかし、そこまで興奮して、寝られるわけがないのだった。

「……なんなの？」

朝、宿の前に集まって、開口一番にそう言われた。
「……………」

アシュリーを始め、皆呆れた顔で見ている。

「気にしないで下さい。」

つまりは、眠れなかった。それで、ひどい顔だ。

「…サージェス達の手を煩わせないように。」

アシュリーにそう言われてむっとするが、自業自得なので仕方ない。

「はい。」

大人しく頷いて、ひょいと騎乗した。

進み出してすぐに、サージェスに気遣われた。

「大丈夫ですか？ファイアニス様…」

「大丈夫だよ。三日寝なくなつて賞金首捕まえられたんだから。」

そこは自身を持って笑うと、少しほっとしたようにサージェスが笑った。

「それでは護衛の方、よろしくお願い致します。」
「おう！」

頼むと言われて、ちょっと気合いが入った。

ハークヴェル帝国を出ると、ラナス国へ入る。ラナス国はその半分が海へ面していて、植物の浸食がひどいと思われた。救出する事も考えないといけない、とアシユリーが言っていた。

そこを抜けるとピステイル・オス共和国。王、というよりも、国民の代表といえる者が纏めている。帝国には及ばないが広い土地があり、落ち着きと活気があってなかなか人気がある。

そこを抜けるとイイエル国で、レシテに負けなくらい小さな国だが、こちらは荒くれ者が集まっているので有名だった。まあ国が小さいのでそう大した脅威にはならないし、第一荒くれ者が団結するわけもない。

が、国王はなかなかのもので、荒くれ者が暴れようものなら即座に出向いて叩き潰す。という行動力の持ち主だった。故に、以外にも安全な国だったりする。

そこを越えたら、目指していたフェルウェイル国に着く。国王レイフィスにはすでに話しが通してある。当然、今までの調査報告は済ませていた。

「レイフィスってフェルウェイルの国王の事だったんですね！」

今更だが、その事が分かってすごくスッキリした。そんなフィフイを見て、アシュリーは諦めて首を振った。

フィフィには何事も、一から説明しないといけないかも知れない。

「君って賞金稼ぎだったんだよね？他国には行かなかったの？」

「そりゃあ行ってますよ？けどその国の王が誰かなんて気にしませんよ。」

「……そう。」

それもそうかも知れないな、とアシュリーは思った。ただ狙って相手を追いかけていくだけなのだ。そこには国同士の利害関係など意味がないのだろう。

「君って面倒くさい。」

思わず零れた言葉にフィフィが食い付くかと思いきや、なんだか笑われた。

「……………」

笑う理由が聞くにも聞けず、馬車の窓越しに黙って見ていると、フィフィがそれに気付いてこちらを見た。

「…いや、なんか…アシュリー様の嫌味に慣れました。」

「は？」

「ちなみにアシュリー様も面倒くさいですよ。」

「は!?!」

言うだけ言って、フィフィはさっさと前の方へ移動していった。

「……………どっちが嫌味だか。」

小さく溜息を吐いて。

その後自分が笑っているだなんて、気付きもしなかった。

ハークヴェルの、あの重々しい雰囲気からやっと解放され、フィは国境を越えるなり大きく伸びをした。

「んー…！身体が軽くなった気がする…」

馬上で伸びをする、という危険極まりない事を平気でやってのけ、ついでに感想まで呟くフィフィに、サージェスが苦笑した。

「あの雰囲気は独特ですからね。師団員も慣れない者は、辟易しております。」

言われて後ろを振り返ってみると、何人かはうんざりしたように振り返っていた。これには苦笑した。重苦しくて敵わない。

「こっからはラナス国だな。」

確認すると、サージェスが前方を見据えて言った。

「ええ。見通しが良いとは言えませんが、クライスト、ハークヴェル間の渓谷よりは良いでしょう。」

「…へ？」

なんだか嫌な物言いに、フィフィが前方へ目を向けると…。

「げ。」

子供がすっぱり隠れてしまつくらいの背丈の低木が、所狭しと育っていた。

「フィアニス様：思うのですが、ギルドの依頼で国を出る事もあったのですよね？」

怪訝そうに訊ねられて、フィフィはなんとか笑い返した。

「……俺さ、いつもばか騒ぎする奴ばつかと組んでたから、途中の道つてあんま覚えてないんだよな。どこに何があるとか。」

「……それでは毎回大変でしたでしょう。」

「うん。けど、地形によつての戦い方は覚えてるから、そこは大丈夫だけだな。」

「そ、そうなのですか……」

そんな曖昧な情報で、よく今まで無事にこれたものだ。サージェスにそんな風に思われているとはつゆ知らず、フィフィは上機嫌で馬の手綱を取っていた。

（道に迷つたりしないのだろうか……）

馬車の中で会話を聞いていたアシュリーも、同じように思っていた。

（けど……フィフィなら迷つてゐる事に気付かなさそうだな。）

なんて、失礼な事を。

鬱蒼とした視界は腰辺りまでで、その上は見晴らしがとても良い。しかしそれに油断は出来ない。ようするに見えない高さでかがんでいれば、いくらでも潜んでいられるのだ。

だが心配したような襲撃はなく、のどかな時間が過ぎ去って、日暮れ頃にはラナス国の門をくぐった。

しかし、ここがおかしかった。

「誰もいない…？」

そう、本来なら門番がいる筈なのだ。これはどこの国でも同じ事。それなのに誰もいないとは。

「アシュリー様、ファイニス様。少々お待ち下さい。」

そう言っ、師団員の何人かが門周辺を調べにいった。

そう待たずして戻ってきて、一様に首を傾げる。

「……一人もいません。兵だけでなく、街人も…」
「街人も？」

サージェスにそう訊ねられ、師団員は一斉に頷いた。

（こりゃあ、なんかあったな…）

思わずフィフィの口元がにやりと笑みの形を取る。

「どうする？」

「そうですね…近くに怪しい気配はありません。ともかく街まで進んでみては如何かと。フィアニス様はどう思われますか？」

「俺も、賛成！」

頷いてから、フィフィは馬車を覗き込んだ。アシュリーと目が合う。

「いいですか？」

「……いいけど……」

歯切れが悪い。首を傾げるフィフィに、アシュリーは不機嫌そうに言った。

「何か、変。嫌な予感がする。」

「そりゃあいるべき所に一人もないのはおかしいですよ。何かあったに決まってます。」

「分かってる。それだけじゃなくて……」

はあ、と大きな溜息を吐かれた。

「なんですか？」

「…君、俺が大魔術師だって、わかってないの？」
「……………」

つまり。目に見える状況ではなく、何か魔術絡みで怪しい動きを感じる、と。

「分かってますよ?」

「だから、その間はなに。」

えへへと笑うファイフィに、ぎろりと睨むアシュリー。そんな二人を遠巻きに見て、師団員達は、ちよつと不安になった。

「…それでは参りましょうか。」

見兼ねたサージェスの一声で、一団はラナス国の大きな街へと足を踏み入れる。そうして、一団が門を通り過ぎた。

瞬間だった。

誰もがはつと感じる事が出来る程の魔力が動いた。

「!?!」

振り返ると、門を境に、まるで空間を断ち切るように不可視の壁が広がった。地面から空へと、虹色に色彩を変えて広がっていく。

肌が、ざわりと総毛立った。それほどまでに大きな魔力が、この壁を瞬時に創り出したのだった。

「……………これ、は…」

啞然としたサージェスの声が空しく空気に消える。

「……境界壁だ。きょうかいへき」

アシュリーが馬車からゆっくりと降り立った。

「境界壁？」

フィフィの問いには耳を貸さず、アシュリーはサージェスへ向いて言った。

「馬車は置いていく。」

「…畏まりました。」

「取りあえず人を捜す事にする。」
「はっ。」

サージェスがそう返事を返すと、師団が一齐に礼をとる。それを見やってアシュリーは踵を返して歩き出した。置いていかれそうな雰囲気、フィフィは慌てて後を追った。

「アシュリー様！」

並んでその声をかけると、アシュリーは視線すら動かさずに答えた。

「急がないとまずい。」

「えっと、なんで…」

「ラナス国よりハークヴェル側へは道が断たれた。」

「断たれた？…って、事は戻れないんですか！？クライストに！」

思わずアシュリーの前に出て道を塞いでしまった。アシュリーは呆れた視線を流してきたが、フィフィは気にならない。

「境界壁をどうにかしないと無理だ。」

「どうにか出来ないんですか？」

アシュリーはフィフィを押しつけて再び歩き始めた。その勢いにちよつと押されたものの、フィフィはぴったりついていく。

「考える。この境界壁はハークヴェルの仕業だ。なら、狙いはクライストの陥落だ。」

「だったら！すぐに戻った方が??」

「ハークヴェルの魔力の源はあの植物だ！」

珍しく怒鳴ったアシュリーに、驚いて怯んでしまった。

「源を断たなければ、クライストどころか植物に浸食された国全てがハークヴェルに下る。」

「……………っ！」

アシュリーは苛立っていた。すぐにでも戻って護りたいのと、すぐに根源へ辿り着いて植物を消滅させたいのと、二つの衝動に駆られて、葛藤しているのだ。

それが分かって、フィフィは考えを巡らせて、今一度アシュリーに声をかけた。

「…サージェス達だけ送り出す事は出来ませんか？」

先程とは声音が違う。それに気付いて、アシュリーがフィフィと目を合わせた。しばらく見つめ合って、アシュリーが頷く。

「…出来ると思う。けど、人を捜すのが先だ。」

どうして人を捜す事が優先されるのか、フィフィには分からないが。

「はい、分かりました。」

言われた言葉に即座に頷ける程に、アシュリーを信頼していた。アシュリーの言葉は、信じられる。絶対になんとかしてくれる。

そう、思えるのだ。

門から十分程行くと街があつた。がらんとしていて、人の気配が感じられない。

試しに家々を訊ねて回ってみるが、人っ子一人見当たらなかった。

「アシュリー様……」

フィフィが見つめる先には、見覚えのある色彩が見えた。あの、花だ。花には風が纏わりついており、アシュリーとニルの術が作用しているのが確認出来た。

「……ラナス国は半分が海に面してる。……そのせいだろうな。」

ハークヴェルからの門は、ちょうど海側、陸側の間にあった。その延長線にあるこの街までも、すでに浸食されていたのだ。

「……これより海側へ行っても誰もいないだろう。陸側を探す。」
「はい。」

アシュリーを筆頭に、一団はピステイル・オス共和国への道沿いにある、ラナス国の城へと足を進めた。

これだけ浸食されているのだ。危機感を覚えた国民が城へ逃げ込んだり、他国へ逃れようとしている筈だ。そして王も。並の魔術師ではあの植物を食い止めるどころか、魔力を喰われて使い物にならなくなってしまうだろう。

「アシュリー様！前方に城が見えます。」

城を見据えたアシュリーを見て、フィフィが一步先へ踏み出した。

「俺、先に偵察に行ってきます。」

「は？」

目を丸くしたアシュリーに、フィフィはにんまり笑ってみせた。

「俺は貴方の護衛ってだけじゃないんですよ？助手でもあるんですから。」

「ちょっ……」

引き止める間もなくフィフィは走り去って行く。思わず手が伸びてフィフィを掴もうとしていたが、まあ、届く筈もない。そんなアシュリーを見兼ねたサージェスが、後ろから控えめに声をかけた。

「…我々師団を信頼して下さいるのでしょう。」

意外そうに振り返るアシュリーに苦笑して、サージエスは師団員二人を先へやった。

「……犬みたいだ……」

紐でもつけておきたい、とアシュリーは切実に思った。

（だいたい助手の仕事じゃないだろ…）

はあ、と溜息を吐く。面倒さえ起こさなければ放っておきたい。フィフィは、色々と騒がしいのだ。

態度は軽々しいものの、隠密よろしく、静かに走り行くフィフィの後ろに、師団員二人が追い縋る。

「お供致します、ルセ様！」

そんな二人をぎよつとしながらフィフィは振り返った。

「な、なに！？」

「ですから、お供致しますと……」

「そんな畏まった態度とらなくても！」

慌てたファイフィに、二人も慌てる。

「そういう訳には参りません！」

「そうですよ、ルセ様！アシユリー様の側仕えなのですから！」

「や・め・ろ！せめて俺らしいない時は！」

「……………」

二人はかなり困った様子で顔を見合わせた。

「しかし……」

「じゃあ畏まつたら罰な。」

「「ええっ！」」

仰天した二人を見て、面白くて笑ってしまった。

城は、クライストやハークヴェルと比べるのが間違いの様な気がするが、とても小さかった。砦のようにも見える。しかしこれが小国の城なのだと、師団員二人に教わった。

「……………なんか、静かだな……」

見上げる城は、寒々しい空の色と相まって、生き物を拒んでいるかのような雰囲気があった。

「よし。入る。」

「「お待ちを！」」

一歩踏み出したところで二人に肩を掴まれた。

「なんだよ。」

「もう少し危機感を持ってませんか？」

呆れた様子で言われ、フィフィは不満げに口を尖らす。

「元賞金稼ぎが、命を落とす様な真似するわけないだろ？」
「今は違いますから。」

苦笑された。ぱしりと肩を掴まれた手を叩き落として睨みつけた。

「なめんなよ。お前らもサージェスの部下なら、びくびくすんなよ。行くぞ。」

「「あつ……」」

城の門扉をくぐってすたすた進むフィフィの後ろに、二人は仕方なしにくっついて行くしかなかった。

（アシユリー様と似たり寄つたりの自分中心っぷりだな……）

呟いた二人の背後で、殺意が揺らめいた。

「「！？」」

振り返りざま、剣を引き抜いて振りかぶった。間一髪で避けた暗殺者は、二人の追撃を受けてあっけなく命を落とした。

「なんだ!？」

先へ行ったフィフィが矢をつがえて門扉の外に狙いをつけていた。一人目を始末した師団二人の後ろには、どこに隠れていたのか、ぞくぞくと殺意をみなぎらせた奴らが来る。

「刺客ですね。」

「落ち着いてんな……」

飄々^{フワフワ}と言つてのけた師団員に乾いた笑いが浮かぶ。引き絞った手を離すと、フィフィの矢は真っ直ぐに迫っていた刺客へ飛んでいく。

「俺は上へ行つて人を捜す。あんた達は……」

「ヴィーグです。」

「は?」

「俺はジルキスです。」

「は?」

二人はにやりと笑つてフィフィを見やった。

「俺たちは貴方の応援に来たわけですから、お供しますよ。」

「いやでも」

「アシユリー様は大丈夫です。サージェス師団長がいらっしゃいますからね。」

「……………」

ぽかんとするフィフィが可笑しかったのか、大勢の刺客が迫っているにも関わらず、二人は楽しそうに笑い出した。それを見て、フィフィも思わず口が笑みの形を取る。

「……じゃあさっさと行くぞ！」

「そこなくちゃ！」

「行きますか！」

駆け出したファイフを追って、ヴィーグとジルキスも走り出した。その三人を追いつけるのは、無数の殺気。上まで上り詰めてしまったからどうなるかなんて、今は考えない事にした。

必ず、アシュリーや王師第一師団が辿り着く筈だ。

「アシュリー様、あれを。」

険しくなったサージェスの声音に、アシュリーは眉をひそめた。

「……愚かだな……ゼル又陛下は……」

アシュリー達を滅ぼす為なら、ラナス国など取るに足らないという事か。はたまた周辺国から非難されようとも、それを潰すだけの何かがあるのか。

そのような考えも力も、愚かなだけだ。

「サージェス、手加減は無用だ。」

「心得ております。」

サージェスが一步踏み出した。師団がそれに応えて剣を抜き、構

える。

「アシュリー様とフィアニス様を、命を賭してお護りせよ！」

空気を震わす声が響き渡る。それを見て、アシュリーが目を閉じた。

「一部隊、行け！」

サージェスの命に呼応して、五人が前方へ突っ込んでいった。アシュリーの詠唱がそれを援護する。斬り込んでいく彼らの周辺に不可視の壁を創り出し、彼らの身体を重力から解放する。

道を開ける役目を果たす為に一部隊が激烈に動けば、その後を二部隊が進んでいく。そこには、当然アシュリーもいる。その背後を護る三部隊も苛烈だった。

クライストに仇なす者には、誰一人容赦しない。

砦のような城の螺旋階段を、軽快に駆け上がっていく。後ろに続くヴィーグとジルキスが追手を斬り捨て、フィフィが後方を打ち崩す。

「俺たち良いコンビですよねぇ」

ヴィーグが呑気にそんな事を言って、ジルキスがにやついた。

「ほんとに。これでフィアニス様が女だったら、恋でも出来るのに。」

フィフィの矢があらぬ方向へ飛んでいった。

「.....」

無言でそれを見やって、ヴィーグとジルキスは真面目に言った。

「大丈夫ですよ。いくら飢えても同性には手え出しませんから。」

「そうですよ。いくらなんでもそれはないです。」

「.....ははは.....」

（こいつらだけには女だつてばれない方が良い気がする...）

フィフィは頭を振って、目の前に集中した。

螺旋階段を昇りきると、今度は迷路のように通路が別れていた。躊躇わず走りながらも、驚く程思考の似通った三人は三手に別れた。敵の方が戸惑ったようだ。

（ざまあみやがれ！絶対に巻いてやる！）

フィフィは目についた扉に体当たりして入り込んだ。そこにはただ、上下階へ通じる階段だけがあった。

（どっちへ…）

一瞬戸惑い、下の階へと駆け出す。後ろから追いついてる足音は、もしかしたらフィフィの姿が見えなかったかも知れない。

（だいいいけどな。いくらなんでも多勢に無勢だからな…）

なるべく足音を立てないように、なるべく階段をすっ飛ばして駆ける。だんだんと光が入らなくなる階段は、足下さえはつきり見えなくなってきた。

（まずいな…）

灯りが欲しい。そう思った瞬間、耳元から光が飛び出して、フィの足下を照らし始めた。

「ウイスペル！」

忘れていた。

最近、あまりに大人しかったから。なんて言ったら即座に耳飾りに戻ってしまうだろうから言わないが。クライストにいた時はちよくちよく出て来ていたのに。

「助かる。ありがとな。」

声をかければ、相変わらずの可愛らしい鈴の音が返ってくる。それにちよつとほつとして、フィフィは暗い階段を駆け下りた。

駆け上がっていた螺旋階段は、砦の内壁に沿って造られていた。そして、今駆け下りているのは、螺旋階段の内側に造られた階段だった。こちらは螺旋ではなく、直線だ。

何度か角を曲がっては降りる。残念ながら追手は完全には巻かれず、人数は分らないが、追いつかれたら厄介だ。

「!？」

しかし、通路は無情にも、唐突に終わりを告げた。

「なんで……」

壁、だった。道が途切れている。耳を澄ますと、幸いにも追手がここへ辿り着くにはまだ少しかかりそうだ。

（どうする……？ ウィスperlに手伝ってもらえば追手を突破出来るか……？）

後ろを振り返るが、駆け下りて来た階段以外のものは見当たらない。

かった。

（…やるしかないよな…）

まあ、こんな狭い所だ。狭い所には狭い所なりの戦い方がある。

（あ、そっぴやエウエラもいたっけ。）

おまけに大精霊を思い出して、よし、行くか。と気合を入れたのだが。

「？」

ウィスperlが、行き止まりの壁の前に浮いていた。じいっと、壁を見ているような気がする。

「ウィスperl？」

そつと声をかけるが、微動だにしない。

（一体どうしたんだ…？）

耳を澄ますと、足音が近づいてきている。

「ウィス…！？」

光が、呼吸しているように見えた。ひと呼吸ごとにウィスperlの光が強くなっていく。それと同時に、ちりん、ちりん、と音も響く。

（何してるんだ……？）

訝しんで、その壁を見た。すると、わずかに文様が現れていた。

（え……）

文様は、ウイスペルの呼吸に反応するように、徐々に深く溝を刻み、はつきりとしてきている。やがて全ての文様がくつきり現れると、壁が揺らいで、消えてしまった。

「……………これ…」

（アシュリー様の回廊にあるのと、同じようなやつか…？）

驚いてしまつて動かないフィフィを、ウイスペルが少し先に進んで呼んでいる。

（ウイスペルの話しかけてきてる事…いつの間にこんなに分かるようになったんだろ？）

思わず苦笑しながらも、フィフィはウイスペルについて奥へと足を進めた。壁があつた所を通り過ぎた途端、消えていた壁が元に戻つた。

「おお…」

こんな時でもちよつと感動してしまう。前を向くと、ウイスペルは行くべき道が分かっているらしく、ふわり、ふわり、と進んでいく。暗い石造りの通路を、仄青い光が漂う様は、少しだけ不気味で、神秘的だ。自分の足音と息づかいしか聞こえない。通路もどこまで続いていくしか分からない。

（そっぴやエウエラに拉致された時も…こんな風に不気味な空間が続いてたな…）

なんて考えていたら、急にウイスペルが耳飾りへ突っ込んで来た。

「えっ！？なに、どうしたんだよ…」

突っ込んだきり沈黙してしまった。光は灯してくれているが、耳飾りから動かない。

「ウイスペル…？」

そつと耳飾りを指先で撫でてやる。するとほんの小さな音で、返事してくれた。

「いいよ。そこにいれば。」

そう言って、ともかく歩き出そうとした。

通路の先に、いつの間にか人が立っていた。

（いつ……？）

今も、気配が薄い。

（何者……）

そいつを見据えて、進んでいく。怯んでなんかいられない。後ろにはハークヴェルの刺客がいるし、別れたヴィーグとジルキス、ア

シュリー達もいる。そしてここ、ラナス国の人達も。

勇んで進んでくるフィィイを見つめて、その人は微笑んだ。とはいっても顔は目元までフードで隠れているし、足下までマントで覆われていて、正体が見えない。十分に距離を詰めて、フィィイは誰何した。

「お前、誰だ？ラナス国の国民か？」

友好的ではないフィィイの態度にも、何故だか嬉しそうに微笑む。そして、ゆっくりと口を開いた。

「また会えて嬉しいよ。」

「……？」

聞いた事がある。少し低めの、心地良い声音。啞然と見つめるフィィイの前で、男は俯きがちだった顔を少しだけ上げた。

「あ、お前……！」

レシテからハークヴェルへ抜ける溪谷で出会った旅人だった。深い紫色の瞳はそういない。見知った人物だったが、フィィイはさつと緊張した。それを見て男は、警戒する子犬を見るように笑った。

「そう警戒しなくていい。俺は今、ラナス国と侵入者の仲介をしているんだ。」

「仲介だと？」

思いつきり眉を顰めた。

「お前は何者だ。」

くすり、と男は笑った。今までとは違い、問われた事を楽しむような。

（あれ…？なんかこういう笑い方見た事ある…？）

既視感に囚われたフィフィに、男は一步近づいた。気配が薄く、どんなに近づいても危機感が沸かない。男は、そつとフィフィの顔を覗き込んだ。綺麗で、不思議な魅力を持った瞳が、フィフィの視線を捉えて瞬いた。

「俺はウォルスという。お前は？」

静かで、心地良い声音。不思議と落ち着く瞳。一瞬、今が大変な状況だということを忘れそうになった。

「ウォルス…？」

はっと我に返って、聞いた名前を繰り返した。

「魔人！？」

自分で叫んだ言葉に驚き、一步後ずさった。ウォルスが楽しそうに笑う。

「まあ、そう呼ばれているな。」

「な、なんで…これも“手伝い”か？」

するとウォルスの瞳が煌めいた。

「よく知ってるな。さてはアシュリーに聞いたか？」

「……………それで、仲介ってのは？」

ウォルスといると調子が狂う。ここだけ空間が違ふみたいだ。

「言った通りの意味だ。ここへ入れたのは光の精のおかげだろうが、ここから先はそうはいかない。」

「光の精……ってウイスペルか。で？」

今頃あの二人はどうしてるだろう。アシュリー達は。そう考えた
ら急に焦ってくる。

「ラナス国を救う事が出来ると誓約するのなら、案内しよう。」

「俺が勝手に約束していい事じゃない。」

即座に答えたフィフィに、ウォルスは楽しそうに笑った。

「そうか。それなら戻るか？」

「戻るか！さっさと案内してくれよ！」

いきり立ったフィフィに胸ぐらを掴まれても、子犬のじゃれつき
程度にしか思わない様子でウォルスは笑う。

「誓約するなら。」

「そういうのはアシュリー様にしろ！」

「お前は絶対にしないんだな？」

「だから！俺が勝手に決めていい事じゃねえんだよ！」

ゆさゆさ揺すられても動じない。

「ああもう！」

突き放して叫んだ。もどかしい。

「俺はただの弓術師で助手で護衛だ！国を救う力なんてないんだよ！」

叫んで睨みつける。動じない瞳が憎らしい。

「だけど助けようとしてんだろ！さっさと案内しやがれ暇人め！」

「暇人……」

くつくつく、とウォルスは笑った。肩で息をするフィフィは、それを見てぐつと拳を握る。ウォルスはますます可笑しくなったように、腹を抱えて笑い出した。

「もういい、どけ！」

たまらず、腰に忍ばせていた短剣を手にして斬り掛かった。魔人なら多少斬りつけても死なないだろう。それに、怪我を氣遣っていられる程の余裕もないのだ。

ひとつ飛びで斬りつけた。避けたり、怪我を負えばそれで良かった。それで道が空く。奥へ進める。だが。

「！？」

キーン、と甲高い音が辺りに響いた。厚い氷を割った様な感触が手に伝わった。

「……っ！」

フィフィの短剣の先には僅かな隙間があり、その下にはウォルスの手があった。ほんの少し短剣が下がるだけで触れてしまうのに、まるで刃を合わせているように短剣が動かない。ぐっと力を入れても、びくともしなかった。

（どういう事だ……！？）

くすり、とウォルスが笑った。ぱつと身を翻して飛び退く。ゆっくりと手を下ろしたのを見て、フィフィは声を絞り出した。

「……どういふ…事だ…」

「お前は魔術に疎いんだな。」

「今のが魔術だったのか！？詠唱もなしに！」

怒鳴るフィフィに、ウォルスはどこまでも静かに笑う。

「詠唱のない魔術も見て来た筈だが？ラナス国へ入った時に。」

「…あれは、発動条件が…陣が引いてあった筈だ。」

するとウォルスは、面白そうに首を傾げた。

「陣についての知識は多少あるのか。」

「俺が無知だって言うのは分かってんだよ！」

「まあそう怒るな。案内してやる。」

「だから！……へ？」

予想外の言葉が聞こえて、思わず肩の力が抜けた。拳だけは握り

しめたままだ。

「お前の気持ちが弱いものではないというのは分かった。だから、案内してやろう。」

「……………そりゃ、どうも…」

勢い込んだ気持ちが収まりきらず、もやもやしたまま一応礼を言った。

「素直だな。やはり、お前は良い女だ。」

「……………」

変な台詞に眉根を寄せる。こいつは本当に調子が狂う。

「じゃあさつさと案内しろ。」

「仰せのままに。お嬢さん。」

「やめる気持ち悪い。」

心底嫌がるフィィィを見て、ウォルスはくすくす笑いながらも歩き出した。げんなりしながらも後を追う。その耳元で、ウィスペルが不安気に揺れた。

フィィィと別れて刺客を惹き付けつつ走り回っていたヴィーグとジルキスは、分かれ道を走っているうちに合流してしまった。

「あつ、何やってんだよ！」

「お前こそ！纏めてどうすんだよ！」

罵り合いながらもぐんぐん走り、時折振り向き様に刺客を切り伏せる。

「まずいな……」

「言つなよ。嫌になるだろ。」

ちらりと振り返ると、長い刺客の列が廊下の果てまで見える。

「フィアニス様…無事だろうな…」

「無事だろ。ヴィルジウス殿下が認めた腕前だぞ？」

「それもそうか。」

にやりと笑い合つて前を見据えた瞬間、二人の顔から余裕が消えた。

「……まずいな。」

目の前は通路の終わり。外へ誘うアーチの先は、半円の露台が見える。当然、それより先は翼でもなければいけない。

「俺ここで終わりか!？」

「逃げただけで!？」

嘆き叫ぶ二人には、命の危機だというのに緊張感がない。そんな二人がアーチをくぐろうとした時。露台の床に陣が浮かび、待ち望んだ人が現れた。

「……????アシュリー様!!」

光を纏わせたその姿は、神々しさすら感じさせた。閉じられていた瞼が開くと深い群青色の瞳が現れ、それと同時に纏っていた光が砕け散った。そして、幻想的だった大魔術師は、一気に現実へと降臨したのだった。

「???^{うが}穿て、雷光！」

普段詠唱する時とは違い、歌う様な旋律ではなく、言葉が力を持つて空間を震わせた。それに応えるように、突如たくさんの稲妻がアシュリーから刺客達へと走った。ほとんどが衝撃で倒れていくのか、かろうじて避けた、または堪えた者達が容赦なくヴィーグとジルクスへ襲いかかる。

だが、アシュリーという救世主を得た二人は、先程の弱気はどこへやら、猛然と反撃を開始していた。雷撃を避けた敵をすかさず斬り倒し、隙をついてくる敵を斬り伏せ、とてつもない勢いで押し返していく。その勢いに刺客は怯み、たじろいで後退する者すら出始めた。

アシュリーが転移してきて数分も経っていない。が、その影響力は凄まじいものがあった。

「アシュリー様！フィアニス様は中に！」

ヴィーグが叫ぶと、アシュリーが目を見開いた。

「一緒じゃないのか!？」

（今気付いたのか…）

とは言えない。ヴィーグは頷いた。

「ここはもう大丈夫です！フィアニス様の元へ！」

ジルキスが叫ぶと、アシュリーは頷きもせず、駆け出した。魔術で敵をなぎ倒していく様は圧巻だった。しかし、見送る二人は呟いた。

「アシュリー様が全力で走ってる……」

それはかなり貴重な姿だった。

「この先に国王もいる。」

ウォルスは振り返り、一歩横へずれて道を示した。訝しみながらもウォルスの隣に立ち、指し示された道へ向く。ウォルスへ背を向ける形になった。そして、一歩進んで立ち止まった。

「！」

壁が、目の前にあった。

（計ったな!）

振り返るとすぐそばにウォルスの柔らかい眼差しがあった。見下ろされて、どこにも逃げ場がない事を悟る。

「てめえ…！」

睨み上げるフィフィを楽しそうに眺め、ウォルスは口を開いた。

「名前を聞いていなかった。」

しれっとそんな事を言ってくる。

「誰がてめえに！」

「それなら、外へ送ってやろうか？」

「！」

（こいつ…！脅しやがって…！）

「…フィアニスだ。」

「それは男名だろ？」

「……………」

（こいつに言うのがすげえむかつく！）

「……………ルセ。」

「俺は名前を聞いているんだが？」

すっ、と首の横に手を置かれ、フィフィはぐつと奥歯を噛み締めた。

「……………ファイファイ。」

すぐにウォルスは一步離れた。

「ファイファイ。そうか。」

嬉しそうに笑う。その面を殴りたくなったが、それで城の外へ追
い出されては堪らない。

「さつさと出しやがれ！」

「人は物じゃないだろうに……」

ウォルスは笑いながら壁に手を当てた。ふわり、と一瞬空気が軽
くなったかと思うと、行き止まりだと思っていた壁に文様が浮かび
上がった。

（ウィスperlが開けてくれた時と同じだ……）

文様は異なるが、同じ魔術が使われているのだろう。全ての文様
が輝くと、水面のように波打って壁が消えた。

そこには、かなり広い広間のような部屋があった。奥に縮こまる
のはラナス国の国民だろう。そして、中央に立っているのが国王だ
ろうか。

「ラナス王。クライストが手を貸してくれるようだ。」

「なに……？」

やはり、返事を返したのは中央に立つ人物だった。背を向けてい

たその人はゆつくりと振り返る。初老の、鋭い目をした人だった。

「その者は？」

「アシユリー＝ウィルレイユの助手で、ルセと言う。」

（あれ…）

てつきりフィフィだと言うのかと思った。女名を隠しておきたいというのを考慮してくれたんだろうか。

「あの大魔術師が、ここへ来ているというのか？」

驚くラナス王へフィフィは声を上げた。

「あんた達はあの植物に追いやられて、こんなところにいるんだろ？あれにはハークヴェルが一枚噛んでる事が分かった。アシユリー様はその調査で来た。そしたら国境が魔術で閉ざされたんだ。」

「やはりまだ閉ざされておるか…。」

「ついでにこの城へ入った途端にハークヴェルの兵士がわんさか襲って来た。今も皆が襲われてる。協力してくれないか？こっちは二十人くらいしかないんだ。いくらなんでも分が悪い。」

「……………」

ラナス王は射る様な目でフィフィを見つめた。小国の王といえども、その目はとても力強かった。ごくり、と唾を飲む。

「…………クライストはまことに我らを助ける為だけに動いておるのか？」

「は？」

不愉快さに眉をしかめるフィフィを見て尚、ラナス王は続けた。

「先程も転移魔術を使ったようだが……この意味が分からぬ訳ではあるまい。」

息を、吸い込んだ。

「あんたは馬鹿か！」

「なっ……」

ざわりと全員がいきり立つ。だが、フィフィは止めなかった。

「自分たちがどういう状況にいるのか分かってんだろうな！孤立無援なんだぞ！？アシュリー様だつてすぐには境界壁が壊せないって言つてんだ！それなのにハークヴェルの兵士がたくさんいる。……これでもぐだぐだ言う暇があんのかよ！」

フィフィの態度に腰を浮かせた彼らだったが、ウォルスの静かな言葉にははっとした。

「……ここを見つけるのも時間の問題だろう。今まで大人しくこの城を囲っていたのは、アシュリーを待っていたからだ。今はもうその必要がない。」

「ウィルレイユ様を……？」

思案するラナス王を見て、フィフィは我慢出来ずに叫んだ。

「だから！クライストが狙われてんだよ！さっさと奴らを追い払いたいんだ！」

「帝国の争いに、我らは巻き込まれたというのか！ふざけるな！」

（このクソジジイっ！）

もどかしくて悔しくて、爪が食い込む程きつく拳を握りしめた。

「ヴァグル陛下……」

はっとして振り返った。

「……え？」

そこには、荒い息のアシュリーがいた。汗までかいている。

静まり返った部屋の中央へ、アシュリーが足を進める。皆黙ってそれを見守っていた。アシュリーはラナス王の前へ行くと、躊躇いなく膝を折って頭を垂れた。

「何を……！」

帝国の大魔術師の行動に、不安気なさざめきが広がる。

「ハークヴェルはクライストを落とす為に、嵐と植物を利用しました。我が国は今、危機に晒されています。」

「そなたが帰還する為に我らを欲するのか。」

「いいえ。ここで帰っても嵐と植物は消えません。元を絶つ為には、まだ嵐を辿らなければなりません。」

その発言に、ラナス王は息を呑んだ。

「そなたが戻らずして、クライストは…」

「分かりませんが、植物を放置すればクライストのみならず、植物に侵された国全てがハークヴェルに支配されるでしょう。」

「なんと…まことか。」

「まことです。ですからヴァグル陛下。ここにいるハークヴェルの兵士を蹴散らす為、お力をお貸し願えませんか？」

ラナス王はしばしアシュリーを見つめた。その目に戸惑いが見えた気がして、フィフィは息を詰める。アシュリーの言葉は、ちゃんと届いている筈だ。

細く、息が吐かれた。見守る全員に届く声で、ラナス王は言った。

「我々を捨て置く事も出来ただろう。……そなたの…クライストの温情に感謝する。それに応えよう。」

喜んだ次には驚いた。ラナス王に応えて国民が血氣づいたのだ。

思わずアシュリーに駆け寄った。

「アシュリー様！」

駆け寄ったフィフィをじっと見て、それから小さく息を吐いた。そして、睨んだ。

「偵察に行ったのになんで戻らずに突っ込んでいくわけ？」

「へ？」

良かったですね、という言葉が吹っ飛んだ。ついでに無事で良かったという気持ちも。

「それものこのウォルスについて行くってどういう事？」

「え、なんでその事……」

（そういえばウォルスは？）

きよろきよろと辺りを見回すが、目立つ男の姿は見えなかった。

「聞いてる？」

「え？ああ、はい。もうついて行きませんか。必要もないですし。」

「……………もういい。」

素直に謝ったのに呆れられた。溜息一つついて、アシュリーはフィィを押しどけてラナス国の住人に言う。

「我々は城の中を。貴方がたは外をお任せしてよろしいですか？」

すると、ラナス王が大きく頷いた。

「任せておけ。」

「……それでは、ご武運を。」

「そなた達もな。」

言葉を交わし、すぐにアシュリーは踵を返した。フィィも慌ててついて行く。

「あの二人には会いました？」
「だれ？」

言うと思った。フィフィは苦笑するしかない。

「えーっと…ヴィーグ…と…あ、ジルキス！です。」

「ああ…会った。無事だ。」

「サージェス達も？」

「君は自分の心配をしる。多勢に無勢だろ。」

「それは…確かにそうですね…運が良かったです。」
「……………」

ウィスperlが開いてくれた通路まで戻ると、階段の上から駆け下りてくる音がした。

「下がってください。俺が出ます。」

すつと一步フィフィが前に出ると、アシュリーは小声で詠唱を始めた。ふわりと身体が軽くなった。

（なんかしてくれたのかな…）

なんだか嬉しくなる。そして、闘志がざわざわと沸いて来た。体中の感覚がぴりりと鋭くなり、空気が冴える。

壁にぴたりと身体をつけて身を隠すと、足音が迫るのを待つ。

気配を探る。敵が迫る。気配が、迫る。

「ぐあっ!？」

敵の姿がようやく見えるかという時に、フィフィは矢を相手の肩目掛けて突き刺した。そのままその横腹を渾身の力で蹴飛ばす。

「うらあっ!」

蹴飛ばされた男はよろめき、すぐ後ろに来ていた仲間を道連れに向いの壁へ倒れ込んだ。すると、壁と床に亀裂が入り、音を立てて彼らを半分呑み込んだ。

「げっ!これ…」

振り返るとアシュリーが涼しい顔をしていた。

（こ、こええ…）

「上まで行く。さつさと片をつける。」

「あ、はい…」

早く行け、と目で促され、フィフィは気合いも新たに階段を駆け上り始めた。

「後ろ!」

「分かってんだよ!」

相変わらずぎゃあぎゃあと言い合いながら敵を斬り伏せる二人は、さすがに息が上がってきていた。

「右！」

「後ろ！」

何故だかお互いのフォロ―をする二人には、余裕があるのかわいのか分からない。そんな二人に喝を入れるかのように、頭程の大きな炎の弾が二人の隙間を通り抜けた。

「あつっ！焦げたぞ！」

「肉が焦げなくて良かったな……」

言いながらジルキスは、炎の弾を放り込んだ魔術師を倒した。

「うじゃうじゃ来るな」

「これでクライストも同時攻撃されてんのかな……」

「……………」

それっきり、二人は黙って敵をなぎ倒しにかかった。

階段を駆け上がりながら敵を倒していく。ファイが弓と短剣で攻撃していくのを、アシユリーが的確に援護する。

（魔術師と組んで戦う事なんて無かったけど……すっげえやりやすい！）

身体が軽いのは魔術のおかげだろうが、気持ち良い程軽快に進んでいける。恐ろしい程の数の敵が雪崩れ込んでくるのに、それが全然不安にならない程だ。

「アシュリー様！上まで行ってどうするんですか！？追い込まれますよ！？」

戦いながらも叫ぶと、アシュリーも叫び返した。

「下からサージェス達来る！それで終わりだ！」

「分かりました！」

襲いくる敵をなぎ倒し、二人で駆け上がっていく。その背後からも、敵はアシュリー達を執拗に追い立てていく。

ファイ、ヴィーグ、ジルキス三人が別れた螺旋階段の終わりまでくると、今度は外へ向かうアーチの向こうに螺旋階段があった。外壁に沿って上へと続いている。そこを走り、大勢の敵が姿を晒したところでアシュリーは一気に魔術を放った。

「???裁きを！聖炎！」

アシュリーがかざした手の平から、黄金の炎が生き物のようになって襲いかかっていく。後には倒れ伏した敵が残った。

（すげえ…大魔術師っていうだけあるって事か…）

正直、こんなに頼もしい存在だったとは思ってもみなかった。今更ながら失礼だったと思い直した。

（終わったらもうちょっと敬おう。）

そう思っただけでちやうど後ろを振り返ると??。

「アシュリー様！大丈夫ですか！？」

「っ……」

普段運動などしない人間が、さっきから走りっぱなしなのだ。しかも、階段がほとんど。フィフィと同じ体力の筈がなかった。

つまり？？体力が切れた。

「アシュリー様……」

駆け寄りつつも、まだ新手が近づけない事を確認した。肩を貸して先を急ぐ。

「とにかく今のうちに最上階に行きましょう。」

「ああ……」

返事もやつとだ。

（はあー…今思い直したばっかなのに…）

ちよつと遠くを見ながらそう思っていると、ふいに前方から影が飛び出してきた。

咄嗟にアシュリーをその場に押さえつけ、突き出された剣を避ける為に飛び退いた。剣先が喉をかすめ、外壁に足を取られてバランスを崩した。

（やばっ???)

この高さから堕ちれば、命はない。

アシュリーは押さえつけられた直後、顔を上げるとフィフィが足を取られて外壁の向こうへ消えかけているのが見えた。追い打ちをかけようとする敵を一撃で仕留め、外壁へ駆け寄って下を覗き込む。

「っ…な…」

フィフィは、外壁にしがみついていた。

「アシュリー様、さっきの奴は!？」

「大丈夫だ。それより…」

フィフィは、想像していたような焦った顔ではなかった。むしろ。

「…平気、なの？」

「ええまあ。しっかり掴めてるんで。そこどいてもらえますか？今から上がります。」

「あ、ああ…」

戸惑いながらもフィフィを見つめたアシュリーの頭上、上の階の螺旋階段を、敵が駆け下りてくるのが見えた。

「アシュリー様！上から敵が来ます！」

「！」

はっと螺旋階段を見上げた。

「!？」

上から、外壁を掴んでいるフィフィの手すれすれに矢が突き刺さった。

「……………」

これは、まずい。

「ちょっと…何してるんですか!？」

「早く上がれ!」

アシュリーがフィフィの腕を掴む。が、所詮アシュリーの力ではフィフィを引き上げる事は不可能だった。

「いいから離して下さい! 掴んでたら一緒に落ちるかも知れな」
「うるさい!」

(う、うるさいって…)

アシュリーを睨んだその時、背後に剣を振りかぶる敵が見えた。アシュリーは気付いていない。

「アシュリー様っ!」

「!？」

アシユリーが斬られるところなんて、見たくない。
最悪だ。

自分のせいで。
アシユリーが。

一瞬目の前が真っ暗になった。が、次いで聞こえた悲鳴に我に返った。

「うわあああああ！あ？」

「うるさいっ！」

怒鳴るアシユリーの声が聞こえにくい。それ以上の大きな音が耳に容赦なく入ってきていた。風だ。

（お……落ちてる……！？）

二人は、もの凄い勢いで落ちていた。アシユリーは逃げる事も、手を離す事もせず、自ら飛び降りたのだ。正確にはしがみついている。結果、斬られるのは避けられたものの、今だ命の危機には変わらない。

「な、何やってるんですか！」
「う、うるさい」

心無しかアシュリーの声が弱々しくなっている気がする。

（もしかして…）

「アシュリー様！？」

「なに…」

「気を失っちゃ駄目です！起きて！」

「うるさ…」

「起きて！」

必死にアシュリーに叫びまくる。アシュリーの掴む手が弱くなってきたので、逆にファイファイが抱え込んだ。

（どうすんだよこれ！あたしじゃ何も出来ねえよ！）

なんとか出来るかも知れないのはアシュリーだ。そのアシュリーは今、意識を保つのに精一杯。

「アシュリー様しっかり！死にますよこのままじゃ！」

「うるさ…」

「アシュリー様ああ！」

「っ……………」

落ちている。もの凄い勢いで頭から落ちている。城は天まで届く高さ…ではない。地面がみるみる近づいてくる。死ぬ。確実に。

「誰かーっ！アシュリー様ー！」

「っ…さ…」

『誰かってなんなのよ！』

「へっ？」

（誰だ？なんだ？）

思わず落ちながら空を見つめる。

『貴女ねえ！この私がついてるのにさっぱり忘れてるってどういう事よ！』

「あ。」

（忘れてた。完全に。）

「怒るくらいなら助けてくれよ！アシュリー様気絶しそうなんだけど！」

『情けないわね…。助けてあげてもいいけど。』

「早く！死ぬから！」

『せつかちねえ…。』

その言葉が聞こえた途端、急激に落下が止まった。ぴたりと止まったわけではないが、風の抵抗を感じない程、のんびり話しが出来る程に、ゆっくりとなった。

（すげえ…最初からエウエラに頼れば良かった…！）

思わず涙ぐみそうになった。

『私のありがたさ、分かった？』

「分かった！もの凄く分かった！あんたは神だ！」

嬉しいついでにしっかりとアシュリーを抱え直した。

『神じゃなくて大精霊よ。頭悪いの？貴女。』

「可愛くねえ……」

『なんですって？』

「なんでもありません……アシュリー様！もう死ななくて済みましたよ！」

「うるさい。ほんとに。」

落下が止まり、アシュリーは徐々に意識がしっかりしてきたようだ。言葉がしっかりしてきた。

「大精霊エウエラ……お救い下さり、感謝する。」

（え、エウエラって偉いんだ……）

『今聞こえた助手の声は聞かなかった事にしてあげる。アス。強くなる事ね。護りたければ。』

「……肝に銘じます。」

苦笑しながらそう答えたアシュリーは、フィフィが今まで見た事がない表情だった。

『じゃあね。後はあなたがなんとかしなさい。』

「言われなくても。」

（つていつかこの声、アシュリー様も聞こえてたんだ…）

もぞり、とアシュリーが身じろぎした。何かと思って顔を合わせると、ぎくりと身を強ばらせた後、さっと視線を外してアシュリーが言った。

「…ちょっと腕緩めてくれる？」

「あ。すいません。」

落ちないように少し緩めると、ほっと息を漏らしてアシュリーは詠唱を始めた。

「？？？汝は我を護る翼。大地に降り立つその時まで、我らを護り給え???」

ふわり、と足下が軽くなった。と同時に抵抗を感じ、ともすれば空に立てそうな気配がする。

「これ…」

「立って。」

言われて、ゆっくりと態勢を変えてみる。ぶよぶよしたマットに立つように不安定だったが、それでもなんとか立ってみると、意外にもしっかりと立てた。

「すげえ…」

「ほら、もう地面に着く。」

「あ、ほんとですね！良かった…今回は駄目かと思いました。」

「ほんとに…」

それから少しして、二人は無事に地面に降り立った。

その後、アシュリーとフィフィはもう一度城の最上階へ転移し、サージエス達と挟み撃ちにしてハークヴェルの兵を叩きのめした。しかし残った数人の魔術師が骸ごと転移して逃げてしまったのだ。おそらくはハークヴェルへ逃げ帰ったのだろう。

「……………」

「どうしたんですか？」

アシュリーが消え失せた転移陣を睨みつけていた。訊くと、顔をしかめて言った。

「……彼らは無事でいられるのかと思って。」

「彼ら？」

無事を祈る相手と言えば、クライストだろうか。

「ニル様達なら…」

「違う。ここにいたハークヴェルの兵だ。」

「は？」

敵を案じるなんて、アシュリーはこんなにお人好しだったのか。そう思って思い切り見つめてしまった。

「嫌な予感がする…」

(……またか……)

アシュリーの予感とはんでもなく当たっていきそうで、怖い。

「じゃあ早く戻りましょう。」

「は？」

軽い言葉にアシュリーが睨んできた。

「だから、早くなんとかして、さっさと帰りましょう。」

ファイファイだってクライストの国民だ。自国が侵略されようというのに放つたらかしに出来るわけがない。自分が生まれ育った国は、やっぱり好きだ。フォルクローゼだっている。絶対に、助けたい。

「……………」

二人は目を合わせて、小さく頷いた。

「ウィルレイユ殿。」

振り返ると、ラナス国の王に続き、兵、国民、とおそらくは全員が集まっていた。こうしてみると本当に小国なのだと思う。クライストでは全員がこの場に集まるなんて事は出来ないだろう。何せ、人口が多過ぎる。

「ウィルレイユ殿…そなたには…いや、クライストには、力をお貸し頂き感謝する。そなたらの力がなければどうなっていたか…情けない事ではあるが、本当に救われた。」

アシュリーは一步前へ出て、躊躇いなく跪いた。それにまたさざめきが広がる。いつの間にかアシュリーとフィフィの後ろにはサージェス達が戻ってきていた。ヴィーグとジルキスも無事なようだ。フィフィと目が合うと軽く手を振った。

（軽いやつら…）

だが、それが緊張を和らげているから助かる。

「ヴァグル陛下。こちらこそ、お力をお貸し頂き感謝する。おかげで一人も欠ける事なくすみしました。」

「……ウィルレイユ殿……」

ラナス王は何か言おうとしてしばらく悩み、結局は首を振って諦めた。

「…さて、では我々は…」

「今はここに留まっただけでは危険です。」

心を見透かしたようにアシュリーが言うと、ラナス王はため息を吐いた。

「正直なところ、我々ではこの植物は手に負えん。そなたには策があるのだな？」

「あります。ですから今は避難して頂きたい。」

「国を出ると申すか…」

ざわざわと、不安と不満が入り交じった囁きが交わされる。アシュリーはただじっと待った。

「我らが国を出れば、その隙に国土を奪われるやも知れぬな？」

「その可能性はあります。が、植物に浸食されているのはここだけではない。それに今この土地を占拠しても、植物に侵されるだけで得るものはない。あまり心配されずともよろしいかと。」

「……万一、という事はある。」

王は国民の住む場所を確保する義務がある。故にラナス王はしづっていた。そんなラナス王に、アシュリーはしばし考えを巡らせて、あまり気の進まない顔で言った。

「ご心配であれば、ここへ天魔を置きましょう。」

「何？」

（天魔ってなんだ？）

ラナス王の顔色が変わった。怒っているようにも見える。

「一匹いれば十分でしょう。この植物が消え去るまでの間です。如何ですか。」

「天魔だと……！」

まるで、おぞましい物を見るかのようにだった。恐れているのが分かった。

（そんなに怖いものなのか……？）

ラナス王は苦悩していた。アシュリーはただ静かに答えを待つ。そして、大きな溜息は吐かれた。

「…………… 契約は我が言葉で行わせて頂こう。それで良いか。」

「構いません。」

言つと、アシュリーが立ち上がった。フィフィは黙って様子を見る。

「ここへ転移陣を開いてもよろしいか。」

「…致し方あるまい。」

許可を得て、アシュリーは詠唱を始めた。するとウィスperlが耳飾りから飛び出し、アシュリーの正面へ飛んでいった。

（なんだなんだ？）

戸惑うフィフィは、見守るしかない。

「??? 汝は“うつろい”。我はアシュリー＝ウィルレイユ。我と誓約を同じくする者へ道を繋げ。彼の者はユンファソルシア＝ミット。天が産み落とした命である??」

「ユンファ…?」

思わず声に出して呟いていた。何故今ユンファをここへ喚び出すのだろう。戸惑う間にも陣は光り輝き、ウィスperlが陣の上をひらひらと飛び回っていた。

（あ…光りが…）

まただ。光りが呼吸しているかのように強弱を繰り返す。陣の輝

きが増していく。溢れる光りの中に、突如、人影が浮かび上がった。

（ユン！）

フィフィがユンファの姿を確認した途端、光りは碎け散って消え失せた。そしてそこには、まだ幼い魔術師が、緊張した面持ちで立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876y/>

大魔術師と助手

2011年12月19日17時47分発行